

市原市村^{むら}上^{かみ}川^{かわ}堀^{ほり}遺跡

2000

市原市道路建設課
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県のほぼ中央に位置する市原市は、市内を南北に貫流し東京湾に注ぐ養老川を擁し、気候温暖で自然環境に恵まれた地にあり縄文時代からの貴重な遺跡が数多く所在しております。

今回、ここに報告する村上川堀遺跡は、市原市道路建設課による市道35号線の改良工事に伴い発掘調査を実施したもので調査の結果、特に注目されるものとしては平安時代初めの丸軋の石帯を出土した土器棄て場と考えられる土坑や、掘立柱建物跡等が検出されるなど古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

本報告所が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く市民の皆様に活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査並びに本書の刊行に際しご指導、ご協力をいただきました市原市道路建設課、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課をはじめ、関係諸機関に対し心から感謝の意を表します。

平成12年3月

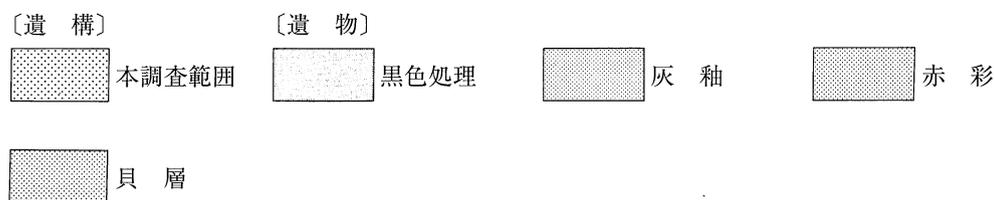
財団法人 市原市文化財センター
理事長 小 茶 文 夫

例 言

- 1 本書は市原市道路建設課による市道35号線改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は下記の遺跡を取録したものである。
村上川堀遺跡（第1次）千葉県市原市村上字川堀1628-1地先他（12219-セ213）
村上川堀遺跡（第2次）千葉県市原市惣社1646-4他（12219-セ250）
村上川堀遺跡（第3次）千葉県市原市村上2786-2の一部（12219-セ260）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は市原市道路建設課の委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者は以下のとおりである。
村上川堀遺跡（第1次）
確認調査 対象面積 670㎡ 【確認調査面積 67㎡(対象面積の10%)】
平成6年12月1日～平成6年12月16日 担当者 小川浩一
本調査 本調査(一部確認調査) 649㎡ 平成7年11月20日～平成8年2月5日
担当者 小川浩一
村上川堀遺跡（第2次）
確認調査 対象面積 625㎡ 【確認調査面積 62.5㎡(対象面積の10%)】
平成9年7月14日～平成9年7月22日 担当者 小出紳夫
本調査 本調査 190㎡ 平成9年8月1日～平成9年8月11日 担当者 小出紳夫
村上川堀遺跡（第3次）
確認調査 対象面積 1,417㎡ 【確認調査面積 142㎡(対象面積の10%)】
平成9年12月8日～平成9年12月19日 担当者 小出紳夫
本調査 本調査 560㎡ 平成10年1月21日～平成10年2月10日 担当者 小出紳夫
整理作業 平成11年7月26日～平成11年11月26日
担当者 小川浩一
- 5 本書の執筆・編集は、小川浩一が担当した。
- 6 土器実測の一部は鶴岡英一が行った。
- 7 出土遺物について、出光美術館 金沢 陽氏に御教示いただいた。
- 8 貝層のサンプル分析・殻高計測及び獣骨の同定について、忍澤成視氏に御教示いただいた。
- 9 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、市原市教育委員会、生涯学習部ふるさと文化課ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 10 本書で使用した地形図、及び航空写真は下記のとおりである。
国土地理院発行 1/25,000地形図「蘇我」(NI-54-19-15-2)
国土地理院発行 1/25,000地形図「五井」(NI-54-19-15-4)
国土地理院発行 1/25,000地形図「姉崎」(NI-54-19-16-3)
国土地理院発行 1/25,000地形図「海士有木」(NI-54-19-16-1)

(財) 日本地図センター発行 約1/5,000空中写真(昭和36年撮影)(C16-(B)-10)

11 遺構及び遺物実測図に使用したスクリーントーンは、下図のとおりである。



12 本報告書に記載した遺構番号に対応する調査時の遺構番号は、下記のとおりである。

報告書内番号	調査時番号	報告書内番号	調査時番号	報告書内番号	調査時番号
001	セ—213、SB01	013	セ—260、SK5	025	セ—250、SD1
002	セ—213、SB02	014	セ—260、SK6	026	セ—250、SD2a
003	セ—213、SB03	015	セ—260、SK7	027	セ—250、SD2b
004	セ—213、SB04	016	セ—213、SD01	028a	セ—250、SD3
005	セ—260、SB1	017	セ—213、SD02	028b	セ—250、SD5
006	セ—213、SI01	018	セ—213、SD04	029	セ—250、SD4
007	セ—213、SX03	019	セ—213、SD05	030	セ—250、SD8
008	セ—213、SK14	020	セ—213、SD06	031	セ—213、SX01
009	セ—213、1H、SK01	021	セ—213、SD07	032	セ—250、SX01
010	セ—260、SK1	022	セ—213、SD10	033	セ—260、ピット群
011	セ—260、SK2、SK4	023	セ—213、SD11	034	セ—213、SD03
012	セ—260、SK3	024	セ—213、SD12		

本文目次

序文		
例言		
第1章	調査の概要	1
	1. 調査の経緯と経過	1
	2. 調査の方法	1
	3. 地理的環境	1
	4. 歴史的環境	2
	5. 基本層序	7
第2章	遺構と遺物	9
	I. 第1次	9
	1. 掘立柱建物跡	9
	2. 土坑	15
	3. 溝状遺構	20
	4. その他	22
	II. 第2次	28
	1. 溝状遺構	28
	2. その他	32
	III. 第3次	33
	1. 掘立柱建物跡	33
	2. 土坑	35
	3. その他	44
第3章	まとめ	59
付編	自然科学分析	62
	はじめに	62
	1. 試料	62
	2. 分析方法	62
	3. 結果	65
	4. 平安時代および中・近世の古植生	70
	5. 遺構の埋積過程	75
	6. 近世の畑作	76
	7. まとめ	77
	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 周辺の主な遺跡 …………… 3	第19図 第2次グリッド配置及び本調査範囲 …………… 28
第2図 調査地点と周辺地形図 …………… 4	
第3図 村上川堀遺跡メッシュ図 …………… 5	第20図 第2次全体図 …………… 29
第4図 第1次b基本土層 …………… 7	第21図 025～030号, 032号 …… 30
第5図 第2次基本土層 …………… 8	第22図 026, 029, 032号 …… 32
第6図 第3次基本土層 …………… 8	第23図 第3次グリッド配置及び本調査範囲 …………… 33
第7図 第1次aグリッド配置及び本調査範囲 …………… 9	第24図 第3次全体図 …………… 34
第8図 第1次a-1 …………… 10	第25図 005号遺構 …………… 36
第9図 第1次a-2 …………… 11~12	第26図 010, 011号 …………… 37
第10図 第1次b全体図 …………… 17	第27図 011号 …………… 38
第11図 009号 …………… 17	第28図 012号 …………… 39
第12図 001～003, 008号 …… 18	第29図 013号 …………… 40
第13図 003, 004, 006号 …… 19	第30図 014号 …………… 40
第14図 007, 016, 031号 …… 20	第31図 015号 …………… 40
第15図 002, 006号 …………… 24	第32図 010, 011号 …………… 42
第16図 006～009号 …………… 25	第33図 011～014号 …………… 43
第17図 016, 018, 034号 …… 26	第34図 015号, 3次遺構外出土遺物… 44
第18図 1次遺構外出土遺物 …………… 27	第35図 033号 …………… 45
(付編) 図1 主要珪藻化石組成 …………… 69	図3 植物珪酸体組成 …………… 74
図2 花粉化石組成 …………… 72	

表 目 次

第1表 貝層サンプル種別表(1) …………… 46	第8表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表(6) …… 53
第2表 貝層サンプル種別表(2) …………… 47	第9表 出土遺物観察表(1) …………… 54
第3表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表(1) …… 48	第10表 出土遺物観察表(2) …………… 55
第4表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表(2) …… 49	第11表 出土遺物観察表(3) …………… 56
第5表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表(3) …… 50	第12表 出土遺物観察表(4) …………… 57
第6表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表(4) …… 51	第13表 出土遺物観察表(5) …………… 58
第7表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表(5) …… 52	
(付編) 表1 珪藻の生態性 …………… 64	表3 花粉分析結果 …………… 71
表2 珪藻分析結果 …………… 66~68	表4 植物珪酸体分析結果 …… 73

図 版 目 次

- | | | | |
|------|----------------------------------|------|--|
| 図版 1 | 航空写真 | 図版22 | 010号 |
| 図版 2 | 1次調査前状況、001、002号 | 図版23 | 011号貝分布状況、セクション |
| 図版 3 | 001号P3、002号P1・2 | 図版24 | 011号セクション |
| 図版 4 | 002号P3、003号 | 図版25 | 010、011号 |
| 図版 5 | 003号、P1 | 図版26 | 012、013号 |
| 図版 6 | 003号P3・4・6 | 図版27 | 013セクション、014号 |
| 図版 7 | 003号P8・17、004号 | 図版28 | 014号遺物出土状況、015号 |
| 図版 8 | 004号P2、006号遺物出土状況 | 図版29 | 006号出土遺物 |
| 図版 9 | 006号遺物出土状況 | 図版30 | 006、010、014号出土遺物 |
| 図版10 | 006号遺物出土状況、セクション | 図版31 | 015、016、018、026、034、1次
遺構外出土遺物 |
| 図版11 | 007、009号 | 図版32 | 002、006、007、010、011、012、
013、014号出土遺物 |
| 図版12 | 009号セクション、016、031号 | 図版33 | 006、008、010、015、016、018、026、
029、032、034号、1次遺構外出土遺物 |
| 図版13 | 1次、1次航空写真 | 図版34 | 007、009、010、011号出土遺物 |
| 図版14 | 001、002、007、016、017、018号
航空写真 | 図版35 | 014、016、018、026、034号、1、3次遺構
外出土遺物 |
| 図版15 | 2次調査区全景、Aトレンチ | 図版36 | その他の遺物、貝層出土動物遺存体 |
| 図版16 | 2次調査区全景、028、025号 | 図版37 | 珪藻化石 |
| 図版17 | 026、027、028号 | 図版38 | 花粉化石 |
| 図版18 | 3次調査区遠景、2トレンチ | 図版39 | 植物珪酸体 |
| 図版19 | 3次5トレンチ、調査区全景 | | |
| 図版20 | 3次調査区全景、005号 | | |
| 図版21 | 005号P3・4・5セクション | | |

第1章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

市原市は、千葉県市原市村上字川堀1628-1地先他に市道35号線の建設を計画した。建設に先立ち、市原市長小出善三郎より、事業地域内の埋蔵文化財の有無およびその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会の現地踏査により、「奈良・平安時代および中世の散布地1ヶ所」の回答がなされた。この回答により、千葉県教育庁文化課・市原市道路建設課・市原市教育委員会の三者の協議の結果、事業計画の変更は困難であり道路予定部分にかかる遺構については、確認調査を実施し遺構の広がりを確認したのち本調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は財団法人市原市文化財センターが実施することになり、市原市との間に平成6年11月22日に発掘調査委託契約が締結された。確認調査は、村上川堀遺跡（第1次）が、平成6年12月1日から平成6年12月16日にわたって実施し、本調査は平成7年11月20日から平成8年2月5日にかけて行われた。同様に村上川堀遺跡（第2次）が、確認調査が平成9年7月14日から平成9年7月22日にわたって実施し、本調査は平成9年8月1日から平成9年8月11日にかけて行われた。また、村上川堀遺跡（第3次）については、確認調査が平成9年12月8日から平成9年12月19日にわたって実施し、本調査は平成10年1月21日から平成10年2月10日にかけて行われた。なお、整理作業は、村上川堀遺跡（第1次～第3次）をまとめて平成11年7月26日から平成11年11月26日の期間にわたり行った。

2. 調査の方法

調査区の設定 調査対象範囲全域を公共座標に合わせた20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点をおき、西から東へA, B, C…、北から南へ1, 2, 3…の名称をつけた。その大グリッドを更に2m×2mの小グリッド100個に分割し、小グリッドは北西隅を起点に00～99の番号をふり、大小グリッドを組み合わせると例えばA1-00のような呼称とした。

上層確認調査 縄文時代以降の上層の確認調査は、調査区全域に任意のトレンチを対象面積の10%を設定し、遺構・遺物の分布および帰属時期を確認し本調査に移行している。なお、遺跡によっては確認グリッドの設定方法が若干異なる。

本調査 縄文時代以降の遺構・遺物の本調査では、基本的に遺構内を4分割し土層観察用のベルトを設定して調査をおこなった。遺物の取り上げは、必要に応じて個別に番号を付し平面的位置とレベルを記録した。なお、遺構外出土の遺物については、基本的に小グリッド一括で採取している。

遺構番号 遺構の内容・性格にかかわらず、3桁の通し番号を付した。なお、番号は001号遺構から始まる。

3. 地理的環境

千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、北は千葉市、北東は茂原市、南は袖ヶ浦市に隣接している。北側には村田川が流れ、支流によって市の北部は樹枝状に開析されている。市域のほぼ中

央を南北に縦断して流れる養老川はその源泉を清澄山系に求め、両岸に河岸段丘を、また下流域には沖積地と三角州性低地とを形成して東京湾へと注いでいる。

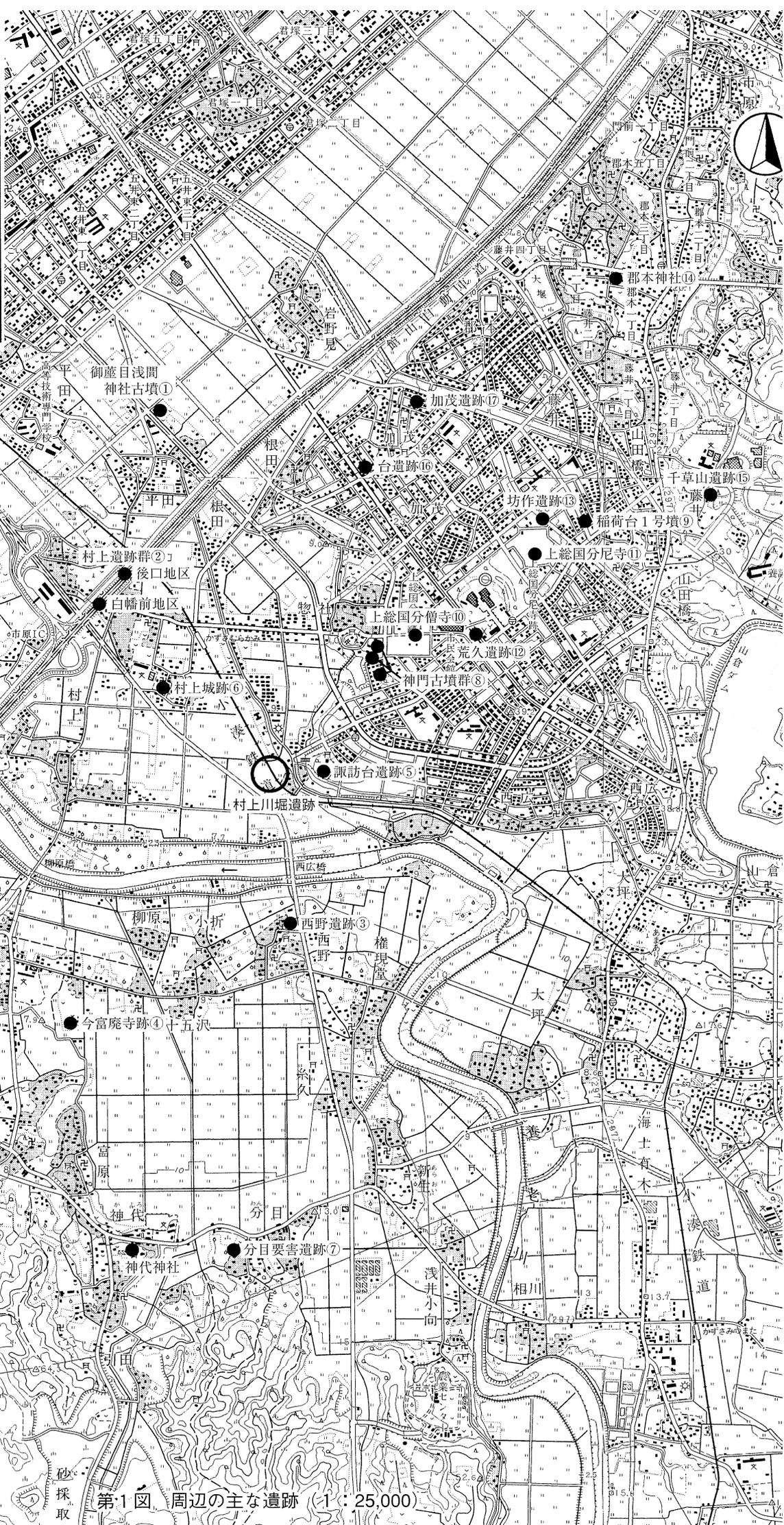
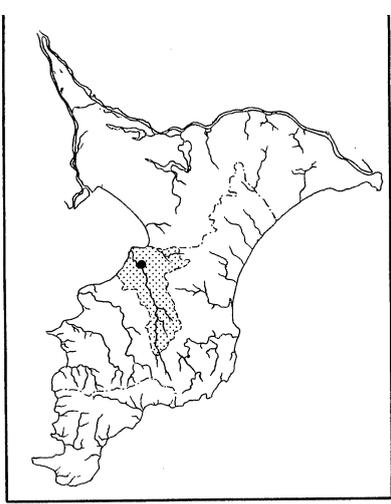
村上川堀遺跡は、養老川中流～下流域を西に臨む沖積平野に位置し、標高は約8～9m前後の自然堤防上に位置する。周囲は養老川に特徴的なメアンダーが、海岸平野に至ってさらに顕著になっており、旧河道の跡と自然堤防、さらに砂堆などによって複雑な地形を呈している。養老川旧河道に発達した現水田面と自然堤防との比高差は最大約1.5m程であり、本遺跡はほぼ両者の分岐点に位置している。そして、村上川堀遺跡（第3次）を含む西側周囲は広大な水田地帯が形成されている。

つまり、本遺跡は養老川下流域左岸にあってその川筋を幾度となく変えながら形成された養老川沖積地と河口域において、上流から流入した堆積土により三角州を形成した肥沃な海岸平野に挟まれた自然堤防上に位置し、東の背後には市原台地と呼ばれる標高25m前後の洪積世台地が控えている。

4. 歴史的環境（第1図）

現段階において、村上川堀遺跡周辺の低地及び微高地上にかけて旧石器時代から縄文時代・弥生時代にいたる遺構の検出は報告されていない。古墳時代においては、村上川堀遺跡から北西約1.8kmに御座目浅間神社古墳①が存在し、古墳時代後期と考えられる動物埴輪等が出土しているが、同周溝内上層から8世紀後半～9世紀初めと考えられる土器も出土しており、当該地域周辺に奈良・平安時代の集落の存在も考えられる。また、北西1.1kmに村上遺跡群②（後口・白幡前地区）が存在する。後口地区においては、8世紀後半～9世紀と考えられる掘立柱建物群が検出され、白幡前地区においては溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡が検出され、溝状遺構から出土した土器等から8世紀第1四半期頃まで遡ると考えられている。また、南へ0.75kmに西野遺跡③が存在し、古墳時代後期の竪穴住居跡や平安時代に廃絶したと考えられる井戸及び溝また、それと重複する掘立柱建物跡の存在が明らかとなっている。周辺に「小折」という地名が存在することから、遺跡一帯において海上郡家推定地とされているところである。また、南西1.5kmに今富廃寺跡④が存在する。上総国分寺系の軒瓦が表採され、海上郡の郡寺と関連づけられているが未調査であるため、その実態をつかむことはできない。また、東へ0.2kmの市原台地上に位置し、諏訪台遺跡⑤が存在し、奈良・平安時代における方形周溝状遺構、竪穴住居跡、及び掘立柱建物跡等が検出されている。また、中世に関連する周囲の遺跡としては、北西0.65kmにおいて村上城跡⑥が存在する。城ないし、中世寺院関連と考えられる堀状遺構及び近世土葬墓が検出されている。南へ2.3kmに分目要害遺跡⑦が存在する。障子堀、薬研堀等の城郭関連遺構とともに、15世紀中葉～16世紀前葉にかけての墓域と考えられる地下式壙群が検出されている。一部の地下式壙において、覆土中に穀類炭化物を含んでいる例が報告されている。

いずれにしろ、村上地区周辺における縄文時代から古墳時代にいたる遺跡の存在は、調査箇所が少ないこともあり数例にとどまっている。しかし、本遺跡の東側にある市原台地上に展開する遺跡は上総国分僧・尼寺に代表されるように、枚挙にいとまがない。縄文時代においては、台地縁辺を中心に西広貝塚、祇園原貝塚、山田橋亥の海道貝塚、上小貝塚等が存在し縄文時代中～後期の豊富な資料を提供している。古墳時代においては、東国の方形周溝墓から古墳への過渡期の形態として注目された神門5, 4, 3号墳⑧や「王賜」銘鉄剣を出土した稻荷台1号墳⑨等は、あまりにも有名である。そして奈良・平安時代では、上総国分僧寺⑩・尼寺⑪をはじめそれと関わりを持つと考えられる集落跡の荒

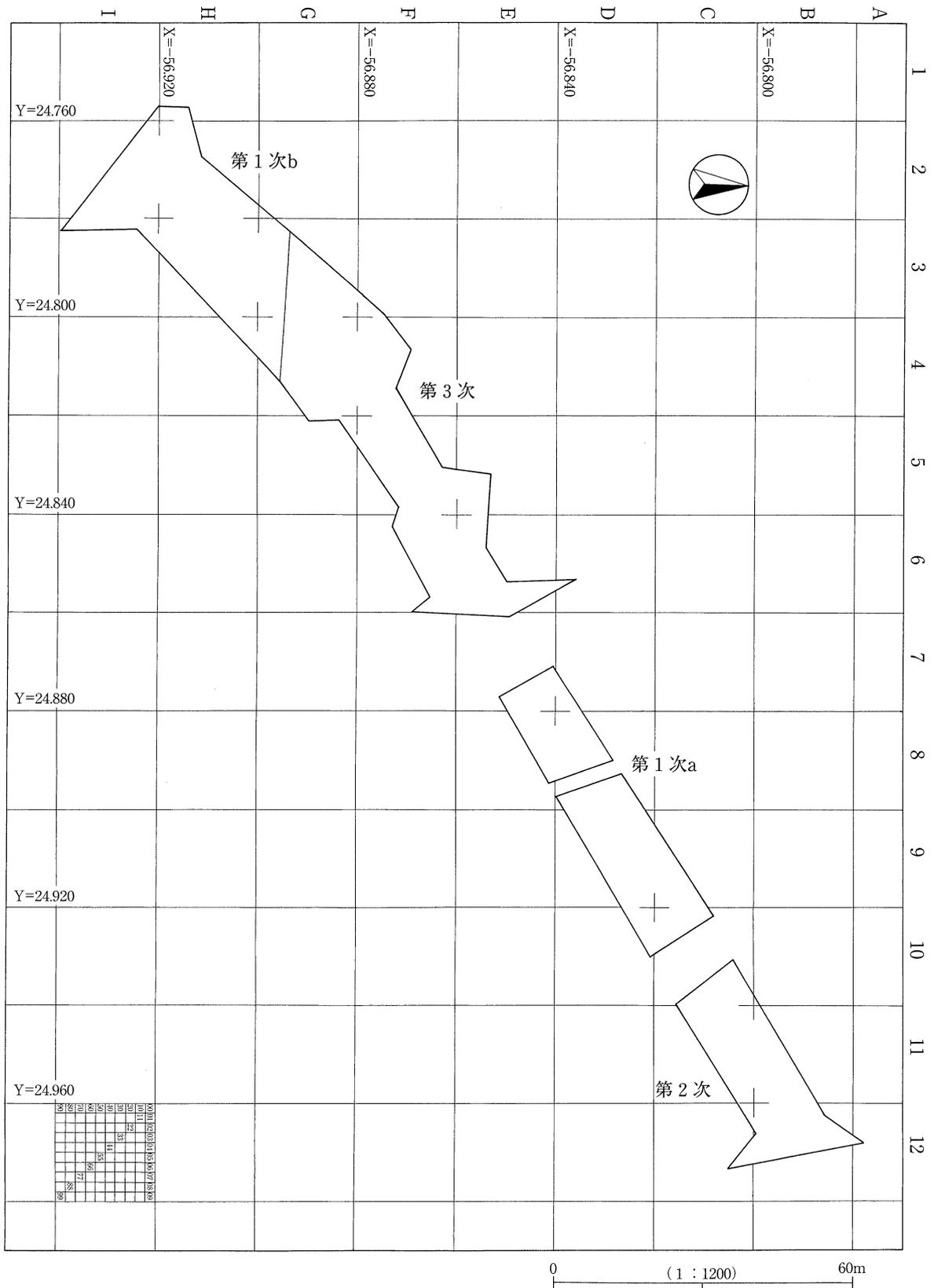


第1図 周辺の主な遺跡 (1 : 25,000)

砂採取



第2図 調査地点と周辺地形図



第3図 村上川堀遺跡メッシュ図

久遺跡⑫、坊作遺跡⑬が存在し、市原郡家推定地となっている郡本遺跡⑭、また「寺」銘の墨書土器が出土した千草山遺跡⑮等数多くの遺跡をあげることができる。また、中世遺跡としては台遺跡⑯及び加茂遺跡⑰があり、地下式壙等の存在が知られている。

(参考文献)

- 木村泰治 「第八章 市原市の地形と地質」『市原市史（別巻）』 市原市教育委員会 1979
- 樋口義幸 「第九章 第五節 養老川下流地域」『市原市史（別巻）』 市原市教育委員会 1979
- 郷堀英司他 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』 千葉県教育委員会 1984
- 山口直樹 「村上城跡（上総国府推定地）」『市原市文化財センター年報—昭和59年度』（財）市原市文化財センター 1987
- 山口直樹・田所 真 『村上城跡』（財）市原市文化財センター 1986
- 櫻井敦史 「19 分目要害遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』 千葉県 1998
- 櫻井敦史 「分目要害遺跡」『市原市文化財センター年報—平成5年度』（財）市原市文化財センター 1993
- 半田堅三 「13 台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』 千葉県 1998
- 浅利幸一 『御座目浅間神社古墳』（財）市原市文化財センター 1987
- 浅利幸一 「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報—昭和63年度』（財）市原市文化財センター 1988
- 今泉 潔・山口典子 『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター 1989
- 立石泰三 『上総と国府』 崙書房ふるさと文庫 1989
- 笹生 衛 「市原市村上遺跡（村上遺跡群）」『千葉県文化財センター年報NO.16 平成2年度』 1991
- 高橋康男 『市原市 上総国府推定地確認調査報告書（1）』 市原市教育委員会 1994
- 宮本敬一 「上総国分尼寺の成立—尼寺の造営過程を中心に—」『東海道の国分寺—その成立と変遷』 第8回企画展図録 1994
- 小久貫隆史・渡邊高弘 「市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡」『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書』（財）千葉県文化財センター 1997
- 田所 真 「上総国」『シンポジウム東国の国府 i n W A Y O—考古学からみた東国国府の成立と変遷—』 1998
- 宮本敬一 『市原の遺跡（1） 史跡上総国分寺跡—国分僧尼寺とその時代』 市原市教育委員会 1999
- 「千葉県埋蔵文化財分布地図（3）—千葉市・市原市・長生地区（改訂版）—」（財）千葉県文化財センター 1999
- 「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編（改訂版）」 1998 市原市教育委員会

5. 基本層序 (第4図・第5図・第6図)

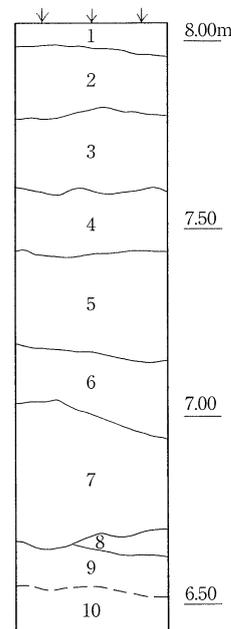
村上川堀遺跡が立地する低地は、先述した養老川下流域における自然堤防上に位置しており、その地理的立地状況から見て安定した堆積状況を示しているとは言えない。具体的には、暗黒褐色の現水田耕作土の直下に暗黒色のシルト質粘質土が堆積し、表土直下80cm程で暗黄灰色の砂質土が現れこれが基本的に本遺跡の地山となる。その後、80cm～100cm程下で地下水系の発達にともなうグライ化した青灰色の砂質土が現れる。暗黒色のシルト質粘質土及び暗黄灰色の砂質土の層境付近はところどころにラミナ状の堆積を示しており、短期間に大量の水流による影響を受け堆積した状況、具体的には幾度かの養老川の氾濫にともなう洪水等の影響を示唆していると考えられる。村上川堀遺跡(第1次～第3次)各調査区において若干の差異はあるものの、堆積の基本状況はほぼ同一である。ちなみに、各層序の間層に宝永スコリアは観察されなかった。但し、第2図に示すように村上川堀遺跡(第1次～第3次)をほぼ東西に分断する、小湊鉄道線から国道297号線市原バイパスに至るまでの南側部分、すなわち村上川堀遺跡(第1次b)及び村上川堀遺跡(第3次)については、圃場整備にともなう削平を著しく受けており、現水田耕作土から20cm～30cm程下で地山である暗黄灰色砂質土層に達する。

村上川堀遺跡(第1次b)については、圃場整備にともなう削平を著しく受けており、現水田耕作土から20cm～25cm程下で地山である暗灰白色粘質土に達する。

なお、村上川堀遺跡(第1次a)については、s p v - v'において地山を含めた基本堆積土層を記載しているが、現表土から60～65cm程下で地山である暗黄白色シルト質砂層に達する。

下記に、村上川堀遺跡(第1次b)における基本土層を示す。

- 1層 暗褐色粘質土、現水田耕作土
- 2層 暗灰色砂質シルト
- 3層 暗灰白色粘質土、地山
- 4層 暗灰色シルト質粘質土
- 5層 暗灰色シルト質粘質土
- 6層 暗灰色シルト質砂
- 7層 暗黄灰色シルト質粘質土
- 8層 暗灰色砂質シルト
- 9層 暗灰色シルト質砂
- 10層 暗灰白色砂

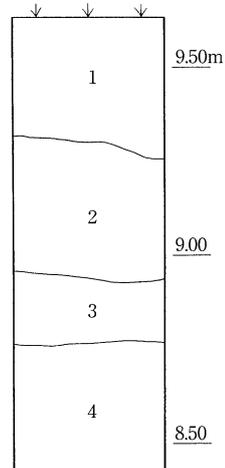


第4図 第1次b基本土層

村上川堀遺跡（第2次）については、圃場整備にともなう削平、及び攪乱を著しく受けており、現表土から80cm～90cm程下で地山である灰褐色シルト層に達する。

下記に、基本土層を示す。

- 1層 暗灰褐色土、現表土
- 2層 暗褐色土（灰褐色土をブロック状に含む、中～近世層）
- 3層 黒褐色土（灰色粘土ブロックを多く含む。奈良・平安時代層）
- 4層 明灰褐色粘質土、地山

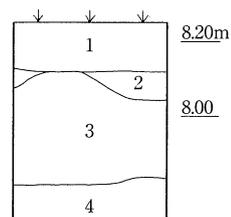


第5図 第2次基本土層

村上川堀遺跡（第3次）については、圃場整備にともなう削平を著しく受けており、現水田耕作土から20cm～30cm程下で地山である灰褐色シルト層に達する。

下記に、基本土層を示す。

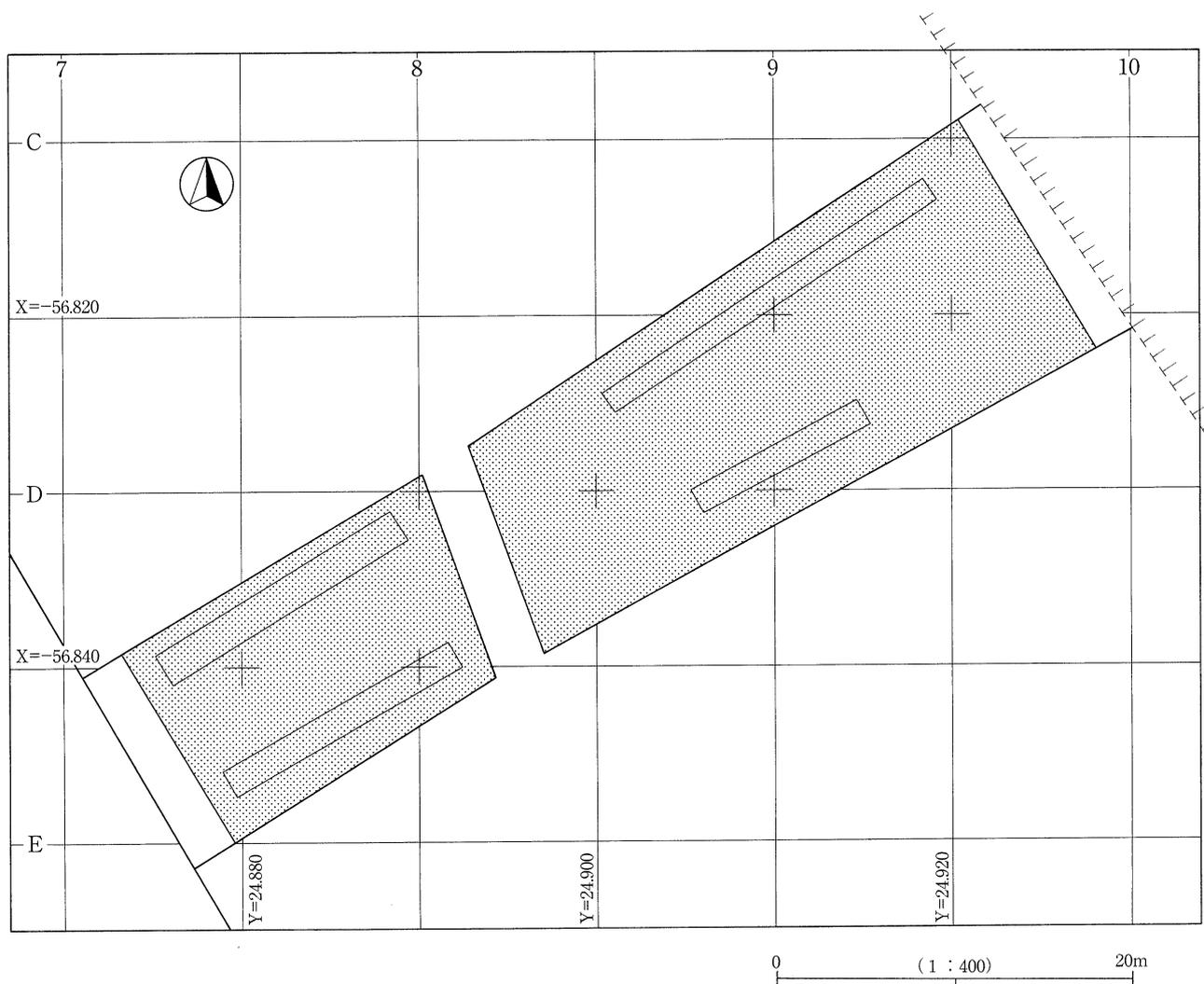
- 1層 暗灰褐色土、耕作土
- 2層 暗灰色土、耕地整理時の攪乱土
- 3層 灰褐色シルト、地山
- 4層 灰色粘土



第6図 第3次基本土層

第2章 遺構と遺物

I. 第1次



第7図 第1次a グリッド配置及び本調査範囲

1. 掘立柱建物跡

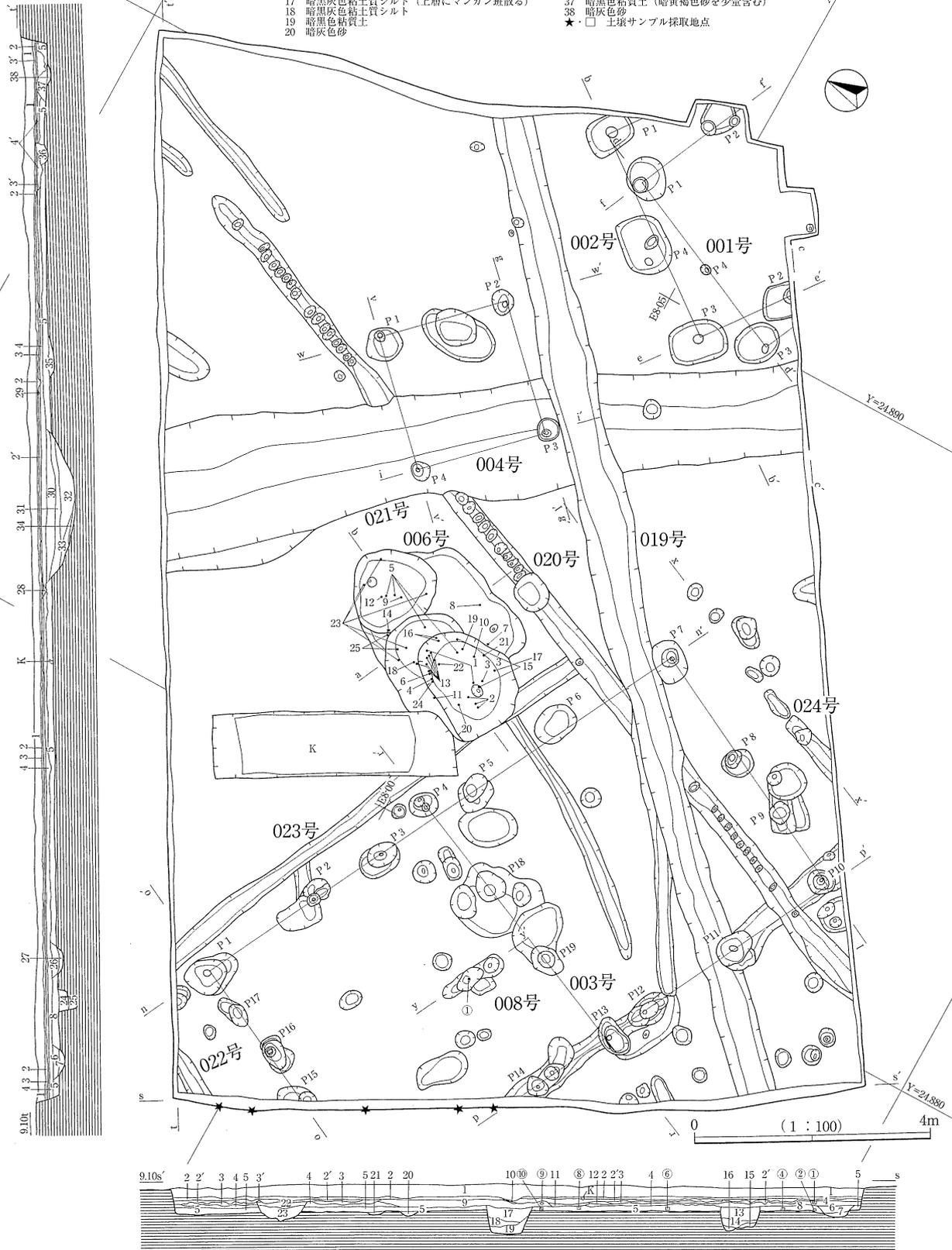
001号遺構（第8図・第12図）

位置 第1次a調査区、E 8-06グリッドを中心に検出された。

形態 南西側において、002号遺構と重複する。主軸方向はN-66°-Wである。梁行3.5mの2間の建物である可能性がある。

構造 現状では、本遺構の東側の大半が調査区外のため、桁行を推定することはできない。各柱穴の確認面からの掘り込みは隅柱と考えられるP1で32cm、P3で22cmを測るが、P4では8cm、P2では10cm程度であり、遺構の遺存状態は悪い。柱穴間隔は桁行と考えられるP1-P2では1.56mを測り、梁行と考えられるP1-P4では1.84mを測り、同じくP4-P3では1.65mを測る。柱穴は不整な円形のもの

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗灰色粘質土 (暗黄灰色砂を含む)、現表土 | 21 暗灰白色砂 |
| 2 暗青灰色シルト質砂 (暗黄白色砂を含む) | 22 暗灰褐色シルト質砂 (上層にマンガン斑少量散る) |
| 3 暗黒灰色粘質土 (暗赤褐色シルト質砂を含む) | 23 暗黒色シルト |
| 4 暗黒灰色シルト質粘質土 | 24 暗黒色粘質土 |
| 5 暗黒灰色シルト質粘質土 (褐色砂を含む) | 25 暗黒色粘質土 (暗灰色シルトを含む) |
| 6 暗灰色砂 | 26 暗灰色砂 |
| 7 暗灰色砂 (褐色砂を含む) | 27 暗灰色砂 (暗褐色砂を含む) |
| 8 暗黒灰色シルト質粘質土 | 28 暗灰色砂 (暗灰褐色シルトを含む) |
| 9 暗黒灰色シルト質砂 (酸化鉄砂散る) | 29 暗灰色砂 |
| 10 暗灰色砂質シルト (下層にマンガン斑散る) | 30 黒色粘質土 (暗灰色砂を少量含む) |
| 11 暗黒灰色粘質土 | 31 黒色粘質土 |
| 12 暗青灰色シルト質砂 (暗白色砂少量含む) | 32 黒色粘質土 (暗灰色砂を微量含む) |
| 13 暗黒色粘質土 | 33 黒色粘質土 (暗灰色シルト粘質土含む) |
| 14 暗黒色粘質土 (13より黒色味強い) | 34 暗黒灰色粘質土 |
| 15 暗黒色粘質土 | 35 暗黒色粘質土 |
| 16 暗褐色シルト質砂 | 36 暗灰色シルト質砂 (ラミナ状に混入する) |
| 17 暗黒灰色粘土質シルト (上層にマンガン斑散る) | 37 暗黒色粘質土 (暗黄褐色砂を少量含む) |
| 18 暗黒灰色粘土質シルト | 38 暗灰色砂 |
| 19 暗黒色粘質土 | ★ □ 土壌サンプル採取地点 |
| 20 暗灰色砂 | |



第8図 第1次a-1

が主体を占める。大きさは径0.7～0.8mを測るが、P4は規模の小さい柱穴であり径0.18m程度である。柱痕跡はP4を除く3穴で確認された。柱には、径10cm～20cm前後の円形柱材を用いていたと考えられる。

遺物出土状況 遺物は柱穴内からはほとんど出土せず、本遺構内の確認面からも図示できる遺物は検出されていない。

002号遺構（第8図・第12図・第15図）

位置 第1次a調査区、E8-05グリッドを中心に検出された。

形態 南側において、001号遺構と重複する。主軸方向はN-53°-Wである。梁行3.8mの2間以上の建物である可能性があるが、断定できない。

構造 現状では、本遺構の東側の大半が調査区外のため、規模を推定することはできないが、001号遺構の主軸方向に倣うとすれば、梁行3.8mの2間以上の建物である可能性がある。各柱穴の確認面からの掘り込みはP1で16cm、P2で20cmを測る。また、隅柱であるP3では26cmを測る。P4は22cmを測る。柱穴間隔は、P2-P3では1.7m程度と考えられ、P1-P4では1.94m、P4-P3では1.84mを測る。柱穴は、隅丸の長方形を呈するものが主体を占める。大きさはP1が0.8×0.6mを測り、P2は短辺が0.6mを測る。隅柱であるP3は1.0×0.7mを測り、P4は1.0×0.8mを測る。このことから、本遺構の柱穴の規模はほぼ共通していると考えられる。柱痕跡はP4を除く3穴で確認された。柱には、径10cm～14cm前後の円形柱材を用いていたと考えられる。

遺物出土状況 遺物は、南西側隅柱であるP3上層より出土しているのみである。また、本遺構内の確認面からは図示できる遺物は検出されていない。

出土遺物 1は、須恵器の杯底部である。胎土に銀雲母粒を均等に含んでおり、新治産の須恵器であると考えられる。帰属時期は、底径や底部の立ち上がり方から、8世紀の前半から中葉の所産であろう。

003号遺構（第8図・第12図）

位置 第1次a調査区、E8-20グリッドを中心に検出された。調査区南西側に位置し、南西隅柱付近は調査区外となる。

形態 中央に棟持ち柱と考えられる柱穴列が存在し、主軸方向はN-24°-Eとなる。基本的に、桁行4.74m梁行9.5mの3間×6間の建物であると考えられるが、この根拠については、後で述べる。なお、本遺構の南側及び西側の柱穴列は一部が調査区外に存在し、また柱穴の間隔が、対応する北辺及び西辺の柱穴間隔と一致しないことから、全体の間隔は変動する可能性がある。

構造 現状では、本遺構の南西隅柱付近が調査区外のため、北側及び東側の柱穴列から判断せざるを得ないが、桁行4.74m梁行9.5mの3間×6間の側柱建物と考えられる。本遺構の特徴としては、P4-P13を結ぶ中央の柱穴列の存在をあげることができる。これは、棟持ち柱の可能性がある。そして、この棟持ち柱は間数の多い、本来桁柱が通る方向に存在しており間隔が大きい方に屋根が開く構造である可能性がある。但し、必ずしも棟持ち柱穴列であると断定できない要素も持っていることを指摘しておく必要がある。柱穴の確認面からの掘り込みはP1で62cm、P2で42cmを測る。また、P3では78cmを測り、P5は54cmを測る。P6は78cm、北東側隅柱であるP7で70cmを測る。また、南東側柱穴列では、

P8が54cm、P9が52cm、南東側隅柱であるP10は70cmを測る。そして、南西側柱穴列であるP10-P14は、P11が64cm、P12が62cm、P13が60cmを測り、P14は38cmを測る。そして、北西側柱穴列であるP15-P1は、P15は18cm、P16が54cmを測り、P17では23cmを測り、北西側隅柱であるP1に達する。また、中央の棟持ち柱穴列と考えられるP4-P13は、P4が62cm、P18が74cm、P19が72cmを測り、P13へと達する。柱穴間隔は、梁行と考えられる北東側柱穴列P1-P7は、P1からP2間では2.14m、P2からP3間では1.38m、P3からP4間では1.12m、P4からP5間では、0.76m、P5からP6間では1.84m、P6からP7間では2.24mを測る。また、南東側柱穴列P7-P10は、P7からP8間では2.0m、P8からP9間では1.26m、P9からP10間では1.48mを測る。南西側柱穴列P10-P14は、P10からP11間では1.9m、P11からP12間では1.86m、P12からP13間では0.80m、P13からP14間では1.40mを測る。北西側柱穴列P15-P1は、P15からP16間では推定ではあるが1.05m、P16からP17間では0.86m、P17から北西側隅柱であるP1間では0.88mを測る。そして、中央の棟持ち柱穴列と考えられるP4-P13は、P4からP18間では1.94m、P18からP19間では1.50mを測り、P19からP13間では1.71mを測る。現状では、桁行、梁行及び棟持ち柱穴列の柱穴間隔は大きな間隔差があり、桁行・梁行の相対する列間の共通性も見られず、ばらつきがある。柱穴は、不整な円形のもの为主体を占めるが、南西側柱穴列P10-P14は、一部布掘り状を呈している。柱穴の規模は、径0.46~0.92mを測り、差がある。断面は、深さが前述したように、0.42~0.78mと一定せず、形態は比較的直線的に掘り込まれているピットも存在するが、底径の小さい漏斗状を呈したものや、落ち込みの途中で段差がつく滑らかなT字状を呈するピット等も存在し形態にもバラエティーがある。柱痕跡は、中央棟持ち柱を含めて12ピットで確認された。P8において一辺10cm前後の角柱痕が検出されている。但し、その他のピットについては6~14cm前後の円形の柱痕が検出されており、これらのピットがP8同様に角柱痕であったかどうかは判別できない。また、本遺構の周囲には幅0.3~0.4m、深さ0.15m前後の断面逆台形を呈する溝が巡っている。南西側柱穴列には、その南側の多くが調査区外になることもあり、確認されなかったが他の北西側・北東側・南東側の3辺には柱穴列から0.75~1.3mの距離に溝が存在している。なお、南東側柱穴列にはx-x'のピット列が溝の残骸であると考えられる。これらの覆土は、いずれも青灰色味がかった砂のほぼ単一層が堆積しており、人為的な埋土というよりは、水の影響を受けた堆積砂ということができ、これらの溝は本建物に伴う雨落ち溝であると推定される。また、本遺構内中央棟持ち柱の南西側に008号遺構が存在する。柱穴状を呈するピットで、規模は0.50×0.28mを測る。上方に開く形態であり、深さは0.34mを測る。ピット内下層より新寛永と考えられる寛永通寶が出土している。現状では、周囲に対応するピットがなく本遺構と直接関連づけることはできないが、埋土は周囲の柱穴埋土同様、青灰色砂に暗褐色土が混入した砂主体土であり、また下底面の形状は角柱痕状を呈しており、本遺構P8との関連も合わせ、本遺構の時期を決定する上で参考となるものと考えられる。

遺物出土状況 遺物はほとんどなく、唯一提示できる資料としては前述した本遺構内中央棟持ち柱の南西側に存在する、008号遺構出土の寛永通寶のみである。

004号遺構（第8図・第13図）

位置 第1次a調査区、D8-94グリッドを中心に検出された。

形態 南西側において、021号溝状遺構と重複する。主軸方向はN-45°-Eである。

構造 現状では、北西-南東2.24m、北東-南西2.36mの1間×1間の建物である可能性もあるが、いずれにしても検出された柱穴は4穴のみであり、建物全体の規模は不明であると言わざるを得ない。柱穴間隔は、P1-P2は2.24m、P2-P3は2.36mであり、P3-P4は2.26m、P4-P1は2.38mである。柱穴は、4穴とも円形を呈しており規模はP1が0.64×0.58mで、深さは0.28mであり、P2が0.44×0.36mで、深さは0.26mである。また、P3が0.40×0.38mで、深さは0.22mであり、P4が0.35×0.31mで、深さは0.28mである。柱痕跡は2穴で確認され、柱には径8~10cm程の円形柱材を用いていたと考えられる。

遺物出土状況 遺物の出土はほとんどなかった。

2. 土坑

006号遺構（第8図・第13図・第15図・第16図）

位置 第1次a調査区、G3-54グリッドを中心に検出された。第1次a調査区中央南西寄りに位置する。

形態 不整な円形状の掘り込みが数次にわたって行われたような形状を呈している。現状では長軸3.71m、短軸2.46mを測る。確認面からの掘り込みの深さは、0.36~0.44mを測る。石製の丸軋や8C末~9C初めの土器等が大量に出土しており、土器棄て土坑と考えられる。遺構の平面的形状及び断面から、少なくとも2~4回土砂堆積に伴う掘り直しが行われたと考えられる。

遺物出土状況 遺物は、底面直上より丸軋の石帯が出土しており、また土師器杯や須恵器杯及び甕等が遺構覆土上層を中心に多量に検出されている。土師器においては、8世紀第IV四半期と考えられる箱形ロクロ土師器杯が遺構内南西側の底面直上より出土している。遺物の特徴から考えて8世紀第IV四半期頃に掘られ、9世紀前葉頃までに数回掘り直されながら土器棄て場として機能したのではないかと考えられる。

出土遺物 25は滑石製の丸軋で、表面部分はとても平滑に仕上げられ、裏面は粗雑な面となっている。裏面の糸留め穴は貫通しておらず、側面側の糸留め穴は中央が大きく欠けてしまっている。縦長2.75cm、推定横長3.91cmであり、現存重量は32.8gを測る。11~13は、永田・不入、石川窯産の須恵器杯と考えられる。21~23は、千葉産のタタキ甕であると考えられる。

007号遺構（第9図・第14図・第16図）

位置 第1次a調査区、D8-58グリッドを中心に検出された。第1次a調査区中央西端に位置する。

形態 井戸状遺構と考えられる。不整な円形状の掘り込みであり、北東側に隣接する018号遺構に土坑状の溝を介して接続しているように見られる。

構造 平面形の規模は、長軸2.12m、短軸1.76mを測る。確認面からの掘り込みの深さは2.31mを測る。なお、遺構の北側及び西側において、フラットな面が存在する。北側は、0.62×0.31mを測り平面形は半円状を呈する。確認面からの掘り込みの深さは1.06mを測り、遺構上部に位置する。また、西側は0.66×0.29mを測り平面形は同じく半円状を呈する。確認面からの掘り込みの深さは0.90mを測り、北側と同様に遺構上部に位置する。柱痕跡等は検出されなかったが、このフラット面から直に落ち込ん

でいくことから井戸枠等の構築物が存在した可能性がある。また、東側へ溝状に延びる落ち込みが確認された。確認面からの掘り込みの深さは0.52mを測り、深さはほぼ一定である。018号遺構を東西に横断するように存在している。018号遺構より後に掘り込まれた可能性が高いが、両遺構とも遺物がきわめて少量であり、必ずしも断定できない。ちなみに、本遺構の東側へ溝状に延びる落ち込みの先端において平場面が存在しており、本井戸状遺構と関連した遺構となる可能性がある。

遺物出土状況 遺物は、遺構内南端覆土中層より平瓦片が1点検出されている。また遺構内北東側確認面直下～覆土上層において青磁の香炉底部片が出土している。総体的に見ると、確認面直下～覆土中層にかけて若干出土したのみで、下底面直上～遺構内下層において出土した遺物は図示できない遺物も含めて皆無である。

出土遺物 3は平瓦で、凸面において縄目状の叩き目痕が残り、凹面において布目痕を消すために、ヘラケズリ及びヘラナデ調整を施したと考えられる。2は、時期は近世以降と考えられる（出光美術館 金沢 陽氏ご教示）。

008号遺構（第8図・第12図・第16図）

位置 第1次 a 調査区、E7-19グリッドを中心に検出された。003号遺構内中央棟持ち柱の南西側に存在する。

形態 柱穴状を呈するピットで、平面規模は0.50×0.28m、深さは0.34mを測る。

構造 上方に開く形態である。

遺物出土状況 ピット内下層より新寛永と考えられる寛永通寶が出土している。先述した003号遺構 P8との関連も想定され、本遺構の時期を決定する上で参考となるものと考えられる。

009号遺構（第10図・第11図・第16図）

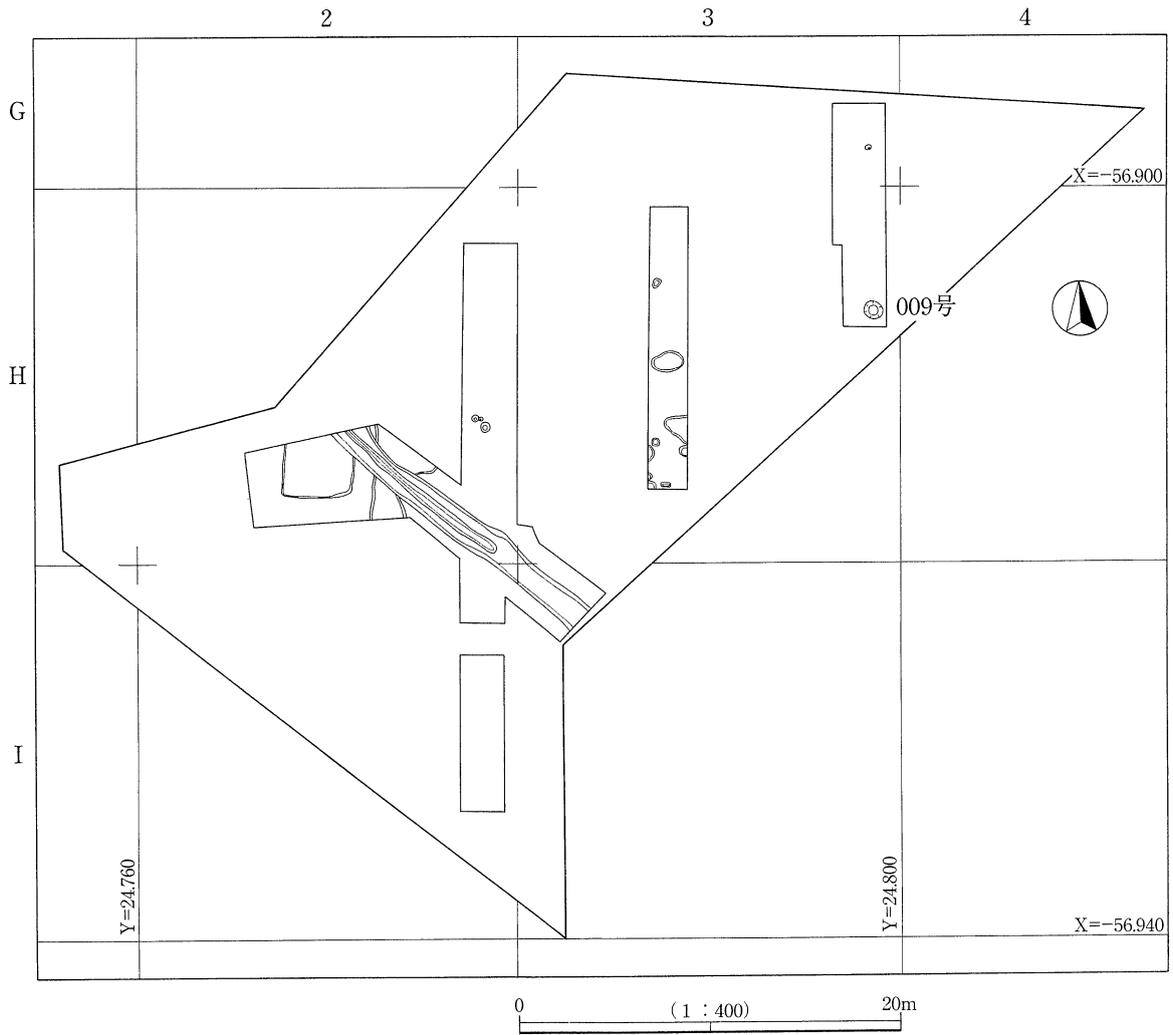
位置 第1次 b 調査区、H3-39グリッドにおいて検出された。

形態 平面規模は1.04×0.98m、深さは0.32mを測る。

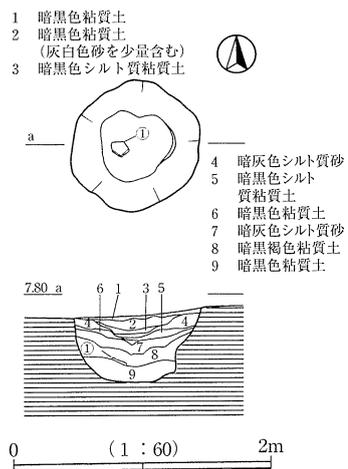
構造 上方になだらかに開く形態であり、覆土は、暗黒色粘質土及び暗灰色シルト質砂を主体とし、自然堆積の状況を呈する。

遺物出土状況 平瓦片が1点検出されている。他には、遺構西側覆土中層において、陶器片等が出土しているのみである。

出土遺物 凸面において縄目状の叩き目痕が残り、凹面においては布目痕が残るが、周囲はヘラケズリ及びヘラナデ調整を施したと考えられる。



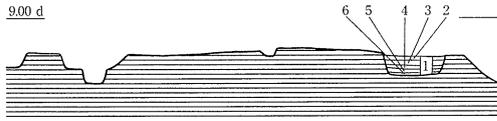
第10図 第1次b全体図



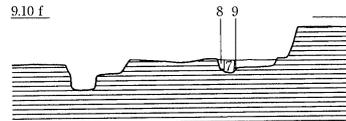
第11図 009号

001号

9.00 d

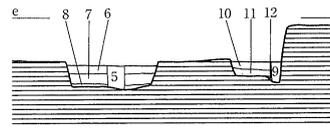
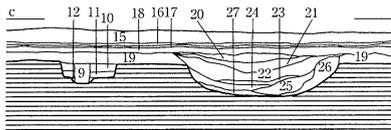
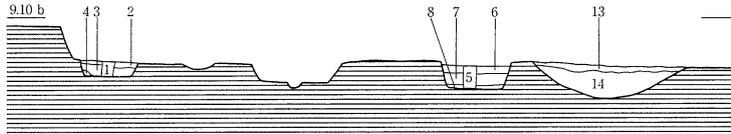


9.10 f



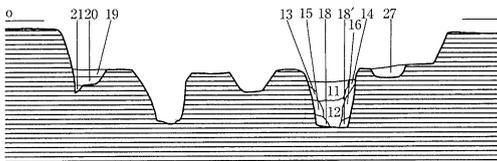
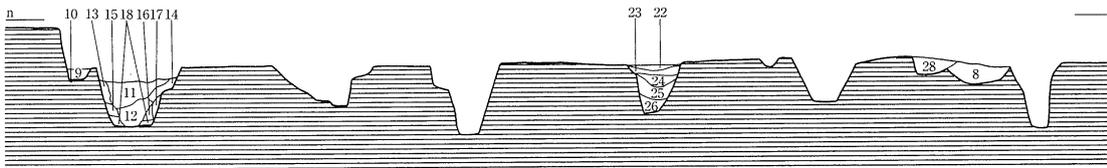
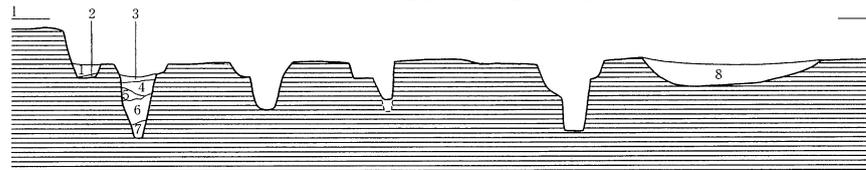
- 1 黒色土
- 2 暗黒色粘質土
- 3 暗黒灰色シルト質砂
- 4 暗黒色粘質土
- 5 暗黒色シルト質砂
- 6 暗黒色シルト質粘質土
- 7 黒色粘質土
- 8 暗黒色シルト質粘質土
- 9 暗灰色砂

002号

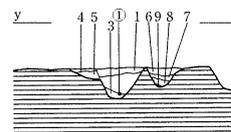


- 1 黒色粘質土
- 2 暗黒灰色粘質土
- 3 暗灰褐色粘土質シルト
- 4 暗黒灰色粘質土
- 5 黒色粘質土
- 6 暗黒色粘質土
- 7 暗黒灰色シルト質砂
- 8 暗黒色粘質土
- 9 黒色粘質土
- 10 暗黒色シルト質粘質土
- 11 暗黒灰色シルト質砂
- 12 暗黒色粘質土
- 13 黒色粘質土
- 14 黒色粘質土 (暗灰色砂を微量含む)
- 15 暗黒灰色シルト質粘質土
- 16 暗灰色砂
- 17 暗灰褐色粘質土
- 18 暗黒灰色粘質土
- 19 暗灰褐色粘質土
- 20 黒色粘質土 (暗灰色砂を少量含む)
- 21 黒色粘質土
- 22 黒色粘質土 (暗灰色砂を微量含む)
- 23 黒色粘質土
- 24 暗黒色シルト質粘質土
- 25 暗黒色シルト (暗灰白色砂を含む)
- 26 暗黒色粘質土 (暗灰色シルト質粘質土を含む)
- 27 暗黒灰色粘質土

003号



008号

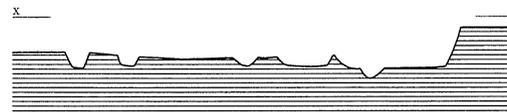
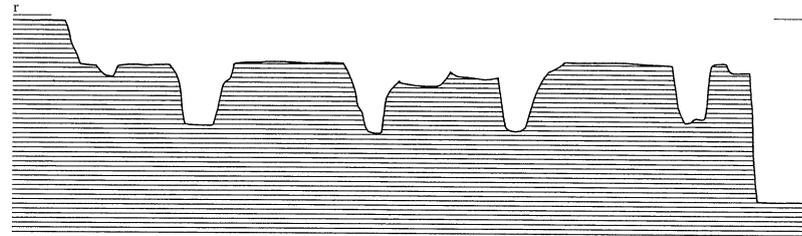
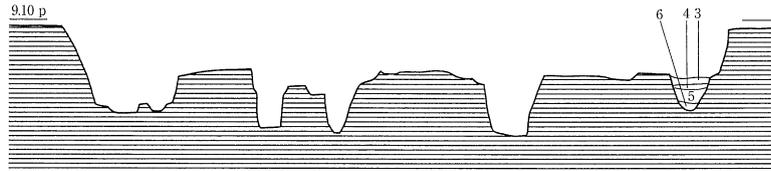


- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (灰色砂を含む)
- 3 黒褐色土 (黒色味強い)
- 4 暗黒灰色土
- 5 暗灰色砂 (黒色土をブロック状に含む)
- 6 暗黒褐色土
- 7 暗灰白色砂 (暗黒色土を含む)
- 8 暗黒褐色土
- 9 暗灰色砂

0 (1 : 80) 4m

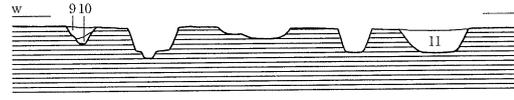
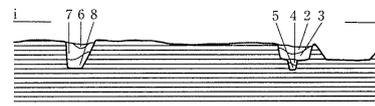
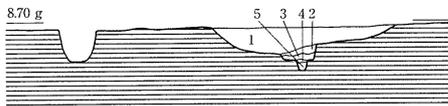
第12図 001~003, 008号

003号



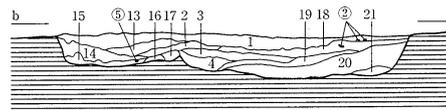
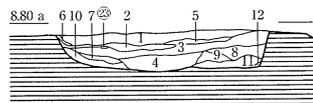
- | | | |
|---------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 暗黒灰色シルト質粘質土 | 8 暗黒色シルト | 15 暗黒色土 (暗灰褐色砂を含む) |
| 2 暗灰色砂 | 9 暗黒色粘質土 | 16 明黒褐色土 |
| 3 暗灰褐色粘質土 | 10 暗黒色粘質土 (暗灰色シルトを含む) | 17 黒褐色土 (暗灰白色砂を含む) |
| 4 暗黒灰色粘質土 | 11 明黒褐色土 (暗白色砂をブロック状に含む) | 18 黒褐色土 |
| 5 暗灰褐色粘質土 | 12 黒褐色土 (暗白色砂を少量含む) | 19 暗黒色粘質土 |
| 6 暗黒灰色粘質土 | 13 暗黒色土 (黒色味強い) | 20 暗黒色粘質土 |
| 7 暗灰色粘土質シルト | 14 暗灰色砂 | 21 暗褐色シルト質砂 |
| | | 22 暗黒灰色シルト質粘質土 |
| | | 23 暗黒色シルト質粘質土 |
| | | 24 暗黒色粘質土 |
| | | 25 暗黒色粘質土 (暗灰白色シルトを少量含む) |
| | | 26 暗黒色粘質土 (暗灰色シルトを少量含む) |
| | | 27 暗黒色粘質土 (暗褐色砂を含む) |
| | | 28 暗灰色砂 |

004号

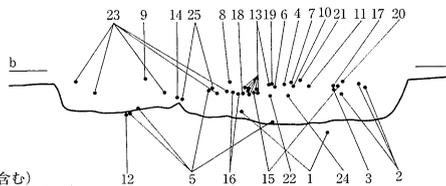


- | | |
|---------------------|--------------|
| 1 黒色粘質土 (暗灰色砂を微量含む) | 7 暗黒灰色粘土質シルト |
| 2 暗灰色シルト | 8 暗黒色粘質土 |
| 3 暗黒色シルト質粘質土 | 9 暗黒灰色粘土質シルト |
| 4 暗黒色粘質土 | 10 暗灰色砂質シルト |
| 5 黒色粘質土 (粘性が強い) | 11 暗黒色シルト |
| 6 暗灰白色砂 | |

006号



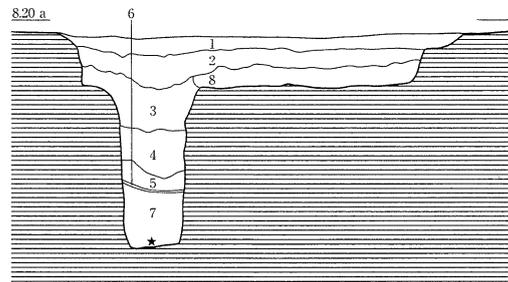
- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 暗黒色粘質土 (黒色味強い) | 16 暗褐色シルト質砂 (暗褐色砂を含む) |
| 2 暗黒色粘質土 (暗灰白色粘質土を含む) | 17 暗灰色シルト質粘質土 (暗黒色粘質土を含む) |
| 3 暗黒色粘質土 (暗灰色砂を含む) | 18 暗黒色粘質土 (暗灰色シルト質粘質土を含む) |
| 4 暗灰色シルト質粘質土 | 19 暗黒灰色粘質土 |
| 5 暗黒色粘質土 | 20 暗黒色粘質土 (やや明るい) |
| 6 暗灰色砂 | 21 暗灰色砂 |
| 7 暗黒色シルト質粘質土 | |
| 8 暗灰黒色粘質土 | |
| 9 暗褐色シルト質砂 | |
| 10 暗黒色粘質土 | |
| 11 暗白灰色シルト | |
| 12 暗褐色砂 | |
| 13 暗黒色粘質土 (暗白灰色砂を含む) | |
| 14 暗灰色シルト質粘質土 | |
| 15 暗褐色砂 | |



0 (1 : 80) 4m

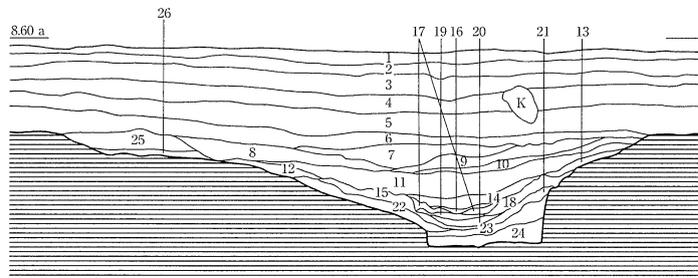
第13図 003, 004, 006号

007号



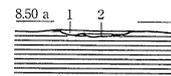
- 1 暗灰色シルト質粘質土
- 2 暗黒褐色シルト質粘質土
- 3 暗黒灰色シルト質粘質土
- 4 暗黒灰色シルト質粘質土
- 5 暗黒褐色シルト質砂
- 6 暗青灰色砂 (クライ化している)
- 7 暗黒灰色シルト質粘質土
- 8 暗黒灰色シルト質粘質土
- ★ 土壌サンプル採取地点

016号

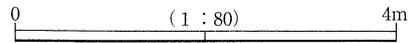


- 1 暗灰色粘質土 (暗黄灰色砂を含む)、現表土
- 2 暗青灰色シルト質砂 (暗白色砂を含む)
- 3 暗黒灰色粘質土 (暗赤褐色シルト質砂を含む)
- 4 暗黒灰色シルト質粘質土
- 5 暗黒灰色シルト質粘質土 (褐色砂を含む)
- 6 暗黒色粘質土
- 7 暗黒色粘質土 (灰白色砂を微量含む)
- 8 暗黒色粘質土 (7より粘性が強い)
- 9 暗黒褐色粘質土
- 10 暗黒褐色粘質土
- 11 暗黒褐色粘質土 (灰白色砂を均等に含む)
- 12 暗黒褐色粘質土
- 13 黒色粘質土 (酸化鉄砂を含む)
- 14 黒色粘質土
- 15 暗黒色粘質土 (灰白色シルトを含む)
- 16 暗黒褐色粘質土
- 17 灰白色砂
- 18 黒色粘土質シルト
- 19 暗黒色粘質土
- 20 灰白色砂
- 21 暗黒色シルト (暗灰白色砂を含む)
- 22 暗黒色粘質土 (褐色砂をブロック状に含む)
- 23 黒色粘質土 (黒色味を極めて強い)
- 24 灰色シルト (褐色砂がラミナ状に混入する)
- 25 暗黒褐色粘質土
- 26 暗黒色粘質土

031号



- 1 暗黒褐色粘質土 (砂粒の混入が多い)
- 2 暗黒褐色粘質土 (1より黒色味強い)



第14図 007, 016, 031号

3. 溝状遺構

016号遺構 (第9図・第14図・第17図)

位置 第1次a調査区、D9-16グリッドを中心に検出された。

形態・構造 017号遺構と重複するが、本遺構の方が新しいと考えられる。調査区に対しほぼ直行し、北西から南東に方向をとる。緩やかに蛇行しており、流路を人為的に掘り直していたことが考えられる。遺構は北西及び南側調査区外へ延びていくようである。現存する長さは約12.6mで、溝全体の上幅は4.6~5.6mを測る。確認面からの深さは、1.2~1.4mで南東側が浅くなる傾向がある。覆土は、暗黒色粘質土及び極めて黒色味が強く粘性も強い黒色粘質土の中に灰白色砂が弓状に堆積している。特に下層にいく程黒色粘質土が主体となる。一部、灰白色砂がラミナ状に巻き上げられている箇所も観察されるが、多くが間層として堆積しているもので、基本的に幾度か水流の影響があるものの、長期間をかけて土壌が堆積していったことが看守される (付編 自然科学分析参照)。断面からは、少なくとも3回以上の掘り直しが確認される。

遺物出土状況 遺物は、下層において弥生時代後期の壺口縁1が出土しているが、摩滅が著しくまた箱形に掘り直された部分から出土しており、本遺構に伴う遺物ではないと考えられる。他には、カワラケ小片や平瓦片が数点出土している。

017号遺構（第9図）

位置 第1次 a 調査区、D9-25グリッドを中心に検出された。

形態・構造 016号遺構と重複する。新旧関係は本遺構の方が古いと考えられる。調査区を斜めに横断し、北西から南東に方向をとる。現存する長さは約14.4mである。上幅は1.94～2.30mであり、底面幅は1.58～2.04mである。きわめて浅い落ち込みであり、確認面からの深さは0.10～0.24m程である。北西側よりも南東側の方が遺存状態は良い。浅い逆台形状の断面を呈する。覆土は暗黒灰色粘質土を主体とする。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

018号遺構（第9図・第17図）

位置 第1次 a 調査区、D9-51グリッドを中心に検出された。

形態・構造 007号遺構と重複する。新旧関係は重複部の断面箇所では、本遺構の方が古い可能性がある。調査区を斜めに横断し、北西から南東にやや蛇行しながら方向をとる。浅い溝状の掘り込みの中にやや深い溝が掘りこまれたものであるが、007号遺構から本遺構を直行するように向かう落ち込み付近にはテラス状の平場がある。現存する長さは約12.6mである。平場を含めた溝全体の上幅は1.39～2.84mであり、やや深い溝の掘り込みは上幅が0.58～0.84mである。確認面からの掘り込みの深さは0.5～0.6mを測る。また、平場は確認面からの深さ0.35～0.40m程である。覆土は、浅い溝が暗黒褐色粘質土、やや深い溝が暗黒色粘質土を主体とする。断面から浅い溝を掘りなおした可能性がある。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土は少量であるが、出土位置はいずれも覆土上～中層である。

019号遺構（第8図）

位置 第1次 a 調査区、E8-03グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側において、003号、020号、021号遺構と重複する。新旧関係は003号、021号遺構より新しく、020号遺構より古いと考えられる。調査区をほぼ縦断し、北東から南西に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは約17.2mである。溝の上幅は0.63～0.94mで、掘り込みの深さは0.30～0.40mを測る。また、U-U'の断面観察から、調査区をほぼ縦断する方向で北東方向に抜けていく可能性が高い。覆土は、上層が暗灰褐色シルト質砂、下層が暗黒色シルトを基本とする。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

020号遺構（第8図）

位置 第1次 a 調査区、E8-02グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側において、019号、021号、023号遺構と重複する。新旧関係はいずれの遺構よりも新しい。調査区を斜めに横断し、北東から南西に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは約18.4mである。溝の上幅は0.24～0.44mで、掘り込みの深さは0.15～0.20mを測る。また、溝の下底面に直径20cm前後、深さ5cm程度の小さいピットが連続して存在している箇所が確認された。鋤痕跡等の可能性もある。覆土は暗灰色シルト質砂を主体とする。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

021号遺構（第8図）

位置 第1次a調査区、D8-93グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側において、004号、019号、020号遺構と重複する。新旧関係は019号、020号遺構より古く、004号遺構より新しいと考えられる。調査区を横断し、北北西から南南東に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは約10.8mである。溝の上幅は1.56～2.24mで、掘り込みの深さは0.40～0.45mを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は黒色粘質土を主体とする。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

022号遺構（第8図）

位置 第1次a調査区、D7-97グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側北西端に位置し、003号遺構に伴う溝状遺構と考えられる。

調査区北西端をわずかにかすめ、北東から南西に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは、約0.68mで、溝の上幅は0.32～0.36mである。掘り込みの深さは0.18～0.20mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は暗灰色砂を主体としており、003号遺構の柱穴埋土と同様の様相を示し、周囲の溝状遺構とは覆土の状態が明らかに異なる。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

023号遺構（第8図）

位置 第1次a調査区、E8-00グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側北西端に位置し、003号遺構に伴う溝状遺構と考えられる。

調査区中央において006号、020号遺構と重複する。新旧関係は020号遺構より古く、006号遺構より新しいと考えられる。調査区北西端及び020号遺構に切られるように途切れる。北西から南東に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。遺存する長さは、約8.32mである。溝の上幅は0.28～0.40mであり、掘り込みの深さは0.18～0.20mを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は022号遺構と同様の状況である。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

024号遺構（第8図）

位置 第1次a調査区、E8-22グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側に位置し、003号遺構に伴う溝状遺構と考えられる。調査区南西端から出発し、北北東に向かうに従って浅くなる。北北東から南南西に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは3.94mである。溝の上幅は0.24～0.38mで、掘り込みの深さは0.15～0.20mを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は022号遺構と同様の状況である。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

4. その他

031号遺構（第9図・第14図）

位置 第1次a調査区、C9-88グリッドにおいて検出された。

形態・構造 北側端部は攪乱によって消滅している。2条の浅い溝がやや斜行して交差するような形態を呈する。両溝とも覆土に違いはなく、同一時期の掘り込みであると考えられる。現存する長さは南北方向が約6.8m、東西方向が約2.4mである。溝の上幅は南北方向が0.2～0.6m、東西方向が0.35～0.5mである。掘り込みの深さは6～8cmを測るのみである。断面形は皿状を呈する。覆土は砂粒を含む暗黒褐色粘質土を主体とする。帰属時期は不明である。

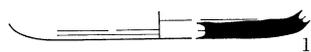
遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

034号遺構（第9図・第17図）

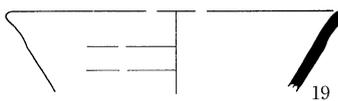
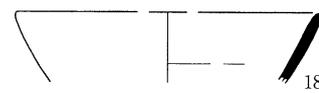
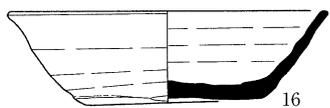
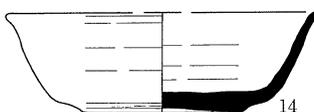
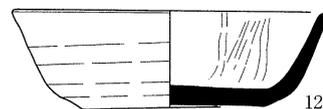
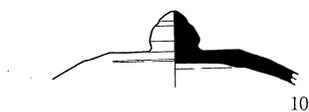
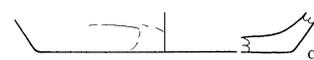
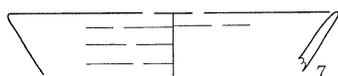
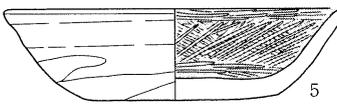
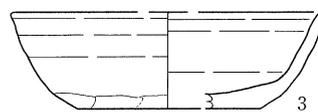
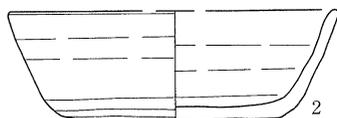
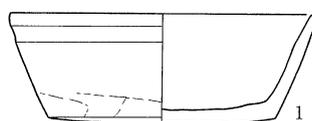
位置 第1次 a 調査区、D9-50グリッドを中心に検出された。

形態・構造 北西側は調査区端部によって切られている。不整な方形を呈する落ち込みであり、平面規模は11.6×8.2mを測る。深さは0.16～0.20m程である。特に東側の立ち上がりは緩やかであり、調査時に確認面において堆積土の違いが把握できた程度である。遺構中にピットが散見されるが規模・深さともに一定せず、柱あたり等も確認できない。現状では遺構とする根拠に欠けるが、確認面付近において土師器杯・甕底部片に混じって、中近世陶磁器片が出土している。本方形区画内に方向がほぼ平行するように018号遺構が存在し、井戸状遺構である007号遺構が接続している。狭小な範囲での検出であり、断定はできないが、007号、018号に伴う方形区画の可能性はある。

002号



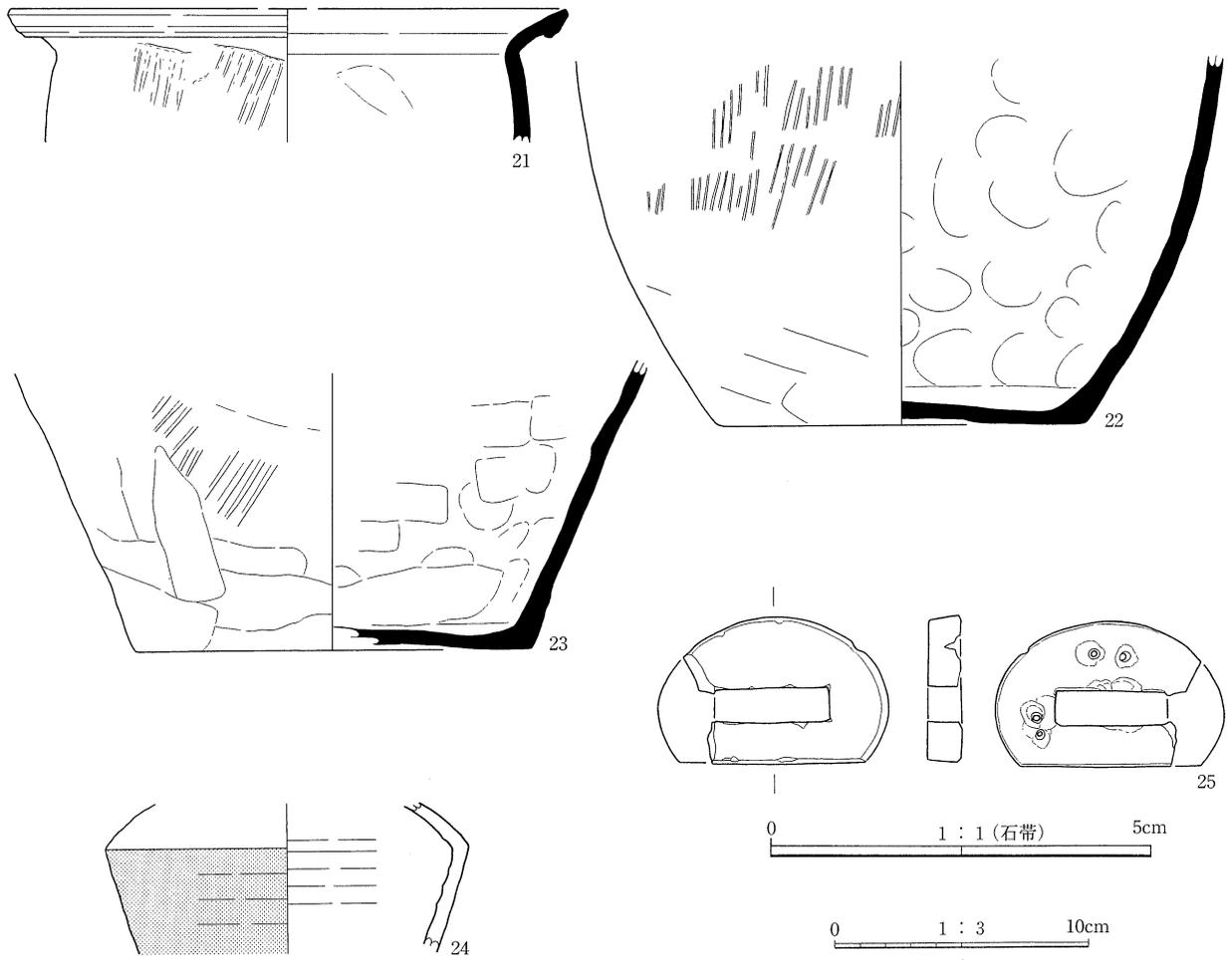
006号



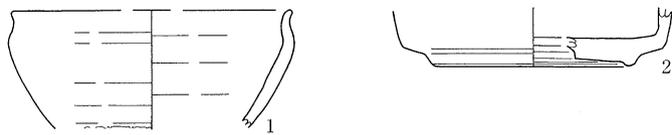
0 1 : 3 10cm

第15图 002, 006号

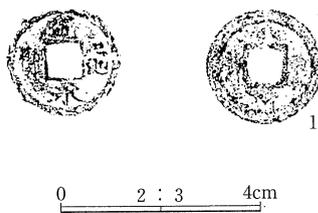
006号



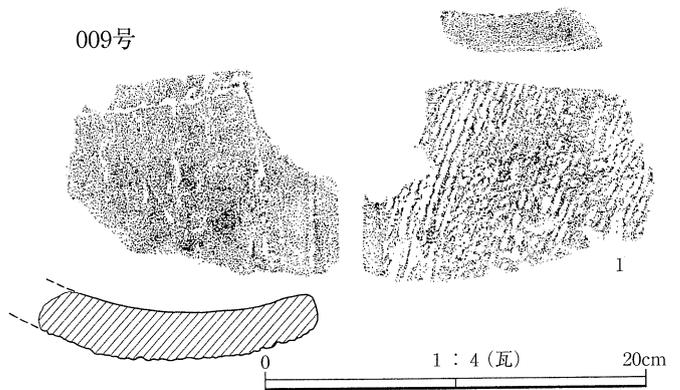
007号



008号

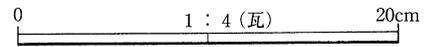
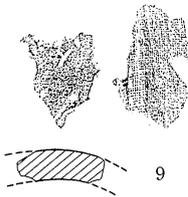
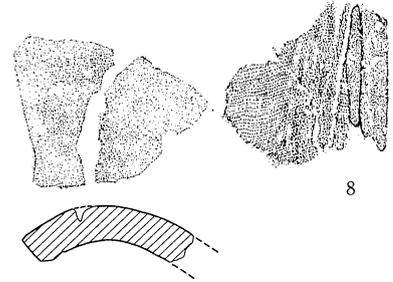
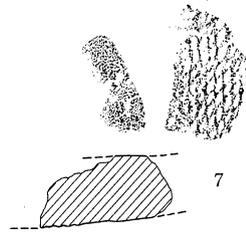
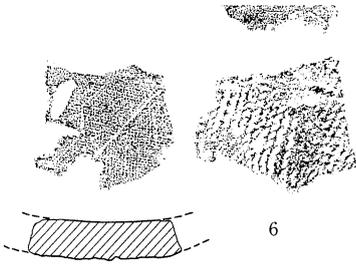
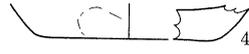
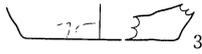
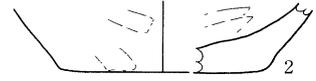
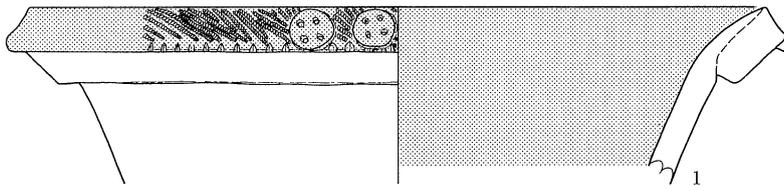


009号

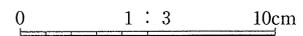
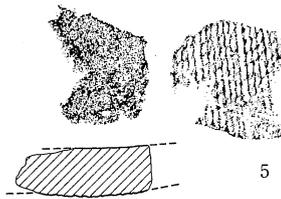
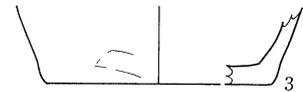


第16图 006~009号

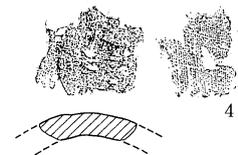
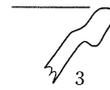
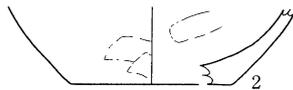
016号



018号

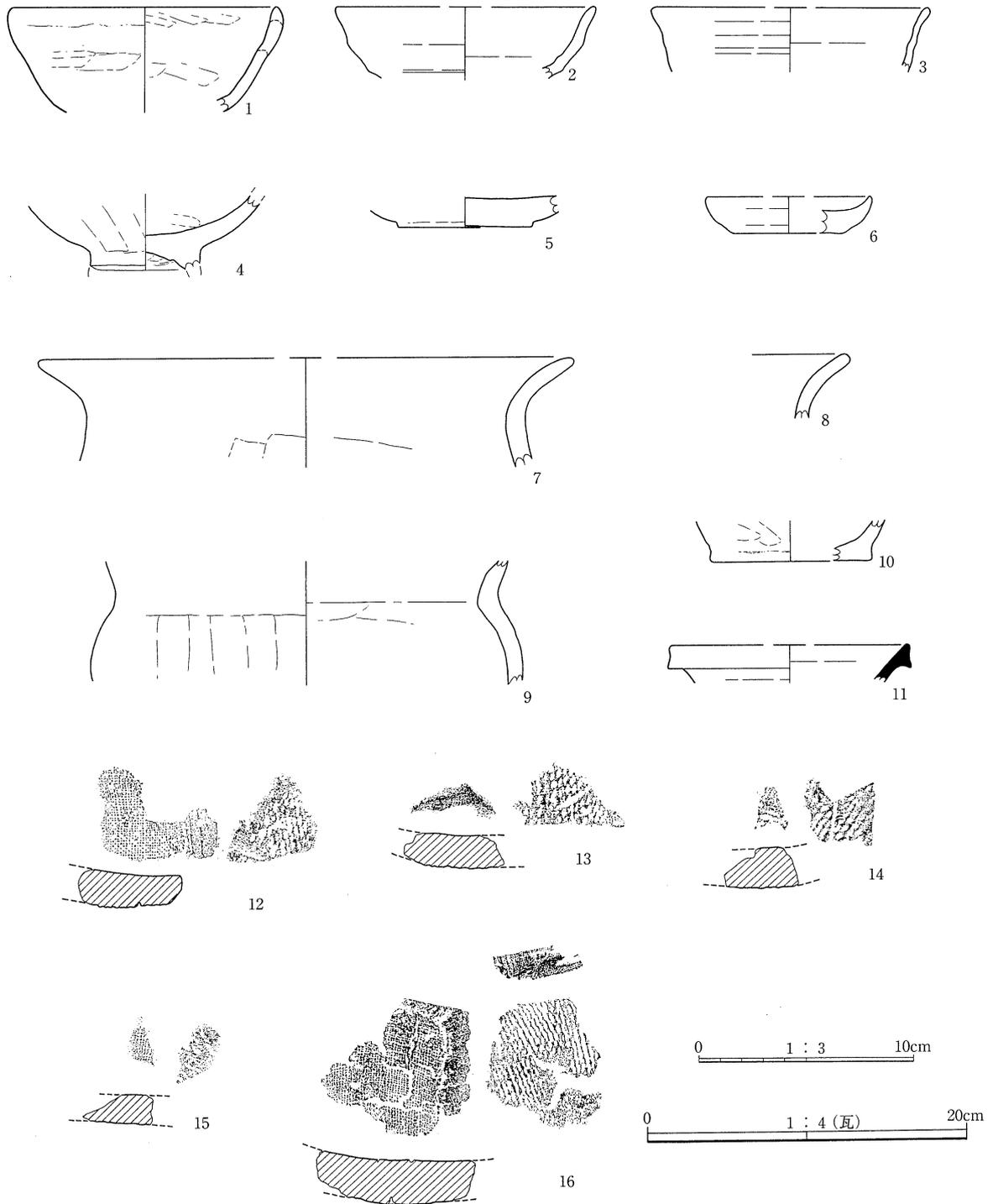


034号



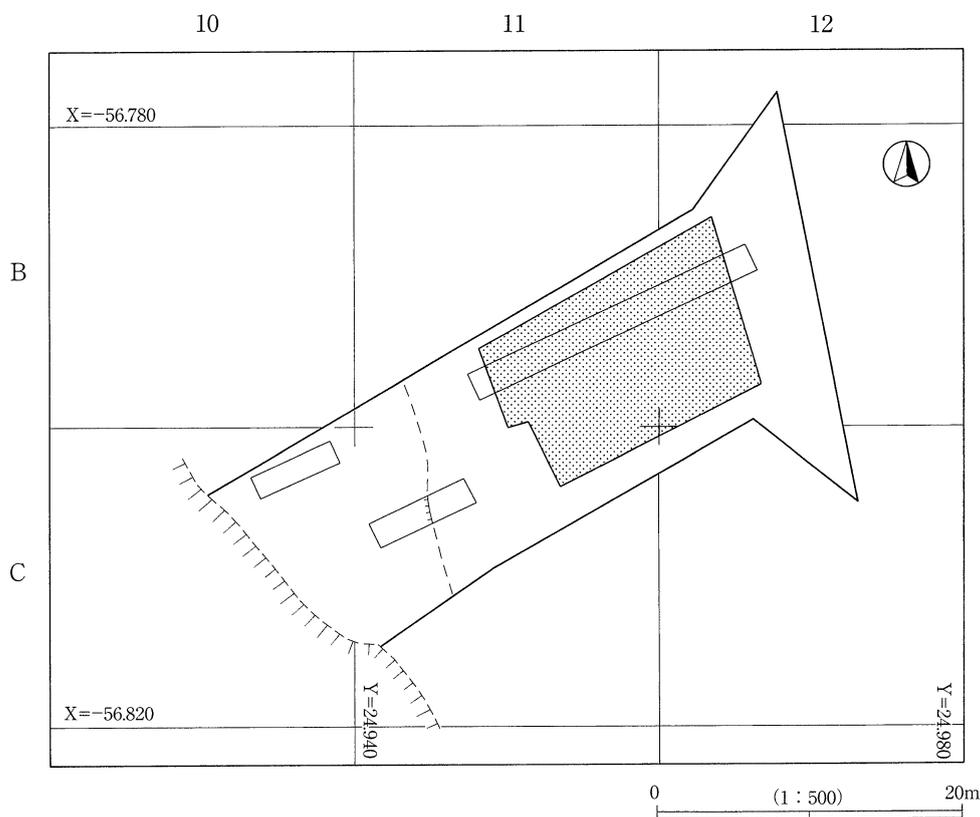
第17图 016, 018, 034号

1次遺構外出土遺物



第18図 1次遺構外出土遺物

Ⅱ. 第2次



第19図 第2次グリッド配置と本調査範囲

1. 溝状遺構

025号遺構（第20図・第21図）

位置 第2次調査区、B12-61グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区北東側を南北に横断するように位置し、南東端で028a号遺構と重複する。本遺構の方が028a号遺構より古い。北北西から南南東に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは約10.6mである。溝の上幅は1.56～1.79mであり、掘り込みの深さは0.4m前後を測る。断面形は皿状を呈する。覆土は暗灰褐色土を主体とする。覆土の状況等から、平安時代にいたる可能性がある。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

026号、027号遺構（第20図・第21図・第22図）

位置 第2次調査区、B11-87グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南西側を南北に横断するように位置し、028号、029号遺構と重複する。本遺構の方が028号遺構より古く、029号遺構より新しい。027号遺構は、浅い溝である026号遺構内に一段深い溝として掘り込まれている。027号遺構の方が古く、027号遺構を掘り直すようにして026号遺構が掘り込まれた可能性が高い。北北西から南南東に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは

Y=24.970



B12-00

025号

B12-50

032号

K

C12-00

Y=24.960

027号

026号

030号

X=-56.790
B11-35

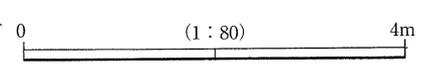
028a号

029号

028b号

C11-05

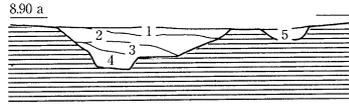
X=-56.800



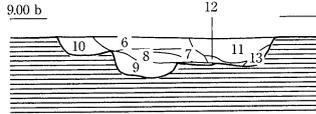
Y=24.950

第20图 第2次全体图

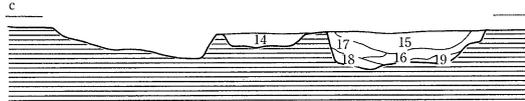
026, 027, 029号



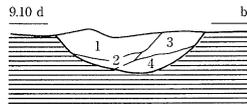
026~029号



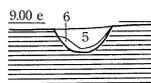
026~028b, 030号



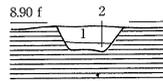
025号



028a号

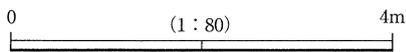


028b号



- 1 暗茶褐色土
- 2 黒灰褐色土

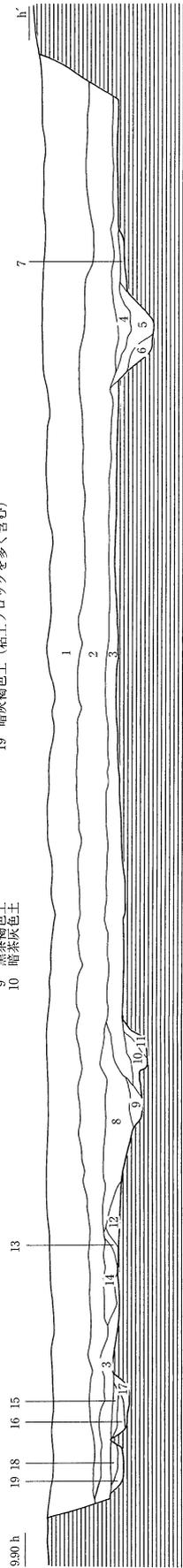
028, 029号



- 1 暗灰褐色土
- 2 暗灰褐色土 (粘土粒を含む)
- 3 暗灰褐色土 (2より明るい)
- 4 黒灰褐色土
- 5 暗灰褐色土 (酸化鉄を多く含む)
- 6 暗灰褐色土
- 7 暗灰褐色土 (粘土粒を含む)
- 8 暗灰褐色土 (酸化鉄を含む)
- 9 黒灰褐色土
- 10 黒灰褐色土 (粘土粒を含む)
- 11 茶褐色土
- 12 茶褐色土 (11より暗い)
- 13 黒灰褐色土
- 14 暗灰褐色土
- 15 暗灰褐色土
- 16 暗灰褐色土 (粘土粒を含む)
- 17 暗灰褐色土 (15より明るい)
- 18 黒灰褐色土
- 19 暗灰褐色土

- 11 黒灰褐色土
- 12 黒灰褐色土 (酸化鉄を含む)
- 13 黒灰褐色土 (灰褐色粘土ブロックを含む)
- 14 黒灰褐色土
- 15 暗茶褐色土
- 16 暗茶褐色土 (粘土粒を含む)
- 17 暗茶褐色土 (ローム粒を多く含む)
- 18 暗茶褐色土
- 19 暗灰褐色土 (粘土ブロックを多く含む)

- 1 暗灰褐色土
- 2 暗灰褐色土 (灰褐色粘土ブロックを含む)
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 暗灰褐色土 (粘土粒を含む)
- 6 暗灰褐色土 (黒褐色土を多く含む)
- 7 暗灰褐色土
- 8 暗灰褐色土
- 9 暗灰褐色土
- 10 暗灰褐色土



第21図 025~030, 032号

約10.0mであるが、027号遺構は南南東側端部で緩やかに浅くなり、026号遺構との掘り込みの差ははっきりしなくなる。026号遺構の上幅は1.54～1.92m、027号遺構の上幅は0.54～0.62mである。掘り込みの深さは、026号遺構は0.35m、027号遺構は0.40m前後を測る。断面形は、浅い皿状を呈した溝と逆台形状の溝が組み合わさったような形態を呈する。覆土は、026号遺構が暗灰褐色土、027号遺構が黒灰褐色土を主体とする。断面形も異なるので何とも言えないが025号遺構と関連した溝であろうか。

遺物出土状況 図示できる遺物は、026号遺構より土師器杯1、甕口縁部2、須恵器杯3及び平瓦片4が出土しているが、いずれも覆土上層及び一括資料である。

出土遺物 1は内外面口クロ調整を施す。3の須恵器は底部に回転糸切り痕跡を残す。いずれも9世紀前半と考えられる。

028 a、b号遺構（第20図・第21図）

位置 第2次調査区、B11-88グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区南側を東西に横断するように位置し、025号、026号、027号、029号遺構と重複する。いずれの遺構よりも新しいと考えられる。西北西から東南東に方向をとる。a、bとも浅い溝状の掘り込みである。現存する長さはaが約16.0m、bが約10.0mを測る。aの上幅は0.57～0.78m、bの上幅は0.61～0.96mである。掘り込みの深さはaが0.25～0.4m、bが0.3～0.4m前後を測る。断面形は、aが浅い皿状を呈し、bがやや不整な逆台形状を呈しaよりも若干深くなる傾向があるようである。覆土は、a、bとも暗茶褐色土を主体とする。a、b両溝芯心間の距離は3.7～3.8m前後を測る。a、b両溝の間に硬化面等は確認されなかったが、ほぼ平行して併走しており道路状遺構と考えられる。遺構の覆土の状況等から中世までさかのぼると考えられる。

遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

029号遺構（第20図・第21図・第22図）

位置 第2次調査区、B11-86グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区西側を南北に横断するように位置し、026号、027号、028号遺構と重複する。いずれの遺構よりも古いと考えられる。西北西から南南東に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは約10.8mである。溝の上幅は0.39～0.50mで、掘り込みの深さは0.2m前後を測る。断面形は皿状を呈する。覆土は酸化鉄を含む暗灰褐色土を主体とする。覆土の状況及び他遺構との切り合い関係等から、古墳時代にいたる可能性がある。

遺物出土状況 図示できる遺物はきわめて少量であり、須恵器杯底部片1が一括資料として出土するのみである。

030号遺構（第20図・第21図）

位置 第2次調査区、C11-08グリッドを中心に検出された。

形態・構造 調査区西側ほぼ中央より027号遺構から分岐するように発し、調査区南端で途切れる。土層断面図から、027号遺構より古く平安時代以前と考えられるが、具体的な時期ははっきりしない。北北西から南南東に方向をとる浅い溝状の掘り込みである。現存する長さは約3.8mである。溝の上幅は

0.6m前後であり、掘り込みの深さは0.2m前後を測る。断面形は皿状を呈する。覆土は粘土粒を含む黒灰褐色土を主体とする。

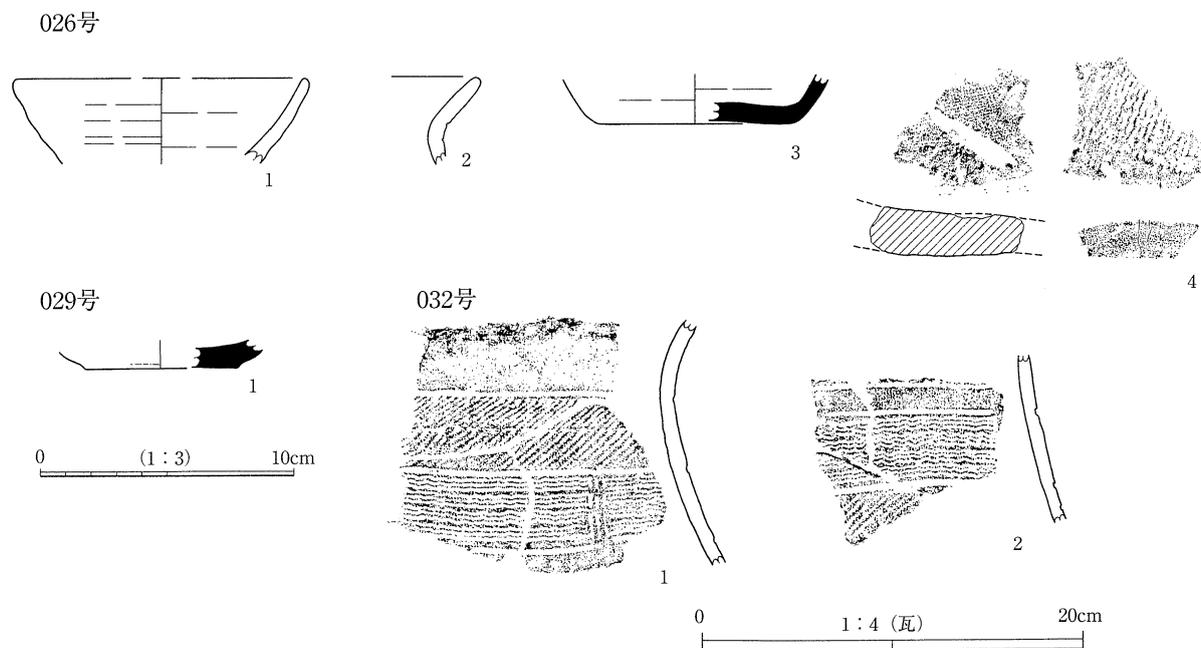
遺物出土状況 図示できる遺物の出土はなかった。

2. その他

032号遺構（第20図・第21図・第22図）

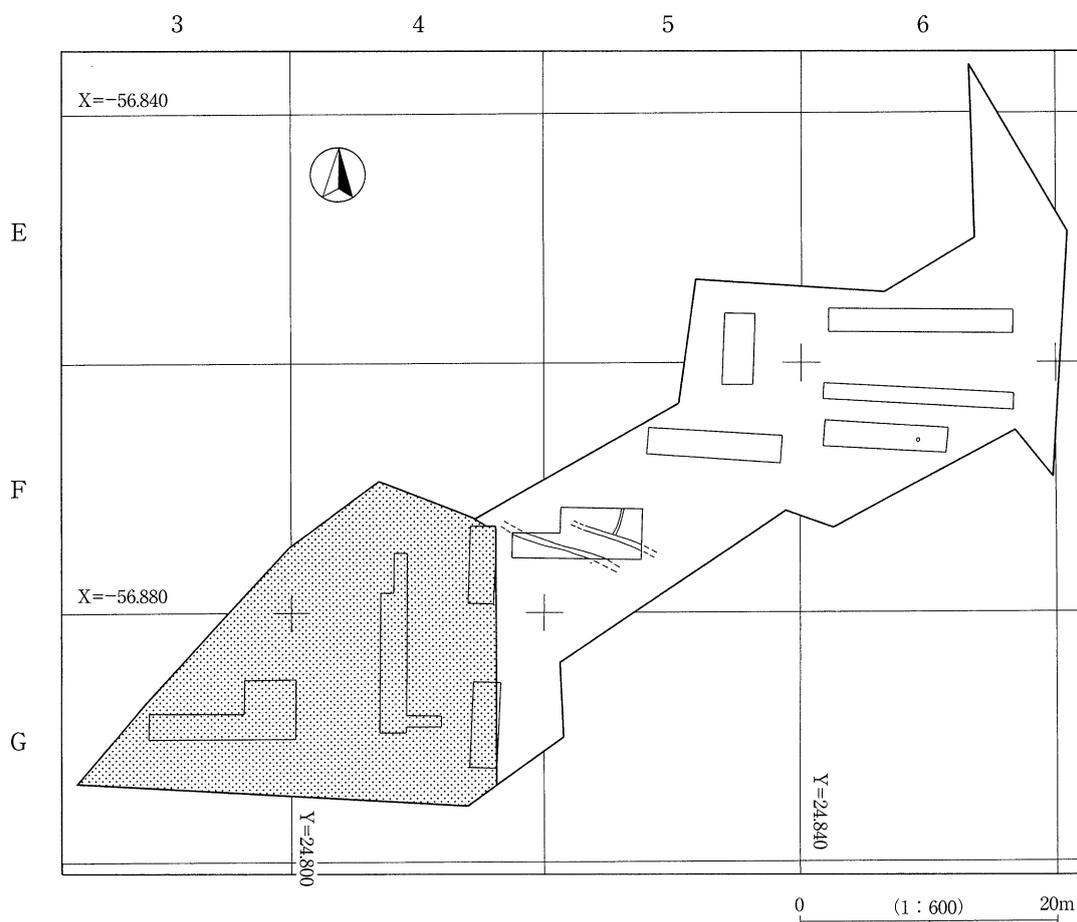
位置 第2次調査区、B11-67グリッドを中心に検出された。

形態・構造 北側は調査区端部によって切られている。不整な楕円形を呈すると考えられ、現状での平面規模は2.16×1.74mを測る。掘り込みはほとんどなく、調査時に確認面において堆積土の違いが把握できた程度である。遺構中にピットが散見されるが、規模・深さともに一定せず、柱あたり等も確認できない。現状では遺構とする根拠に欠けるが、確認面付近において弥生時代後期と考えられる壺形土器片1及び2が出土している。同一個体と考えられ、文様の特徴から北関東地方の影響を受けた土器と考えられる。



第22図 026, 029, 032号

Ⅲ. 第3次



第23図 第3次グリッド配置及び本調査範囲

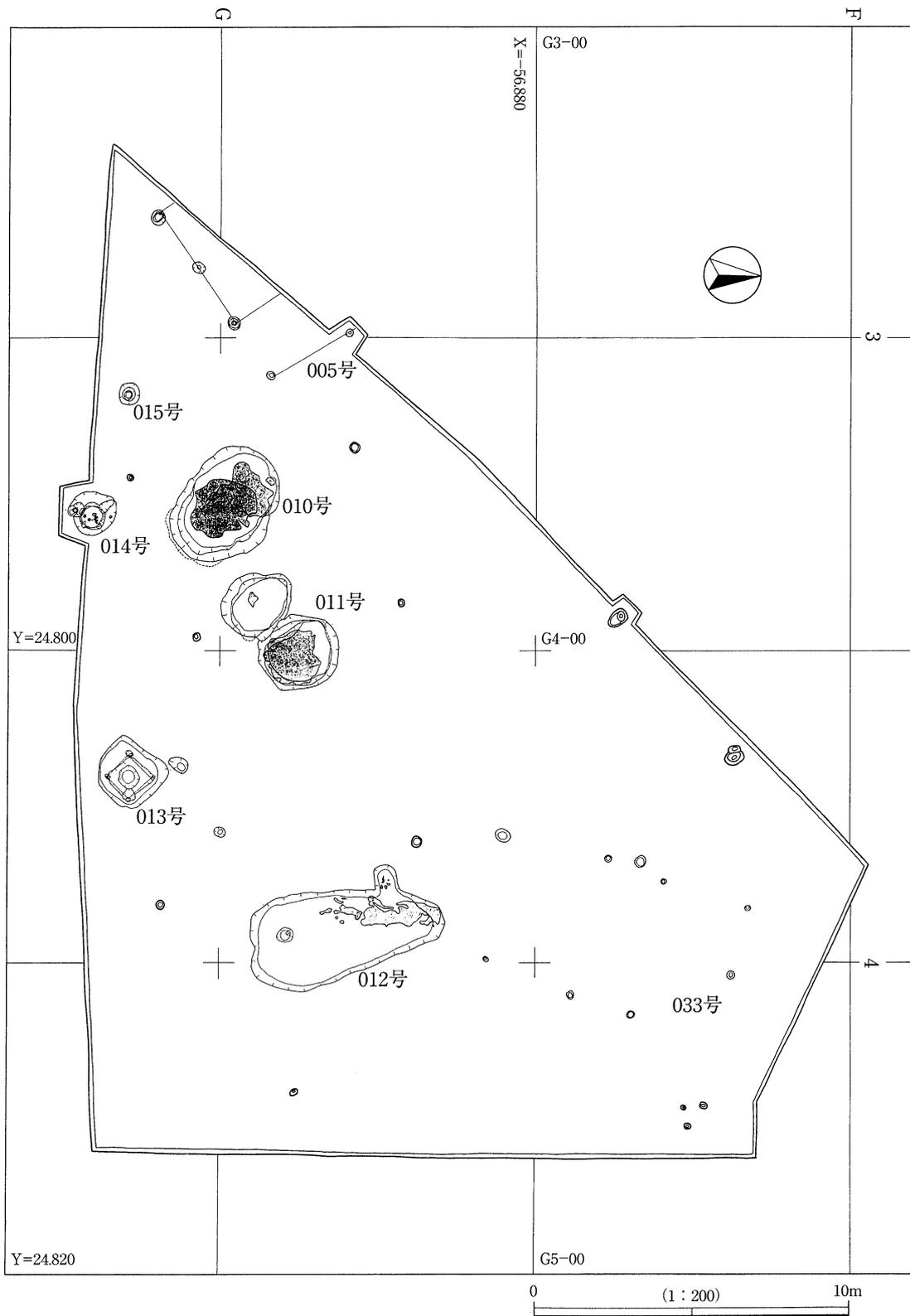
1. 掘立柱建物跡

005号遺構（第24図・第25図）

位置 第3次調査区、G3-54グリッドを中心に検出された。北東側の大半が調査区外に位置する。

形態 主軸方向はN-56°-Eである。現状では推定であるが、梁行2間以上の建物となる可能性がある。桁行は北西調査区外へ延びていると思われ、断定できない。また、隣接する北東側に若干軸が振れるピット列があり、長さは現状で2.88mを測り、主軸方向はN-30°-Wである。振れは若干異なるが埋土の状況は類似しており、掘立柱建物に伴う目隠し塀等の杭列である可能性がある。

構造 現状では、本遺構の北東側の大半が調査区外のため、桁行は推定することはできない。また、掘立柱建物跡である南東側柱穴列及び、杭列と考えられる北東側柱穴列が直角にならず、東へ鈍角に開く形となっており、伴うかどうかについては、不明である。各柱穴の確認面からの掘り込みはいずれも浅く、P1で27cm、P2で18cm、P3で16cm、P4で18cm、P5で14cmを測る。柱穴間隔は、杭列と考えられるP1-P2は2.84m程度と考えられ、掘立柱建物と考えられるP3-P4では2.10mを測る。また、P4-南西隅柱と考えられるP5では2.14mを測り、ほぼ等間隔を示す。柱穴は、円形ないし不整な円



第24図 第3次全体図

形を呈するものが主体を占める。大きさはP1が0.24×0.26mを測り、P2は0.26×0.28mを測る。同様にP3が0.40×0.44m、P4が0.34×0.42m、P5が0.45×0.48mを測る。このことから、本遺構の柱穴の規模は、杭列と考えられるP1、P2が小さくなっている。柱痕跡はP1、P2を除く3穴で確認された。柱には、径10cm～12cm前後の円形柱材を用いていた可能性が高い。

遺物出土状況 遺物は、杭列と考えられるP1内から土師器片が出土するのみである。

2. 土坑

010号遺構（第24図・第26図・第32図）

位置 第3次調査区、G3-58グリッドにおいて検出された。

形態 北西—南東方向を長軸とするほぼ楕円形を呈し、平面規模は4.05×3.04m、深さは1.40mを測る。

構造 上方にはほぼ垂直に立ち上がって開く形態である。覆土は、黒灰色粘質土及び暗灰色粘質土を主体とするが、覆土中～下層及び上層においてイボキサゴを中心とする混貝土層・混土貝層の流入が見られ、また、貝層に混じってウマの中指骨等の獣骨がごく少量であるが含まれていた（第1, 3～5表参照）。また、床面直上において直径10～20cm程の灰色粘土ブロックが大量に堆積しており、天井部の崩落土である可能性が高いことから、地下式壙の一種と考えられる。つまり、本遺構は天井部崩落后、間層をはさんで2時期にわたってイボキサゴを中心とする貝の投棄が行われたと考えられる。貝の投棄は地下式壙廃絶時の行為として把握されるのではないかと考えられる。

遺物出土状況 遺物は、覆土上層においてカワラケが1点検出されている。他の遺物もいずれも遺構の天井部崩落土の上位であり、本遺構に直接伴うものではない。

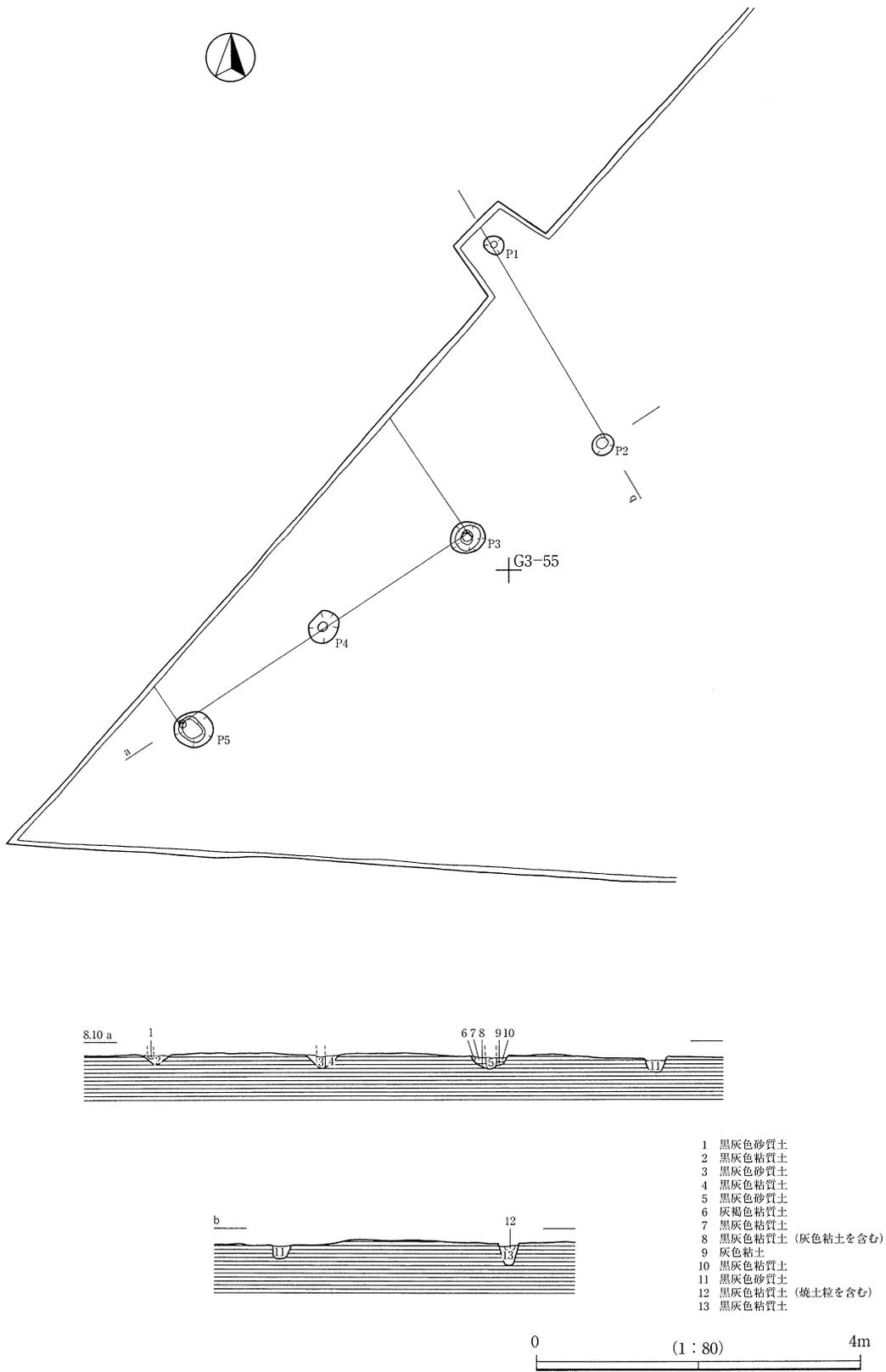
出土遺物 他には、8～9世紀の土師器・須恵器片や平瓦片、砥石10, 11及び用途不明鉄製品17～19等が出土している。砥石は、10が現状で、全長6.0cm、最大幅4.1cm、最大厚4.0cm、重量163.2gを計る。灰白色を呈し、4面に使用痕を持ち仕上げ砥のような滑らかさを持つ。一部に鉄分と思われる付着がある。11は現状で、全長9.3cm、最大幅4.2cm、最大厚2.85cm、重量132.7gを計る。灰白色を呈し、4面に使用痕を持ち仕上げ砥のような滑らかさを持つ。用途不明鉄製品17～19は、重量がそれぞれ、17が10.6g、18が31.4g、19が30.1gを量る。いずれも2～4mmの厚さを持つ板状の鉄が錆に覆われているが良好な状態で出土し、18及び19は鉄がやや湾曲しているようである。

011号遺構（第24図・第26図・第27図・第32図・第33図）

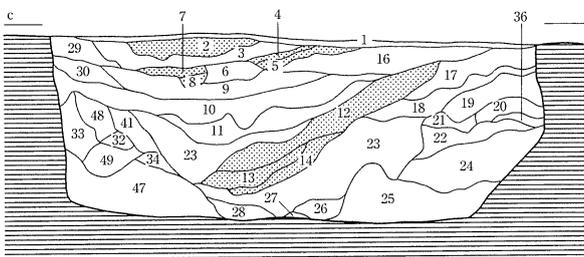
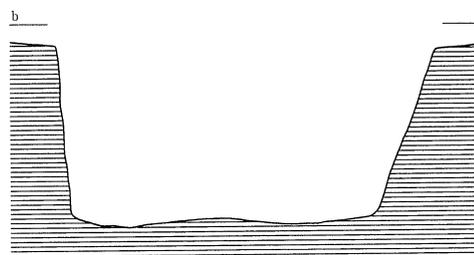
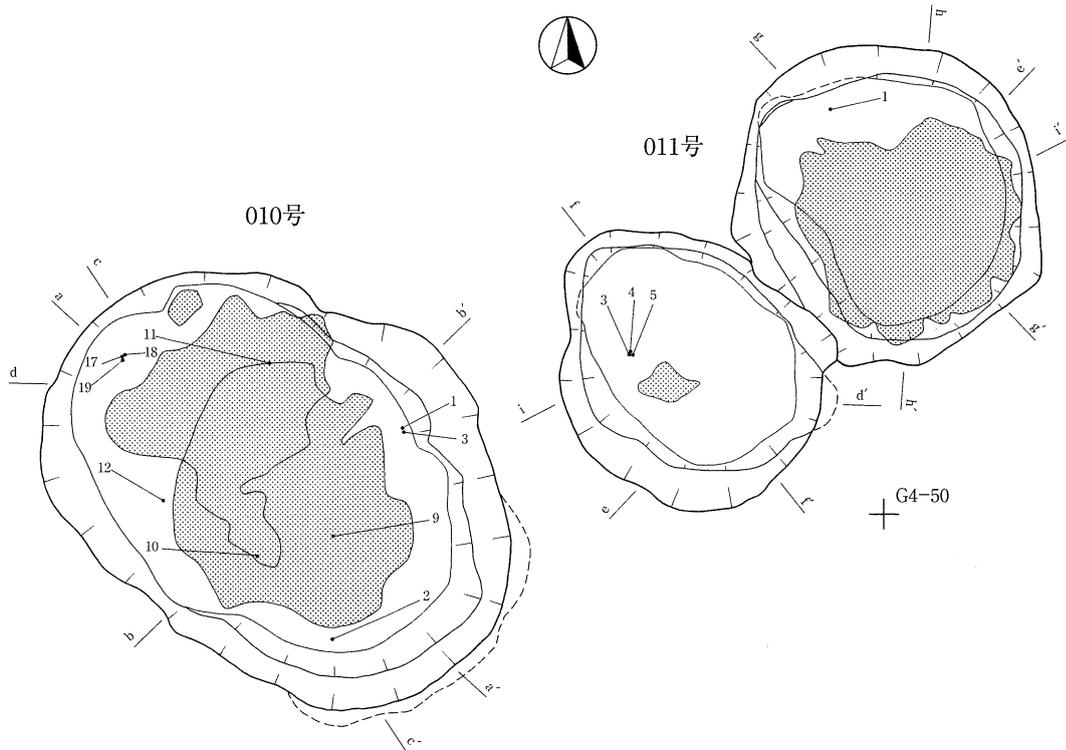
位置 第3次調査区、G3-49グリッドにおいて検出された。

形態 北東—南西方向を長軸とする、2つの小堅穴を組み合わせたような8の字状の形態を有し、平面規模は、4.34×2.56m、深さは北東・南西側ともに1.45mを測る。

構造 上方にはほぼ垂直に立ち上がって開く形態であるが、堅坑部分と考えられる南西側の土坑南東部分中位付近において0.14m程度奥に入り込むように掘り込まれている。覆土は、灰褐色砂質土、黒灰色粘質土及び灰色粘質土を主体とするが、覆土上～中層においてイボキサゴを中心とする混貝土層・混土貝層の流入が見られる（第1, 2, 6～8表参照）。また、床面直上において直径10～20cm程の灰色粘土ブロックが大量に堆積しており、天井部の崩落土である可能性が高いことから、地下式壙の一種と考えられる。断面図から、本遺構は地下式壙完成直後に天井部が崩落し、上層まで埋没した後、北東



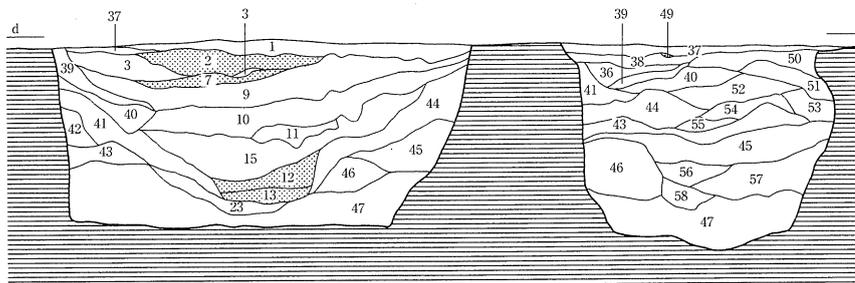
第25図 005号遺構



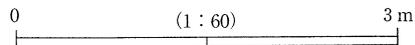
010号

- 1 灰褐色土、現表土
- 2 混土貝層(アサリ、イボキサゴ含む)
- 3 黒灰色粘質土(灰色粘土を含む)
- 4 混土貝層(アサリ、イボキサゴ含む)
- 5 混土貝層(アサリを含む)
- 6 黒灰色粘質土
- 7 混土貝層(アサリ、イボキサゴ含む)
- 8 混土貝層(アサリを含む)
- 9 黒灰色粘質土(均質な粘質土層)
- 10 灰色粘土ブロック(10cm大・多量に含む)
- 11 暗灰褐色粘質土
- 12 混土貝層(アサリ主体)
- 13 混土貝層(イボキサゴ主体)
- 14 混土貝層(ハマグリを含む)
- 15 暗灰褐色粘質土(灰色砂質土を含む)
- 16 黒灰色粘質土(灰色粘土ブロックを含む)
- 17 灰褐色砂質土

- 18 暗灰褐色粘質土
- 19 暗褐色砂質土
- 20 灰色粘土ブロック
- 21 暗灰色粘質土
- 22 灰褐色砂質土
- 23 暗灰褐色粘質土(黒灰色粘質土を含む)
- 24 灰色粘土ブロック
- 25 灰色粘土ブロック(黒褐色土を含む)
- 26 黒灰色粘質土
- 27 暗灰色粘質土
- 28 灰色粘土ブロック
- 29 暗灰色粘質土
- 30 暗灰褐色粘質土
- 31 灰褐色砂質土
- 32 暗褐色砂質土(灰色砂質土を含む)
- 33 灰褐色砂質土(灰色粘土を含む)
- 34 黒灰色粘質土



- 35 灰色粘土ブロック(黒褐色土を含む)
- 36 暗灰色粘質土
- 37 暗灰褐色粘質土
- 38 黒褐色粘質土
- 39 暗灰褐色粘質土
- 40 灰褐色砂質土
- 41 暗灰褐色粘質土
- 42 暗灰褐色粘質土
- 43 暗灰色粘質土
- 44 暗灰褐色粘質土
- 45 黒灰褐色粘質土
- 46 暗褐色粘質土(黒色粘質土を含む)
- 47 暗褐色粘質土
- 48 暗褐色砂質土(灰色砂質土を多く含む)
- 49 暗灰褐色粘質土(黒灰色粘質土を含む)

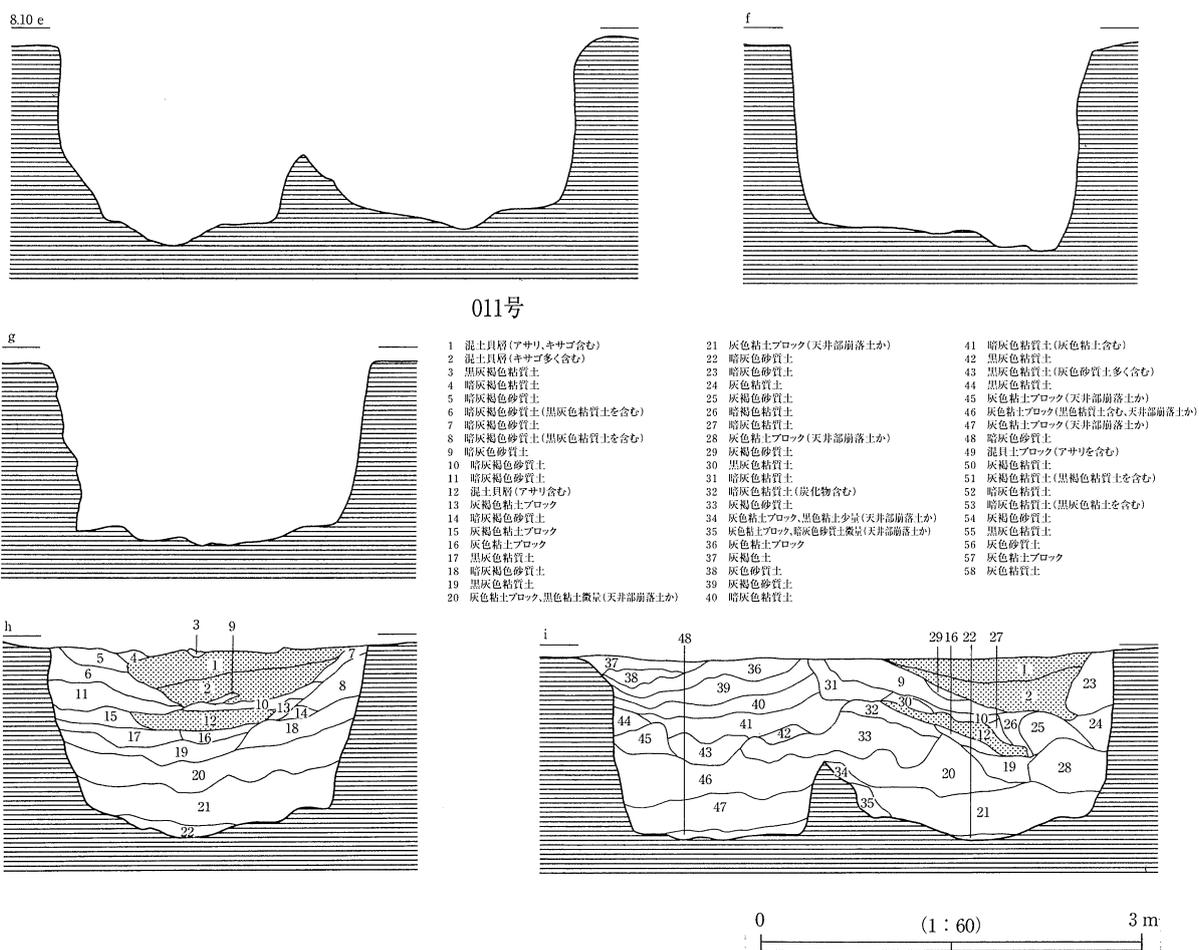


第26図 010, 011号

部分の堅穴を掘り直し、イボキサゴを中心とする貝の投棄を間層をはさんで2時期にわたって行なつたと考えられる。特に北東側堅穴部分に貝の堆積が集中している。貝の投棄は地下式墳絶時の行為として把握されるのではないかと考えられる。

遺物出土状況 遺物は、破片が少量出土するのみであった。覆土中層において青磁碗1が1点出土している。他には、縄文前期・諸磯式期の深鉢土器片2及び奈良・平安期の平瓦片が3～6が出土するのみである。出土位置は覆土中～上層で、遺構の天井部崩落土の上位であり、本遺構に直接伴うものではない。

出土遺物 1の青磁碗は、内面中央に多花文と思われる陰刻が施された、12～13世紀の龍泉窯系・青磁である(出光美術館 金沢 陽氏ご教示)。6は、凹面に粗い布目が施される平瓦片と考えられるが、凸面は強いナデと沈線、及び円文が加えられた特殊な叩き目痕を有するもので、特殊な部位あるいは目印等に使用されたものであろうか。



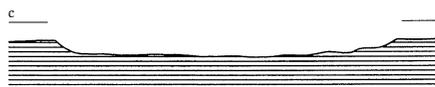
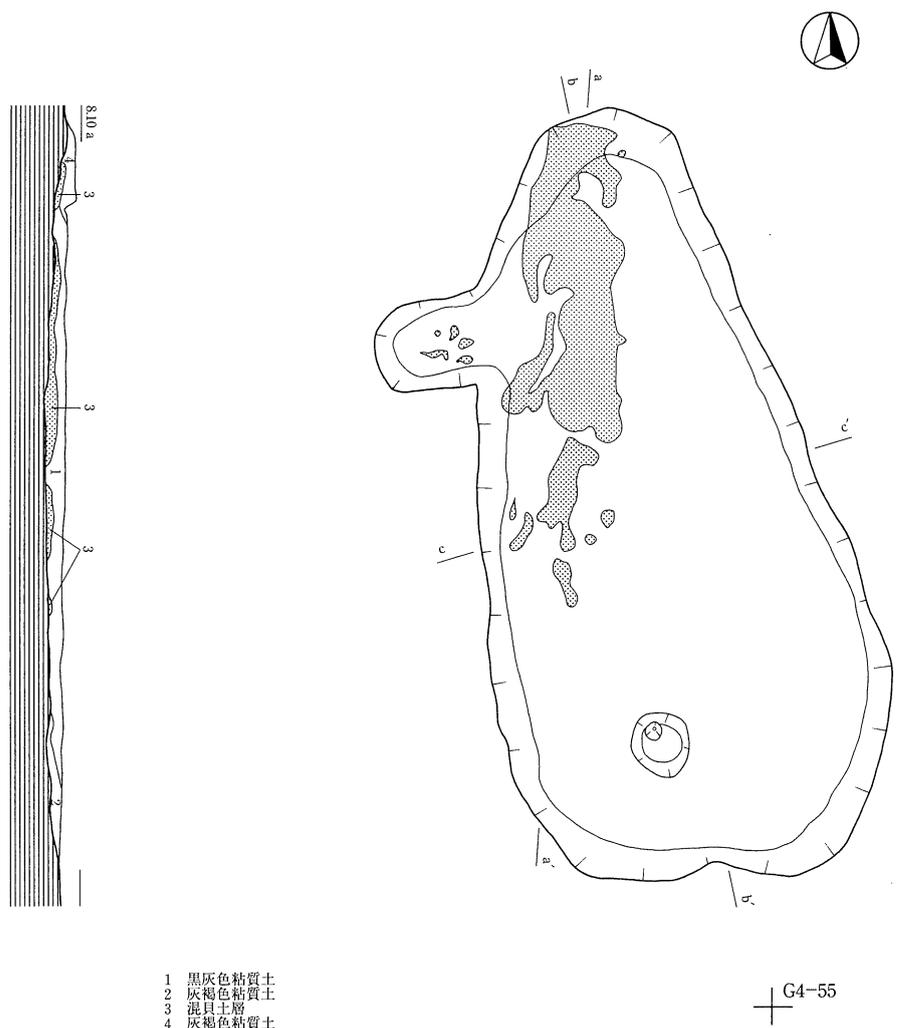
第27図 011号

012号遺構 (第24図・第28図・第33図)

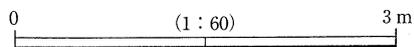
位置 第3次調査区、G4-35グリッドにおいて検出された。

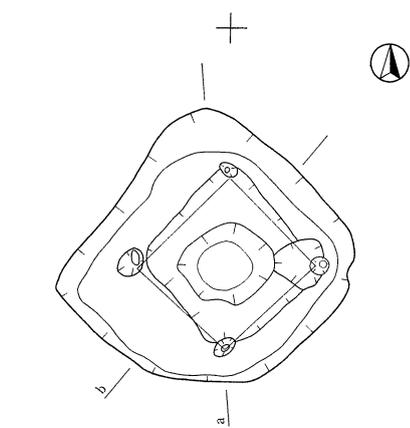
形態 ほぼ南北を主軸方向とする。北側がすぼまる砲弾形を呈し、平面規模は6.16×2.89mを測る。西壁北側で0.80m程の突出部がみられる。

構造 きわめて浅い掘り込みであり、特に北側はわずかに立ち上がり確認できる程度である。深さは0.15~0.18mを測る。覆土は黒灰色粘質土を主体とし、下層において混貝土層の堆積が見られる（第2, 8表参照）。貝層の平面分布は主に北西側に集中しており、西側突出部にも少量ではあるが堆積している。遺物出土状況 遺物はきわめて少量であり、須恵器高台付杯の底部片1が出土したのみである。

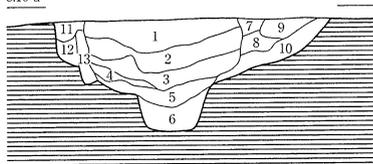


第28図 012号

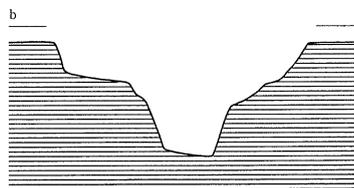




8.10 a

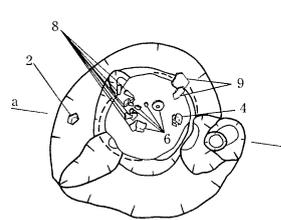


- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土 (色調暗い)
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 暗灰褐色砂質土 (灰色粘土含む)
- 5 黒灰色粘質土
- 6 暗黒色粘質土
- 7 暗黒色粘質土 (黒灰色粘質土含む)
- 8 灰褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土 (灰色粘質土含む)
- 10 灰褐色粘質土 (黒灰色粘質土含む)
- 11 灰褐色粘質土 (黒灰色粘質土含む)
- 12 灰褐色粘質土
- 13 灰褐色粘質土 (しまりやや悪い)

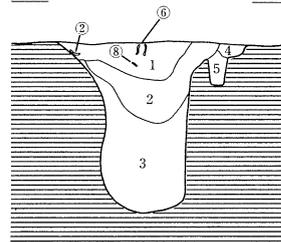


0 (1:60) 2 m

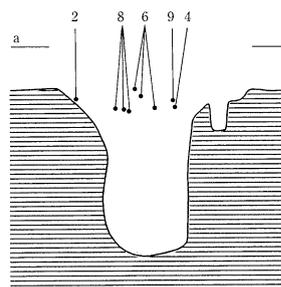
第29図 013号



8.30 a

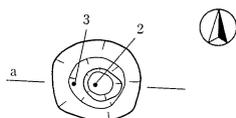


- 1 黒灰褐色砂質土
- 2 黒灰色粘質土
- 3 黒灰褐色砂質土
- 4 灰色粘土
- 5 黒灰色粘質土

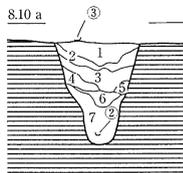


0 (1:60) 2 m

第30図 014号



8.10 a



- 1 黒灰褐色粘質土 (炭化物含む)
- 2 暗灰褐色砂質土
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 黒灰色粘質土 (灰色粘土含む)
- 5 黒灰色粘質土 (灰色粘土少量含む)
- 6 黒灰色粘質土
- 7 暗灰色粘質土

0 (1:60) 2 m

第31図 015号

013号遺構（第24図・第29図・第33図）

位置 第3次調査区、G4-62グリッドにおいて検出された。

形態 井戸状遺構と考えられ、北東—南西方向を長軸とし、平面規模は、1.98×1.90mを測る。また中央に井戸枠痕跡が確認され、平面規模は1.01×0.96mを測る。

構造 掘り方部分では0.35m程で地山に達し、井戸枠内での確認面からの掘り込みは0.90m程である。井戸枠部分はほぼ正方形を呈するが、掘り方部分は南西側の隅が丸みを帯びた形態となっている。木枠部分には均質な黒色粘質土が四方を取り囲んでいた。井戸枠の四隅には小さなピットが確認され、深さは0.13～0.15mとほぼ均一である。掘り方内の埋め土は、黒灰色粘質土を含む灰褐色粘質土が主体であり、井戸枠内部は下層においては暗黒色粘質土を主体とし、上層においては暗灰褐色砂質土を基本とする。

また、南側ピットにおいては柱痕跡が確認され、しまりの弱い灰褐色粘質土が検出された。

遺物出土状況 遺物はきわめて少量であり、土師器甕底部片1と須恵器甕口縁小片2が出土したのみである。

014号遺構（第24図・第30図・第33図）

位置 第3次調査区、G3-78グリッドにおいて検出された。

形態 井戸状遺構と考えられ、平面形態はやや不整な円形を呈する。規模は1.53×1.41mを測る。また、三方のピットに囲まれた井戸部分は0.68×0.66mを測る。

構造 掘り方部分では0.12m程で地山に達し、井戸部分での確認面からの掘り込みは1.36m程である。井戸部分には周囲に3つのピットが存在し、北東側ピットが深さ0.56mを測り、南側ピットが深さ0.29m、北西側ピットは深さ0.38mをそれぞれ測る。堆積土は比較的短期間に埋没したと考えられ、黒灰褐色砂質土を主体とする。また、南側ピット及び北東側ピットにおいて柱痕跡が確認され、南側ピットでは黒灰色粘質土が検出された。

遺物出土状況 遺物は、井戸状遺構としては比較的まとまった出土量があるが、いずれも確認面直下ないし遺構上層での出土となっている。

出土遺物 6は土師器小型甕であり、ほぼ完形で出土した。8及び9は須恵器タタキ甕である。胎土の特徴及び縦位のタタキ等の特徴から千葉産のタタキ甕であると考えられる。

015号遺構（第24図・第31図・第34図）

位置 第3次調査区、G3-65グリッドにおいて検出された。

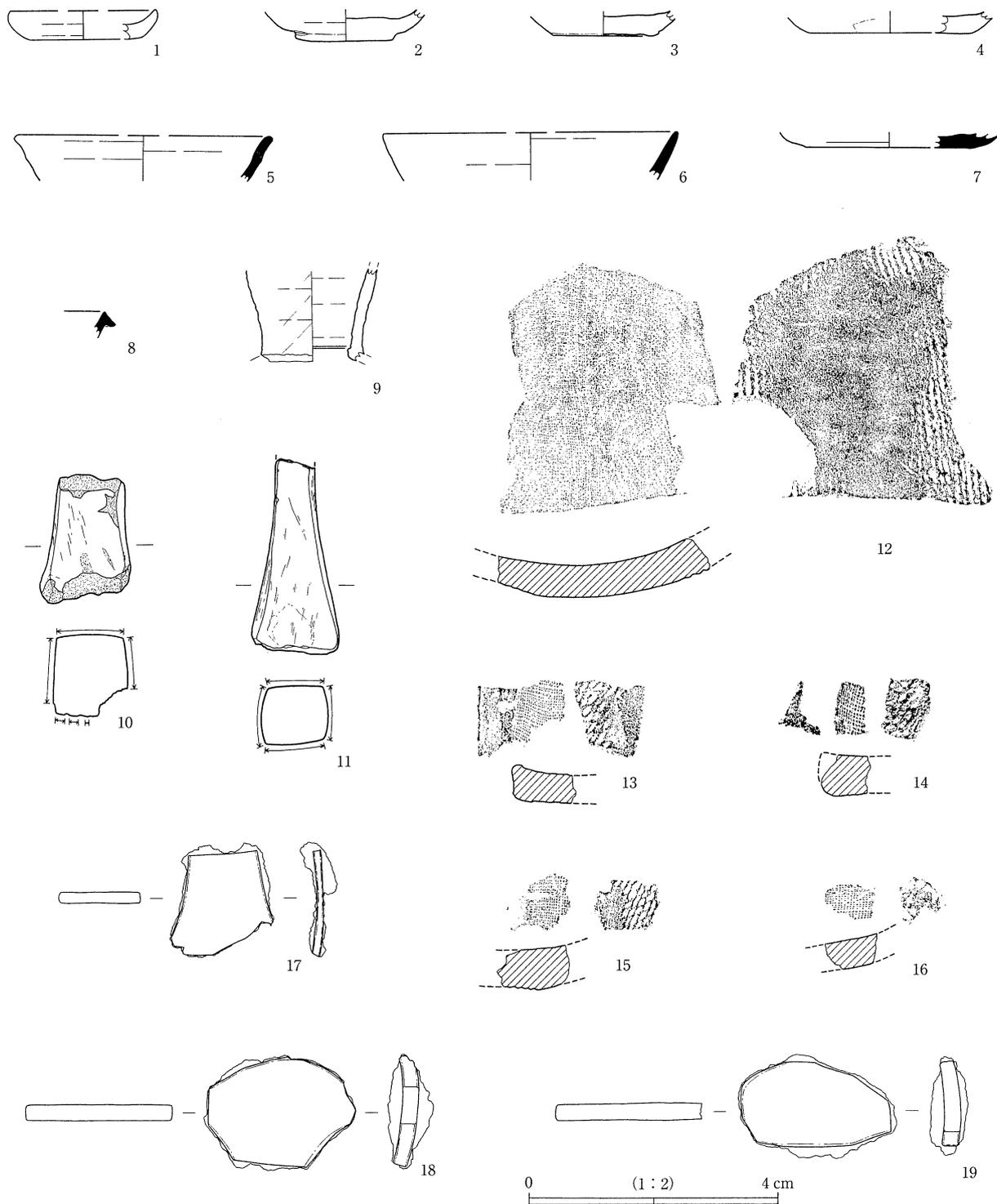
形態 平面形態はやや不整な円形を呈する。規模は、0.69×0.64mを測り、確認面からの掘り込みは0.81m程である。

構造 堆積土の下層部分は比較的短期間に埋没したと考えられ、暗灰色粘質土を主体とする。また、上層部分は黒灰色粘質土を基本とし、1層では炭化物を含んでいる。

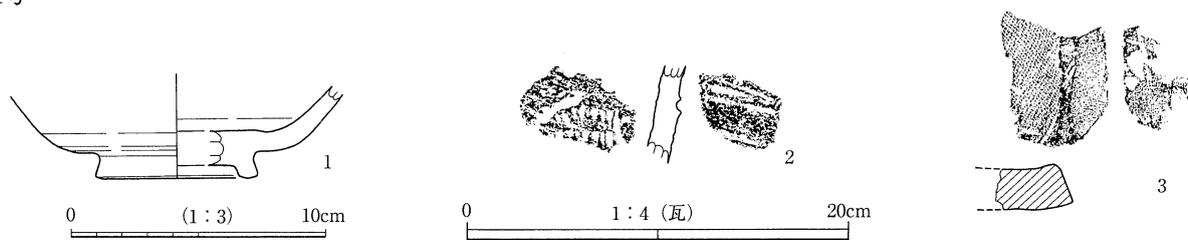
遺物出土状況 遺物は、下層において須恵器杯2及び確認面直上において須恵器甕底部3が出土している。

出土遺物 1、2は、永田・不入、石川窯の須恵器と考えられる。2は、回転糸切り痕を残し、8世紀第4四半期～9世紀初め頃の所産と考えられる。3は銀雲母粒を多量に含む新治産の須恵器であろう。

010号

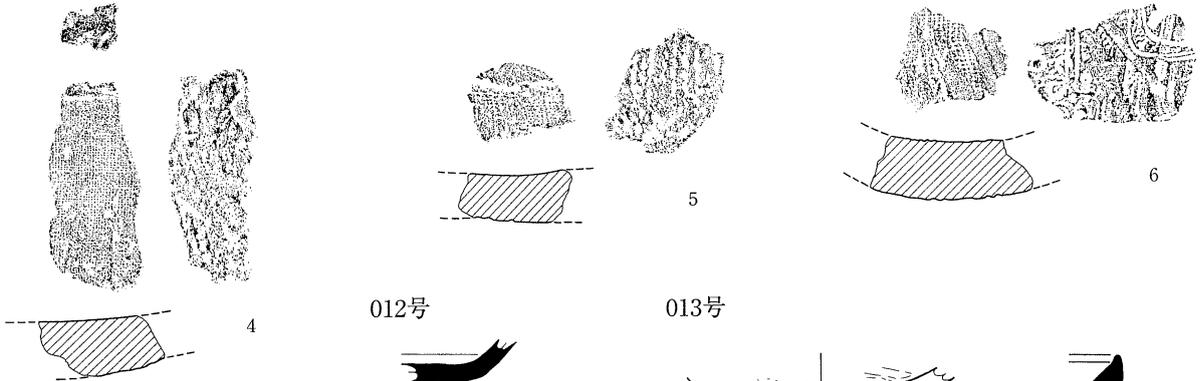


011号

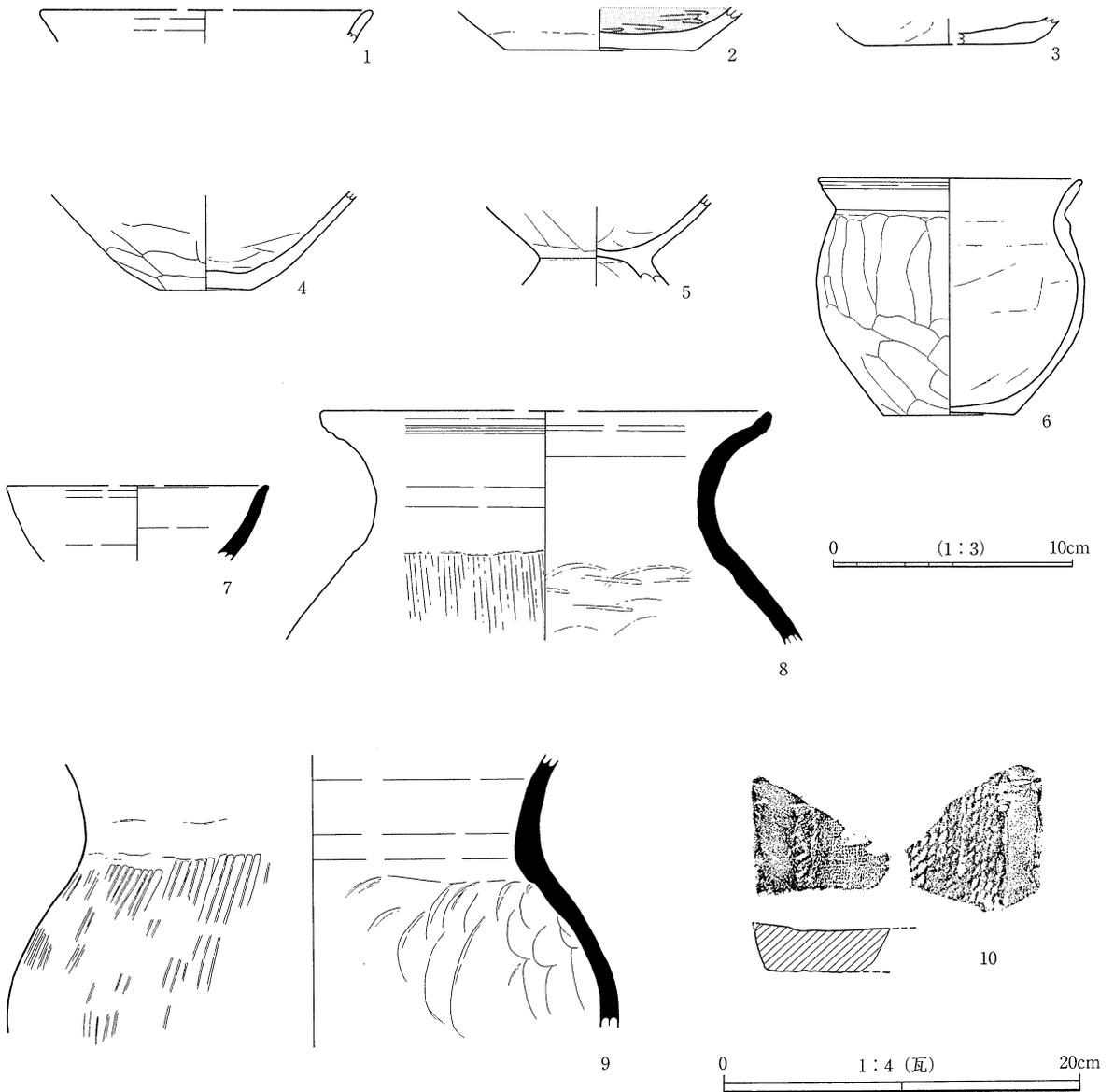


第32图 010, 011号

011号

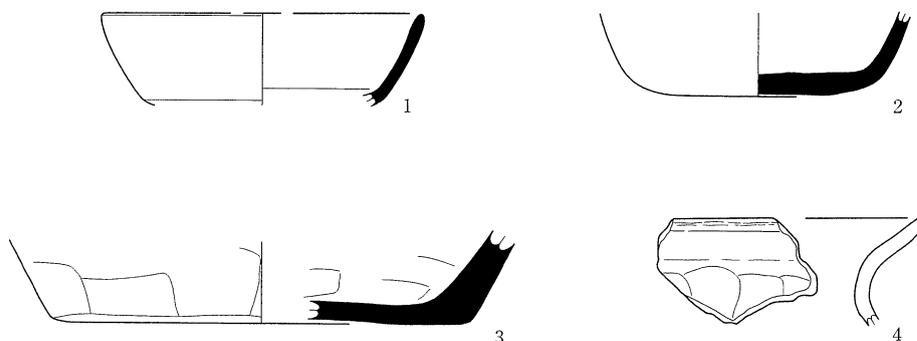


014号



第33图 011~014号

015号



3次遺構外出土遺物



0 (1:3) 10cm

0 1:4 (瓦) 20cm

第34図 015号, 3次遺構外出土遺物

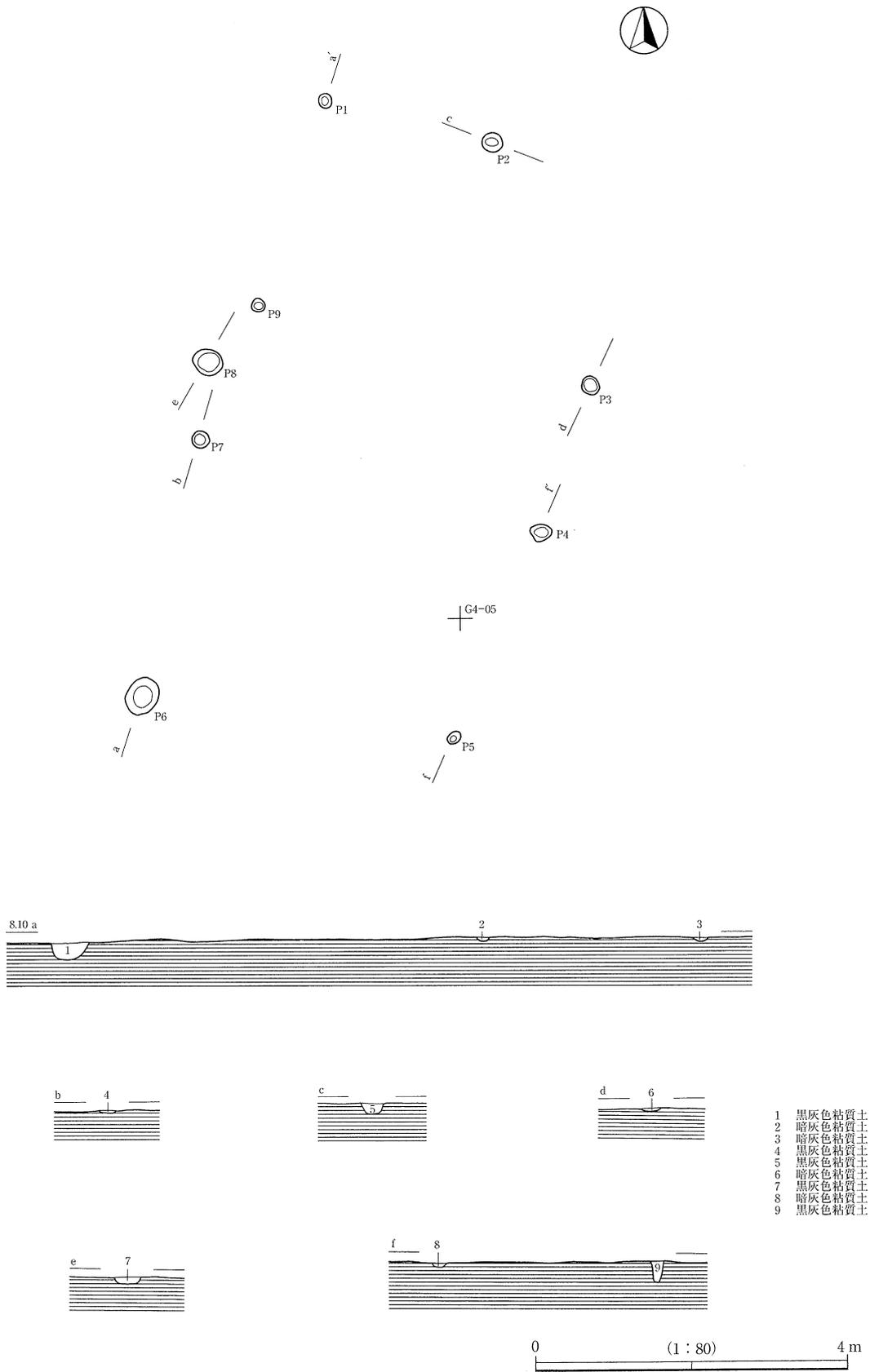
3. その他

033号遺構 (第24図・第35図)

位置 第3次調査区、F4-94グリッドを中心に検出された。

形態・構造 ピット群で、現状では掘立柱建物跡等を想定できる対応関係は見出せない。

ピットは不整な円形を呈するものが主体であり、きわめて掘り込みが浅くピットとして断定するには難しいものもある。現状での平面規模は大小様々であり、0.16~0.50mまでばらつきがある。また、掘り込みの深さも4~28cmと大きなばらつきがある。埋土は黒灰色粘質土主体のピットと暗灰色粘質土主体のピットに分けられるが、それによる規則性は見出せなかった。また柱痕跡及び柱あたり等も確認できなかった。なお、遺物は出土せず、時期は不明である。



第35图 033号

010 貝層 10mm 同定結果(二枚貝)

	第2層			第4層			第12層			第13層			第14層			合計																			
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%																	
アサリ	18	58.0	22.5	23	60.4	28.8	5	15.4	12.5	13	38.4	31.7	20	70.2	28.2	23	82.1	33.8	26	79.2	72.2	19	55.9	50.0	49	192.6	17.4	58	207.7	19.2	143	467.8	24.8		
カガミガイ	2	19.9	2.5																				1	15.6	2.6	2	24.0	0.7	1	46.0	0.3	5	59.5	0.9	
シオフキ	22	29.2	27.5	19	37.8	23.8	19	25.2	47.5	14	17.1	34.1	12	25.6	16.9	14	20.3	20.6	4	7.1	11.1	5	11.3	13.2	97	216.9	34.5	81	198.2	26.8	157	302.9	27.3		
ハマグリ	37	59.8	46.3	38	56.7	47.5	16	22.3	40.0	14	26.0	34.1	38	110.0	33.5	30	80.0	44.1	6	19.1	16.7	12	34.1	31.6	130	475.0	46.3	162	529.0	53.6	266	752.1	46.2		
マガキ																																			
サルボウ	1	9.8	1.3										1	9.8	1.4	1	8.8	1.5								1	5.9	2.6							
合計	80	176.7	100.0	80	154.9	100.0	40	62.9	100.0	41	81.5	100.0	71	215.6	100.0	68	191.2	100.0	36	105.4	100.0	38	122.8	100.0	281	937.2	100.0	302	980.9	100.0	576	1626.7	100.0		
サンプル総乾燥重量	12500			9200			10500			9400			10350			51950																			
フルイ水洗後貝総重量	740			320			970			605			1300			8690																			

010 貝層 4mm 同定結果(二枚貝)

	第2層			第4層			第12層			第13層			第14層			合計																		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%																
アサリ																																		
カガミガイ				3	2.3	15.8																												
シオフキ	3	2.4	20.0										3	2.7	60.0																			
ハマグリ	12	5.5	80.0	16	7.2	84.2	7	2.8	100.0	9	4.5	100.0	2	2.2	40.0	2	2.5	100.0	7	3.6	70.0	5	3.4	71.4	8	7.1	66.7	4	4.2	80.0	42	24.9	71.2	
マガキ																																		
サルボウ																																		
合計	15	7.9	100.0	19	9.5	100.0	7	2.8	100.0	9	4.5	100.0	5	4.9	100.0	2	2.5	100.0	10	7	100.0	7	7.4	100.0	12	14.9	100.0	5	7.0	100.0	59	45.2	100.0	
サンプル総乾燥重量	12500			9200			10500			9400			10350			51950																		
フルイ水洗後貝総重量	1220			1430			2490			2250			1300			8690																		

010 貝層 10mm 同定結果(巻貝)

	第2層			第4層			第12層			第13層			第14層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ				1	5.7	1.0							5	34.1	0.4	6	39.8	0.2
アラムシロ													1	1.9	0.1	1	1.9	0.0
イボキサゴ	40	29.1	97.6	81	53.6	79.4	643	425.0	94.8	365	310.0	94.8	1393	1139.0	98.7	2522	1956.7	96.3
ウミナシ	1	2.1	2.4	20	18.6	19.6	34	30.1	5.0	20	23.7	5.2	12	14.6	0.8	87	89.1	3.3
ツメタガイ							1	6.4	0.1				1	5.6	0.1	2	12.0	0.1
合計	41	31.2	100.0	102	77.9	100.0	678	461.5	100.0	385	333.7	100.0	1412	1195.2	100.0	2618	2099.5	100.0
サンプル総乾燥重量	12500			9200			10500			9400			10350			51950		
フルイ水洗後貝総重量	740			320			970			605			1300			8690		

010 貝層 4mm 同定結果(巻貝)

	第2層			第4層			第12層			第13層			第14層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ																		
アラムシロ																		
イボキサゴ	2310	760.0	99.8	3675	1340.0	99.0	5550	2250.0	99.1	4706	219.8	99.0	1818	860.0	98.4	18059	5429.8	99.1
ウミナシ	5	3.4	0.2	36	11.6	1.0	35	31.1	0.6	47	26.0	1.0	17	11.2	0.9	140	83.3	0.8
ツメタガイ																		
合計	2315	763.4	100.0	3711	1351.6	100.0	5601	2286.0	100.0	4755	247.8	100.0	1847	877.5	100.0	18229	5526.3	100.0
サンプル総乾燥重量	12300			9200			10500			9400			10350			51950		
フルイ水洗後貝総重量	1220			1430			2490			2250			1300			8690		

010 貝層 1mm 同定結果(巻貝)

	第2層			第4層			第12層			第13層			第14層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ																		
アラムシロ																		
イボキサゴ	81	5.7	97.6	151	7.2	92.1	32	13.5	86.5	144	6.1	91.7	16	7.0	100.0	424	39.5	92.8
ウミナシ	2	1.2	2.4	13	1.8	7.9	5	3.2	13.5	13	2.0	8.3				33	8.2	7.2
ツメタガイ																		
合計	83	6.9	100.0	164	9.0	100.0	37	16.7	100.0	157	8.1	100.0	16	7.0	100.0	457	47.7	100.0
サンプル総乾燥重量	12500			9200			10500			9400			10350			51950		
フルイ水洗後貝総重量	450			324			800			535			250			2359		

011 貝層 10mm 同定結果(二枚貝)

	第1層			第2層			第12層			合計												
	個数	重量g	%	個数	重量g	%																
アサリ	94	370.0	47.0	81	300.0	50.9	80	230.1	46.2	83	251.3	46.4	48	119.1	36.9	42	80.5	29.4	225	740.4	42.0	
オキシジミ																						
カガミガイ				1	6.1	0.6																
サルボウ							1	5.9	0.6				1	7.9	0.8							
シオフキ	69	130.4	34.5	50	117.3	31.4	45	84.4	26.0	54	86.2	30.2	64	65.5	49.2	77	81.4	53.8	200	298.0	37.3	
ハイガイ																						
ハマグリ	37	53.7	18.5	27	35.1	17.0	47	46.7	27.2	42	44.6	23.5	16	72.4	12.3	16	58.3	11.2	100	172.8	18.7	
マガキ																						
合計	200	554.1	100.0	159	458.5	100.0	173	367.1	100.0	179	382.1	100.0	130	275.5	100.0	143	255.5	100.0	536	1266.4	100.0	
サンプル総乾燥重量	11000			14200			14400			39600												
フルイ水洗後貝総重量	2390			1800			740			3130												

011 貝層 4mm 同定結果(二枚貝)

	第1層			第2層			第12層			合計											
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%						
アサリ																					
オキシジミ																					
カガミガイ																					
サルボウ																					
シオフキ													48	9.8	81.4	78	15.0	88.6	78	15.0	72.9
ハイガイ	5	3.5	100.0				11	4.5	100.0	11	3.9	91.7	2	3.1	3.4	3	3.0	3.4	19	11.0	17.8
ハマグリ													1	1.6	1.7				1	1.6	0.9
マガキ																					
合計	5	3.5	100.0	0	0.0	0.0	11	4.5	100.0	12	5.2	100.0	59	17.9							

011 貝層 10mm 同定結果(巻貝)

	第1層			第2層			第12層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ												
アラムシロ												
イボキサゴ	626	380	99.8	982	535.0	100.0	52	32.1	100.0	678	412.1	100.0
ウミナ	1	2.4	0.2									
カワニナ												
ツメタガイ												
合計	627	382.4	100.0	982	535.0	100.0	52	32.1	100.0	678	412.1	100.0
サンプル総乾燥重量	11000			14200			14400			39600		
フルイ水洗後貝総重量	2390			1800			740			4930		

011 貝層 4mm 同定結果(巻貝)

	第1層			第2層			第12層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ												
アラムシロ												
イボキサゴ	3031	1244	99.9	5575	2490	99.8	1803	710	99.5	10409	4444	99.8
ウミナ	4	3.2	0.1	9	3.3	0.2	5	2.6	0.3	18	9.1	0.2
カワニナ							4	2.6	0.2	4	2.6	0.0
ツメタガイ												
合計	3035	1247	100.0	5584	2493	100.0	1812	715.2	100.0	10431	4455	100.0
サンプル総乾燥重量	11000			14200			14400			39600		
フルイ水洗後貝総重量	1710			2920			1100			5730		

011 貝層 1mm 同定結果(巻貝)

	第1層			第2層			第12層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ												
アラムシロ												
イボキサゴ	110	6.4	99.1	26	2.6	100.0	381	14.5	99.0	517	23.5	99.0
ウミナ	1	0.1	0.9				4	1.7	1.0	5	1.8	1.0
カワニナ												
ツメタガイ												
合計	111	6.5	100.0	26	2.6	100.0	385	16.2	100.0	522	25.3	100.0
サンプル総乾燥重量	11000			14200			14400			39600		
フルイ水洗後貝総重量	600			590			690			1880		

012 貝層 10mm 同定結果(二枚貝)

	第3層						合計		
	L			R			個数	重量g	
	個数	重量g	%	個数	重量g	%			
アサリ	31	50.5	70.5	31	52.8	68.9	31	52.8	66.0
カガミガイ	7	23.4	15.9	9	26.7	20.0	9	26.7	19.1
シオブキ	2	2.4	4.5	3	4.2	6.7	3	4.2	6.4
ハマグリ	4	11.2	9.1	2	3.3	4.4	4	11.2	8.5
マガキ									
サルボウ									
合計	44	87.5	100.0	45	87	100.0	47	94.9	100.0
サンプル総乾燥重量	10700						10700		
フルイ水洗後貝総重量	325						325		

012 貝層 4mm 同定結果(二枚貝)

	第3層						合計		
	L			R			個数	重量g	
	個数	重量g	%	個数	重量g	%			
アサリ	8	3.5	72.7	17	5.4	85.0	17	5.4	81.0
カガミガイ	1	1.6	9.1				1	1.6	4.8
シオブキ	2	2.3	18.2	3	2.1	15.0	3	2.1	14.3
ハマグリ									
マガキ									
サルボウ									
合計	11	7.4	100.0	20	7.5	100.0	21	9.1	100.0
サンプル総乾燥重量	10700						10700		
フルイ水洗後貝総重量	800						800		

012 貝層 1mm 同定結果(二枚貝)

	第3層						合計		
	L			R			個数	重量g	
	個数	重量g	%	個数	重量g	%			
アサリ									
カガミガイ									
シオブキ									
ハマグリ	2	1.5	100.0				2	1.5	100.0
マガキ									
サルボウ									
合計	2	1.5	100.0	0	0	0	2	1.5	100.0
サンプル総乾燥重量	10700						10700		
フルイ水洗後貝総重量	295						295		

012 貝層 10mm 同定結果(巻貝)

	第3層			合計	
	個数	重量g	%	個数	重量g
アカニシ					
アラムシロ					
イボキサゴ	1	2.3	100.0	1	2.3
ウミナ					
ツメタガイ					
合計	1	2.3	100.0	1	2.3
サンプル総乾燥重量	10700			10700	
フルイ水洗後貝総重量	325			325	

012 貝層 4mm 同定結果(巻貝)

	第3層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ						
アラムシロ						
イボキサゴ	3268	655.0	99.97	3268	655.0	99.97
ウミナ	1	2.1	0.03	1	2.1	0.03
ツメタガイ						
合計	3269	657.1	100.00	3269	657.1	100.00
サンプル総乾燥重量	10700			10700		
フルイ水洗後貝総重量	800			800		

012 貝層 1mm 同定結果(巻貝)

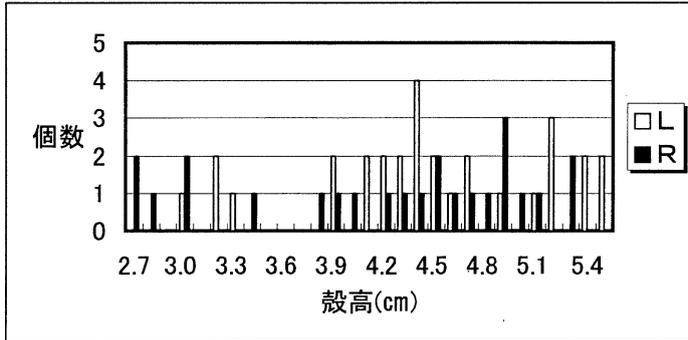
	第3層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ						
アラムシロ						
イボキサゴ	318	12.5	100.0	318	12.5	100.0
ウミナ						
ツメタガイ						
合計	318	12.5	100.0	318	12.5	100.0
サンプル総乾燥重量	10700			10700		
フルイ水洗後貝総重量	295			295		

第2表 貝層サンプル種別表(2)

010ハマグリ殻高度数分布表

	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	
L				1		2	1							2		2
R	2	1		2				1				1	1	1		
合計	2	1		3		2	1	1				1	3	1	2	

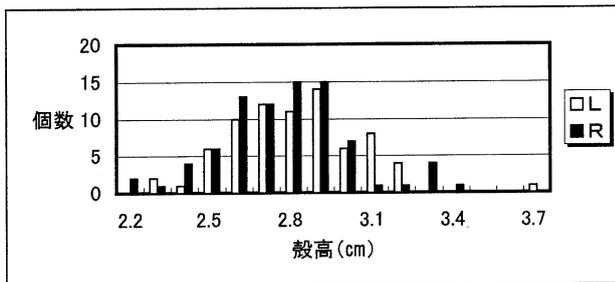
4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5	合計
2	2	4	2	1	2		1		1	3		2	2	30
1	1	1	2	1	1	1	3	1	1		2			24
3	3	5	4	2	3	1	4	1	2	3	2	2	2	54



L		R	
平均	4.5	平均	4.2
中央値	4.4	中央値	4.5
最頻値	4.4	最頻値	4.9
標準偏差	0.70	標準偏差	0.85
最小	3.0	最小	2.7
最大	5.5	最大	5.3
標本数	30	標本数	24

010アサリ殻高度数分布表

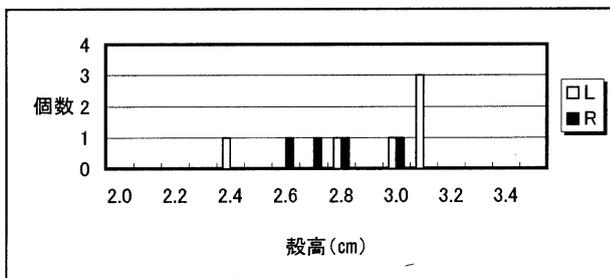
	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	合計
L		2	1	6	10	12	11	14	6	8	4					1	75
R	2	1	4	6	13	12	15	15	7	1	1	4	1				82
合計	2	3	5	12	23	24	26	29	13	9	5	4	1			1	157



L		R	
平均	2.8	平均	2.7
中央値	2.7	中央値	2.6
最頻値	2.7	最頻値	2.7
標準偏差	0.26	標準偏差	0.23
最小	2.3	最小	2.2
最大	3.7	最大	3.4
標本数	75	標本数	82

010第2層・10mmアサリ殻高度数分布表

	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	合計
L					1				1		1	3					6
R							1	1	1		1						4

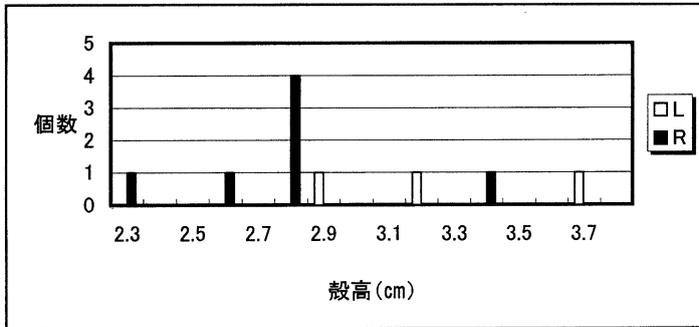


L		R	
平均	2.9	平均	2.8
中央値	3.1	中央値	2.8
最頻値	3.1	最頻値	*
標準偏差	0.28	標準偏差	0.17
最小	2.4	最小	2.6
最大	3.1	最大	3.0
標本数	6	標本数	4

第3表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表 (1)

010第4層・10mmアサリ殻高度数分布表

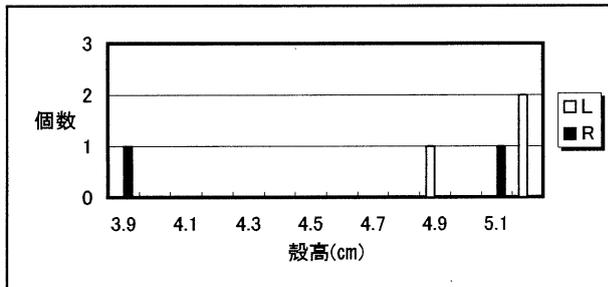
	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	合計
L							1			1						1	3
R	1			1		4						1					7



L		R	
平均	3.3	平均	2.8
中央値	3.2	中央値	2.8
最頻値	*	最頻値	2.8
標準偏差	0.40	標準偏差	0.33
最小	2.9	最小	2.3
最大	3.7	最大	3.4
標本数	3	標本数	7

010第12層・10mmハマグリ殻高度数分布表

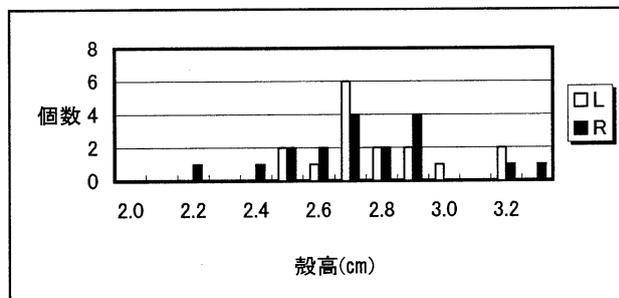
	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	合計
L												1		2	3
R	1												1		2



L		R	
平均	5.1	平均	4.5
中央値	5.2	中央値	4.5
最頻値	5.2	最頻値	*
標準偏差	0.17	標準偏差	0.85
最小	4.9	最小	3.9
最大	5.2	最大	5.1
標本数	3	標本数	2

010第12層・10mmアサリ殻高度数分布表

	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	合計
L						2	1	6	2	2	1		2		16
R			1		1	2	2	4	2	4			1	1	18

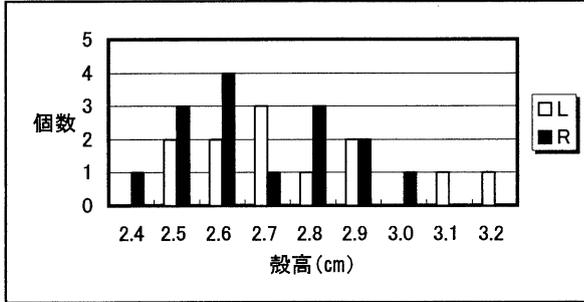


L		R	
平均	2.8	平均	2.7
中央値	2.7	中央値	2.7
最頻値	2.7	最頻値	2.7, 2.9
標準偏差	0.21	標準偏差	0.27
最小	2.5	最小	2.2
最大	3.2	最大	3.3
標本数	16	標本数	18

第4表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表 (2)

010第13層・10mmアサリ殻高度数分布表

	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	合計
L		2	2	3	1	2		1	1	12
R	1	3	4	1	3	2	1			15

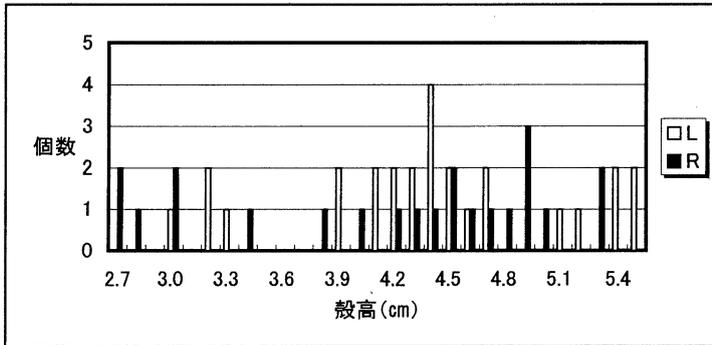


	L	R
平均	2.8	平均 2.7
中央値	2.7	中央値 2.6
最頻値	2.7	最頻値 2.6
標準偏差	0.22	標準偏差 0.18
最小	2.5	最小 2.4
最大	3.2	最大 3.0
標本数	12	標本数 15

010第14層・10mmハマグリ殻高度数分布表

	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1
L				1		2	1							2	2
R	2	1		2				1					1		1

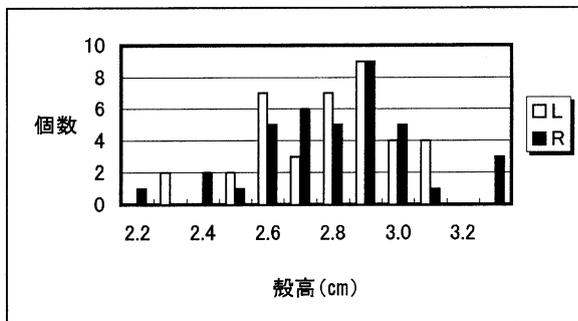
4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5	合計
2	2	4	2	1	2				1	1		2	2	27
1	1	1	2	1	1	1	3	1			2			22



	L	R
平均	4.4	平均 4.2
中央値	4.4	中央値 4.5
最頻値	4.4	最頻値 4.9
標準偏差	0.70	標準偏差 0.86
最小	3.0	最小 2.7
最大	5.5	最大 5.3
標本数	27	標本数 22

010第14層・10mmアサリ殻高度数分布表

	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	合計
L		2		2	7	3	7	9	4	4			38
R	1		2	1	5	6	5	9	5	1		3	38



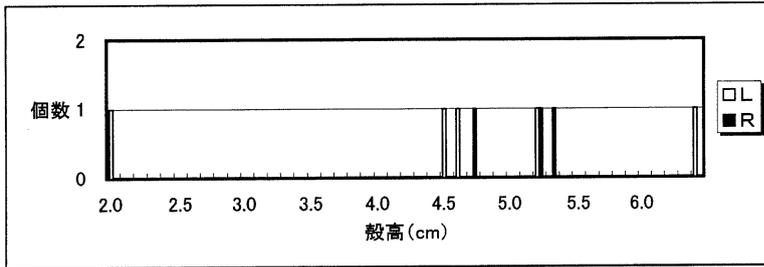
	L	R
平均	2.8	平均 2.8
中央値	2.8	中央値 2.8
最頻値	2.9	最頻値 2.9
標準偏差	0.21	標準偏差 0.24
最小	2.3	最小 2.2
最大	3.1	最大 3.3
標本数	38	標本数 38

第5表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表 (3)

011ハマグリ殻高度数分布表

	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2
L	1																						
R																							
合計	1																						

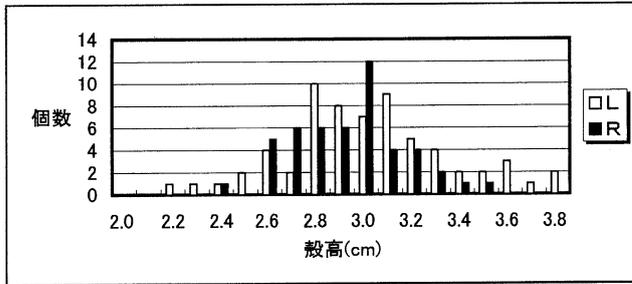
	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5	5.6	5.7	5.8	5.9	6.0	6.1	6.2	6.3	6.4	合計	
			1	1						1													1	5
					1					1	1													3
			1	1	1					2	1											1	8	



L		R	
平均	4.5	平均	5.0
中央値	4.6	中央値	5.2
最頻値	*	最頻値	*
標準偏差	1.61	標準偏差	0.32
最小	2.0	最小	4.7
最大	6.4	最大	5.3
標本数	5	標本数	3

011アサリ殻高度数分布表

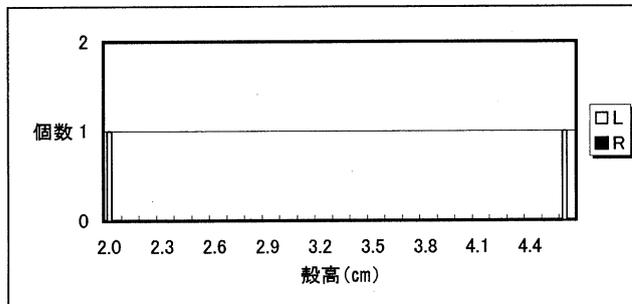
	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	合計
L			1	1	2	4	2	10	8	7	9	5	4	2	2	3	1	2		64
R				1		5	6	6	6	12	4	4	2	1	1					48
合計			1	1	2	2	9	8	16	14	19	13	9	6	3	3	3	1	2	112



L		R	
平均	3.0	平均	2.9
中央値	3.0	中央値	3.0
最頻値	2.8	最頻値	3.0
標準偏差	0.35	標準偏差	0.23
最小	2.2	最小	2.4
最大	3.8	最大	3.5
標本数	64	標本数	48

011第1層・10mmハマグリ殻高度数分布表

	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	合計	
L	1																											1	2
R																													0

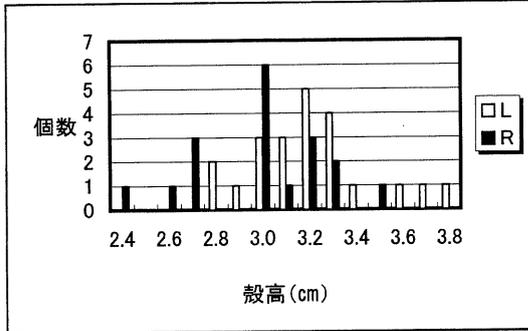


L	
平均	3.3
中央値	3.3
最頻値	*
標準偏差	1.84
最小	2.0
最大	4.6
標本数	2

第6表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表 (4)

011第1層・10mmアサリ殻高度数分布表

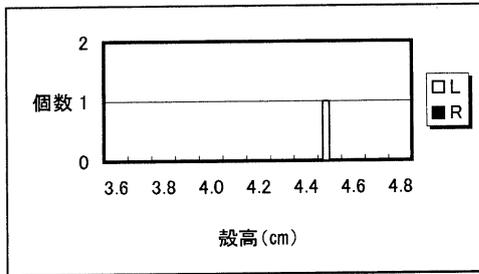
	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	合計
L					2	1	3	3	5	4	1		1	1	1	22
R	1		1	3			6	1	3	2		1				18



	L		R
平均	3.2	平均	3.0
中央値	3.2	中央値	3.0
最頻値	3.2	最頻値	3.0
標準偏差	0.26	標準偏差	0.28
最小	2.8	最小	2.4
最大	3.8	最大	3.5
標本数	22	標本数	18

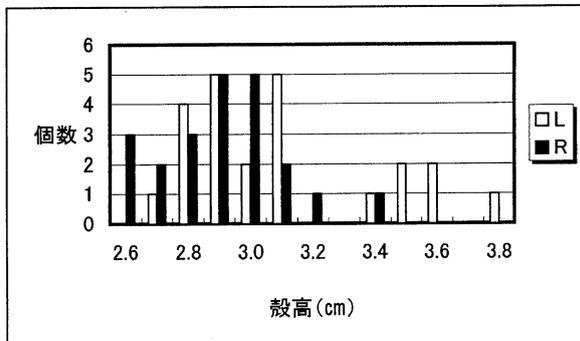
011第2層・10mmハマグリ殻高度数分布表

	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	合計
L										1				1
R														0



011第2層・10mmアサリ殻高度数分布表

	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	合計
L		1	4	5	2	5			1	2	2		1	23
R	3	2	3	5	5	2	1		1					22

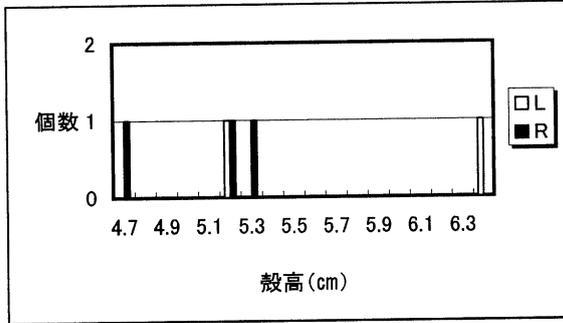


	L		R
平均	3.1	平均	2.9
中央値	3.0	中央値	2.9
最頻値	2.9, 3.1	最頻値	2.9, 3.0
標準偏差	0.31	標準偏差	0.20
最小	2.7	最小	2.6
最大	3.8	最大	3.4
標本数	23	標本数	22

第7表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表 (5)

011第12層・10mmハマグリ殻高度数分布表

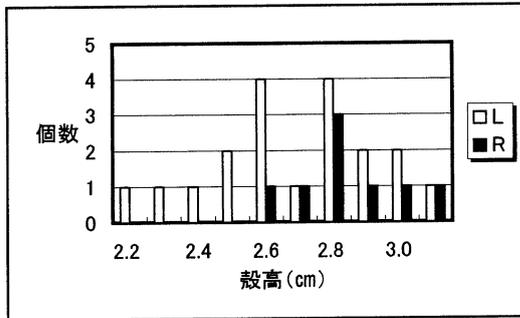
	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5	5.6	5.7	5.8	5.9	6.0	6.1	6.2	6.3	6.4	合計	
L						1													1	2
R	1					1	1													3



L		R	
平均	5.8	平均	5.1
中央値	5.8	中央値	5.2
最頻値	*	最頻値	*
標準偏差	0.85	標準偏差	0.32
最小	5.2	最小	4.7
最大	6.4	最大	5.3
標本数	2	標本数	3

011第12層・10mmアサリ殻高度数分布表

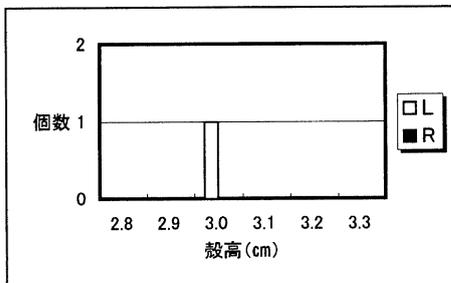
	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	合計
L	1	1	1	2	4	1	4	2	2	1		19
R					1	1	3	1	1	1		8



L		R	
平均	2.7	平均	2.8
中央値	2.7	中央値	2.8
最頻値	2.6, 2.8	最頻値	2.8
標準偏差	0.24	標準偏差	0.16
最小	2.2	最小	2.6
最大	3.1	最大	3.1
標本数	19	標本数	8

012第3層・10mmアサリ殻高度数分布表

	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	合計
L			1				1
R							0



第8表 ハマグリ・アサリ殻高度数分布表 (6)

第9表 出土遺物観察表(1)

単位はcm。()は推定口径及び器高

遺構番号	遺物番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	残存量	胎土	焼成	色調(外面) 色調(内面)	口径	器高	底径
002	1	須恵器	杯	ロクロ調整、底面外周回転ヘラケズリ	ロクロ調整	底部1/10	やや粗・銀雲母粒少量だが均等	やや不良	10YR6/3(にぶい黄橙) 10YR6/3(にぶい黄橙)			(10.8)
006	1	土師器	杯	ロクロ調整の後ヘラケズリ、底部は切り離し後、回転ヘラケズリ	ロクロ調整のあとヘラナデ	ほぼ完存	密	良	5YR6/6(橙) 5YR6/8(橙)	12.0	4.3	9.0
006	2	土師器	杯	体部ロクロ調整、下端回転ヘラケズリ	ロクロ調整	口縁-体部 3/4	細砂粒、赤褐色粒少量	良	5YR5/4(にぶい赤褐) 5YR6/6(橙)	13.0	4.4	8.5
006	3	土師器	杯	ロクロ調整、体部下端部ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り	ロクロ調整、口縁部ヨコナデ	1/3	緻密	良	7.5YR8/4(浅黄橙) 7.5YR8/3(浅黄橙)	(12.4)	(3.8)	(7.0)
006	4	土師器	杯	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	口縁-底部 1/3	やや粗・赤色粒少量	やや不良	7.5YR7/4(にぶい橙) 7.5YR6/4(にぶい橙)	(12.1)	4.3	7.3
006	5	土師器	杯	体部ロクロ調整、下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り離し	ミガキ 黒色処理	ほぼ完存	細砂粒、雲母少量	良	10YR5/3(にぶい黄褐) N2/0(黒)	13.4	3.6	7.5
006	6	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/8	密・白色粒少量	良	7.5YR6/4(にぶい橙) 7.5YR3/1(黒褐)	(13.2)	(4.3)	(7.0)
006	7	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/12	密	良	5YR6/6(橙) 5YR6/4(にぶい橙)	(13.0)	(2.4)	(10.2)
006	8	土師器	杯	ヘラケズリ	ヘラナデ	口縁1/8	やや粗・白色粒少量	不良	2.5YR5/6(明赤褐) 5YR6/8(橙)	(11.0)		
006	9	土師器	甕	ヘラケズリ	ヘラナデ	底部1/8	緻密	良	2.5YR6/8(橙) 2.5YR6/6(橙)			(10.0)
006	10	須恵器	蓋	ロクロ調整、天井部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	上半部1/6	白色粒少量	きわめて良	N6/0(灰) N7/0(灰白)			
006	11	須恵器	杯	体部ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	口縁-底部 1/4	白色粒微量	良	7.5Y6/1(灰) 7.5Y6/1(灰)	(12.3)	4.0	(7.7)
006	12	須恵器	杯	体部ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	ほぼ完存	白色粒微量	緻密	5Y6/1(灰) 5Y6/1(灰)	12.4	4.0	12.4
006	13	須恵器	杯	体部ロクロ調整、底部回転ヘラ切り	ロクロ調整	口縁-体部 2/3	赤褐色粒、白色粒微量	良	5Y6/1(灰) 5Y6/1(灰)	13.1	4.0	7.6
006	14	須恵器	杯	体部ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	1/2	黒褐色粒少量	やや不良	2.5Y6/2(灰黄) 2.5Y7/1(灰白)	(12.2)	4.0	(6.3)
006	15	須恵器	杯	体部ロクロ調整、底部手持ちヘラ切り、外周部手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	口縁-底部 1/3	小礫、粗い赤褐色粒多量	良	7.5YR5/4(にぶい褐) 7.5YR6/4(にぶい橙)	(15.0)	4.1	(10.0)

第10表 出土遺物観察表(2)

単位はcm。()は推定口径及び器高

遺構番号	遺物番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	残存量	胎土	焼成	色調(外面) 色調(内面)	口径	器高	底径
006	16	須恵器	杯	体部ロクロ調整、下端手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	完存	白色微粒多量	良	5Y4/1(灰) 5Y6/1(灰)	12.6	3.7	7.0
006	17	須恵器	杯	ロクロ調整、底部回転ヘラ切り、外周手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	底部 ほぼ完存	密・白色粒 微量	良	5Y5/1(灰) N4/0(灰)			7.2
006	18	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/12	密・白色粒 微量	やや不良	7.5Y7/1(灰白) 7.5Y7/1(灰白)	(12.0)		
006	19	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/8	密・白色粒 均等	やや不良	N4/0(灰) N3/0(暗灰)	(13.4)		
006	20	須恵器	杯	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整	ロクロ調整	底部1/4	白色粒少量	良	7.5Y6/1(灰) 7.5Y6/1(灰)			(7.0)
006	21	須恵器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部平行タタキ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口縁1/8	緻密・白色 粒均等	良	7.5R3/2(暗赤褐) 7.5R3/1(暗赤灰)	(22.0)		
006	22	須恵器	甕	胴部タタキ、下端斜位ヘラケズリ	ユビオサエ	胴部下半 -底部 1/2	細砂粒少量	良	2.5Y5/2(暗灰黄) 7.5YR5/4(にぶい褐)			(14.5)
006	23	須恵器	甕	胴部タタキ、下端ヘラケズリ	ユビオサエ、 ヘラナデ	胴部下半 -底部 1/4	白色微粒少 量	良	2.5Y4/1(黄灰) 2.5Y5/2(暗灰黄)			(15.7)
006	24	灰釉陶器	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	肩部-胴部 1/8	密・黒色白 色粒均等	良	肩部7.5Y7/2(灰白) 胴部10Y4/2(裡-7'灰)	(10.4)	(6.0)	(11.7)
007	1	陶器(瀬戸)	天目碗	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁-胴部 下半部1/12	密	良	5YR17/1(黒) 5YR17/1(黒)	11.0		
007	2	青磁	香炉	ロクロ調整、底部削りだし高台、中心部更に削りだし、青磁釉が塗られている	ロクロ調整	底部1/5	緻密	良	10GY7/1(明緑灰) 5Y7/1(灰白)	(11.0)	(2.3)	(7.6)
010	1	カワラケ	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	底部-口縁 1/8	きわめて密	良	5YR6/8(橙) 5YR7/6(橙)	(7.0)	(1.4)	(5.0)
010	2	土師器	高台付皿	ロクロ調整	ロクロ調整	底部ほぼ 全周完存	密	やや良	7.5YR7/4(にぶい橙) 7.5YR7/6(橙)			4.6
010	3	土師器	杯	ロクロ目はつきりせず、底部糸切り痕が若干観察	ロクロ調整 痕わずかに 観察	底部ほぼ 全周完存	密	良	7.5YR8/4(浅黄橙) 7.5YR8/6(浅黄橙)			4.9
010	4	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	底部1/8	やや粗	やや不良	5YR7/4(にぶい橙) 5YR6/4(にぶい橙)			(8.0)
010	5	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/12	やや粗・黒 色、白色粒 均等	良	N8/0(灰白) N7/0(灰白)	(12.4)		

第11表 出土遺物観察表(3)

単位はcm。()は推定口径及び器高

遺構番号	遺物番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	残存量	胎土	焼成	色調(外面) 色調(内面)	口径	器高	底径
010	6	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁-体部 1/12	密・白色細 粒微量	良	N7/0(灰白) N6/0(灰)	(14.2)		
010	7	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	底部1/6	密・白色細 粒均等	良	N4/0(灰) N4/0(灰)			(8.0)
010	8	灰釉陶器	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁小片	密・白色粒 少量	良	10Y4/2(オリーブ灰) 10Y6/2(オリーブ灰)			
010	9	陶器	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	頸部のみ 1/3	きわめて緻 密・断面赤 紫色を呈す	良	5Y2/1(黒) N5/0(灰)			
011	1	青磁	碗	ロクロ調整	ロクロ調整	底部-胴部 下半1/6	密・黒色粒 微量	良	10GY7/1(明緑灰) 7.5GY7/1(明緑灰)	(13.0)	(3.6)	(6.4)
012	1	須恵器	碗	ロクロ調整	ロクロ調整	底部1/12	密・白色粒 少量	良	N7/0(灰白) 7.5Y6/1(灰)			
013	1	土師器	甕	ヘラケズリ、一部ヘラナデ	強いナデ	底部1/8	密・白色粒 微量	やや良	7.5YR6/4(にぶい橙) 7.5YR4/1(褐灰)			
013	2	須恵器	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁小片	密・白色粒 微量	良	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)			
014	1	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/8	きわめて 密・黒色粒 微量	良	7.5YR7/6(橙) 7.5RY6/6(橙)	(14.0)		
014	2	土師器	杯	体部下端ヘラケズリ、底部 不定方向ヘラケズリ	ミガキ	底部2/3	細砂粒、雲 母少量	やや不良	10YR7/4(にぶい黄 橙) 5Y2/1(黒)			8.0
014	3	土師器	杯	ヘラケズリ	斜方向ヘラ ナデ	底部1/8	密・雲母片 微量	やや良	5YR6/8(橙) 7.5YR7/6(橙)			(7.0)
014	4	土師器	甕	胴部横位ヘラケズリ、底部 一定方向ヘラケズリ	横位ヘラナ デ	底部-体部 下半のみ残	細砂粒、小 礫少量	良	5YR4/6(赤褐) 5YR5/6(明赤褐)			3.9
014	5	土師器	台付甕	胴部下端縦位ヘラケズリ、 脚台接合部ヨコナデ	ナデ	胴部下端- 脚基部のみ 残	細砂粒多量	良	7.5YR4/2(灰褐) 2.5YR6/6(橙)			
014	6	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部上半 縦位、下半斜位ヘラケズリ、 底部ヘラケズリ	ヘラナデ	口縁-胴部 1/4欠、他 は完存	細砂粒多量	良	7.5YR5/3(にぶい褐) 7.5YR6/3(にぶい褐)	11.1	10.2	5.5
014	7	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁-体部 1/8	密・白色粒 微量	良	7.5Y7/1(灰白) 7.5Y6/1(灰)	(11.0)		
014	8	須恵器	甕	口縁部ロクロ調整、胴部縦 位のタタキ	胴部ユビオ サエの後、 一部ミガキ 状のナデ	口縁-体部 1/3	密・白色粒 少量	良	7.5YR4/2(灰褐) 5YR4/2(灰褐)	(18.8)	(9.4)	(21.8)

第12表 出土遺物観察表(4)

単位はcm。()は推定口径及び器高

遺構番号	遺物番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	残存量	胎土	焼成	色調(外面) 色調(内面)	口径	器高	底径
014	9	須恵器	甕	胴部縦位クタクキ	ユビオサエ	頸部1/4	白色粒多量	良	2.5Y4/1(黄灰) 2.5Y4/1(黄灰)			
015	1	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁-体部 1/4	白色粒微量	緻密	5Y6/1(灰) 5Y5/1(灰)	12.7		
015	2	須恵器	杯	体部ロクロ調整、底部回転 糸切り離し	ロクロ調整	底部-体部 下半のみ残	白色粒少量	緻密	5Y6/1(灰色) 5Y6/1(灰色)			5.8
015	3	須恵器	甕	胴部下端横位ヘラケズリ、 底部ヘラケズリ	横位ヘラナ デ	底部1/4	白色小礫、 銀雲母粒多量	良	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)			16.4
015	4	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部縦位 ヘラケズリ	ヨコナデ	口縁小片	赤褐色粒、 細砂粒多量	良	5YR5/6(明赤褐) 2.5YR5/8(明赤褐)			
016	1	弥生土器	壺	口縁部RLの斜縄文を施した 後、下端部に刻み入る また中央に2個の刺突を有 する円形浮文張り付ける	ヘラナデ、 赤彩	口縁-頸部 1/8	やや粗	良	7.5YR7/3(にぶい橙) 5YR7/4(にぶい橙)	(29.0)	(7.0)	(21.4)
016	2	土師器	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	底部1/4	粗・白色粒 黒色粒、石 英粒均等	やや不良	5YR7/6(橙) 5YR4/1(褐灰)			(8.0)
016	3	土師器	甕	底部外周部一部ヘラケズリ	ヘラナデ	1/8	やや粗	良	5YR6/4(にぶい橙) 5YR6/6(橙)			(6.0)
016	4	土師器	甕	一部ヘラケズリ痕跡残る	ヘラナデ	底部1/10	やや粗・白 色粒	やや不良	5YR7/6(橙) 5YR7/4(橙)			(7.0)
016	5	カワラケ	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁-底部 1/10	きわめて緻 密	良	7.5YR7/4(にぶい橙) 7.5YR7/6(橙)	(6.4)		
018	1	須恵器	蓋	ロクロ調整	ロクロ調整	つまみ部周 辺2/3	密・白色粒 少量	良	10Y6/1(灰) 10Y7/1(灰白)	(3.2)		(4.6)
018	2	土師器	杯	底部外周回転ヘラケズリ、 底部ヘラケズリ	ロクロ調整 の後ヘラナ デ	体部下半- 底部3/4	きわめて緻 密・白色粒 微量	良	7.5YR7/4(にぶい橙) 7.5YR7/4(にぶい橙)			6.5
018	3	土師器	甕	ヘラケズリ	ヘラナデ	底部1/10	粗・白色粒 均等	やや良	5YR2/1(黒褐) 2.5YR3/4(暗赤褐)			(9.0)
018	4	内耳土器		ロクロ調整のちナデ	ロクロ調整	口縁小片	やや粗・白 色粒、雲母 粒少量	良	7.5YR3/1(黒褐) 7.5YR6/4(にぶい橙)			
026	1	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁1/6	密・黒色粒 少量	良	5YR7/8(橙) 5YR7/6(橙)	(11.6)		
026	2	土師器	甕	口縁部ヨコナデ	ヘラナデの ち口縁部ヨ コナデ	口縁小片	やや粗・白 色粒少量	やや良	2.5YR6/4(にぶい橙) 2.5YR6/5(にぶい橙)	(18.8)		

第13表 出土遺物観察表(5)

単位はcm。()は推定口径及び器高

遺構番号	遺物番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	残存量	胎土	焼成	色調(外面) 色調(内面)	口径	器高	底径
026	3	須恵器	杯	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整	ロクロ調整	底部1/4	やや粗・白色粒微量	不良	10YR7/1(灰白) 10YR6/1(褐灰)			(7.4)
029	1	須恵器	杯	ロクロ調整、底部立ち上がりヘラ痕跡?	ロクロ調整	1/10	密・白色粒微量	良	7.5Y7/1(灰白) 7.5Y7/1(灰白)			(6.1)
034	1	土師器	杯	底部立ち上がり付近一部ヘラケズリ	ヘラナデ	1/8	密	良	5YR4/6(赤褐) 5YR4/8(赤褐)			(6.0)
034	2	土師器	甕	横方向ヘラケズリ	斜方向ヘラケズリ	底部1/12	やや粗・黒色、白色粒均等	良	5YR7/6(橙) 5YR6/6(橙)			(6.4)
034	3	陶器(瀬戸)	鉢	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁小片	密・白色粒微量	良	7.5YR3/4(暗褐) 7.5YR3/4(暗褐)			
1次遺構外	1	土師器	杯	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、口縁付近輪積み痕あり	口縁部強いヘラナデ 体部ヘラナデ	口縁-下半 2/3	やや粗・白色粒、黒色粒少量	やや不良	5YR7/8(橙) 5YR7/6(橙)	12.4		
1次遺構外	2	土師器	杯	ロクロ調整、火熱多く受ける	ロクロ調整	1/8	密	良	2.5YR6/6(橙) 2.5YR7/6(橙)	(12.2)		
1次遺構外	3	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁のみ 1/10	密	良	2.5Y4/1(黄灰) 2.5Y4/2(暗灰黄)	(13.0)		
1次遺構外	4	土師器	台付甕	ヘラケズリ、脚台部内側は粗いヘラケズリ	ミガキのようなヘラナデ	底部-脚台部上端のみ	やや粗	良	2.5YR6/4(にぶい橙) 10YR3/1(黒褐)	(10.8)	(3.4)	(5.2)
1次遺構外	5	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整、ナデ	底部1/3	密	やや不良	7.5Y7/8(黄橙) 7.5Y7/6(橙)			6.2
1次遺構外	6	カワラケ	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁-底部外周部1/6	やや粗い・赤色粒少量	やや不良	5YR7/8(橙) 5YR6/8(橙)	(7.8)	(1.8)	(5.0)
1次遺構外	7	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	口縁-頭部 1/12	粗	不良	5YR7/6(橙) 5YR7/4(にぶい橙)	(25.0)		
1次遺構外	8	土師器	甕	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	口縁小片	やや粗	良	2.5YR5/9(にぶい赤褐) 2.5YR6/4(にぶい橙)			
1次遺構外	9	土師器	小型甕	胴部(上→下)のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	頭部-胴部 上半1/8	粗	不良	7.5YR8/4(浅黄橙) 7.5YR8/2(浅黄橙)			
1次遺構外	10	土師器	甕	ヘラケズリ	ヘラナデ	底部1/6	粗・白色粒 黒色粒均等	良	5YR4/6(赤褐) 5YR6/6(橙)			
1次遺構外	11	灰釉陶器	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	1/12	密	良	5Y7/1(灰白) 5Y8/2(灰白)	(11.2)		
3次遺構外	1	須恵器	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁小片	密・白色粒少量	やや不良	2.5Y4/1(黄灰) 2.5Y4/1(黄灰)			

第3章 まとめ

以上のように、本遺跡においては主に奈良・平安時代、8世紀第Ⅳ四半期から9世紀前半にかけての掘立柱建物跡や石帯を含む土器棄て場と考えられる土坑及び多数の溝状遺構が検出され、また中世までさかのぼると考えられる道路状遺構や貝が投棄された地下式壙、そして周囲に新寛永を出土した土坑がある近世と考えられる掘立柱建物跡等が検出された。

村上川掘遺跡（第1次～3次）は、養老川右岸を臨む標高8～9m前後の自然堤防上に位置し、この付近一帯はほぼ南北に縦断する養老川の存在や、沖積平野として広大な平坦面を有することなどから先学諸氏によって奈良・平安時代の国府所在地の可能性が指摘されてきた。これまでの国府推定地に関する研究の流れをまとめておくと、律令制下では、市原市北部は上総国市原郡に属し、『和名類聚抄』によると市原郡には海部・市原・江田・湿津・山田・菊麻の6郷が置かれていたとされている。市原郡の範囲については必ずしも詳らかではないが、ここでは先学諸氏の指摘に則って村田川、養老川、及び東京湾に挟まれた地域としておこう。『和名抄』・『拾芥抄』等の「国府在市原」の記載から市原郡に国府が存在したことは明らかであり、この前提に立って現段階で有力な国府所在地として推定されている説が惣社・村上・市原・能満の4説である。惣社説は、「惣社」という地名および周辺の道路を含んだ地形図から推定したものであったが、国分寺台の大規模な発掘調査の結果その論拠を失った。能満説は、大森金五郎によって「市原村郡本八幡神社本地佛銅盤」の内容として紹介された胎蔵界大日如来像の懸仏に残る、「守公神御正体 所者上総國府中國庁」（表面銘文）及び「金資弘覚大勸進沙門 應応九年六月一日」（裏面銘文）の記載から府中日吉神社の存在する能満が中世における国府存在の有力地となっているが（立石 1989）、その後、石井 進が藤井に現存する小字「在庁面」に注目し、上記の銘文と合わせ南北朝・室町期における国府の中心部を藤井近辺とする見解を示すなど、諸説があり、まだ統一の見解を出すには至っていない。以上から、奈良・平安時代の国府推定地は市原説と村上説に絞られるが、村上説は、須田 勉、石井則孝により提唱されたもので、国府が立地する一般条件として養老川東岸の沖積平野では、方八（六）町四方の広大な平坦地が確保できることと、物資の大量輸送に有利な大規模河川が利用可能な低地であること、また、駅家と駅路が付近を通過することなどから選定され、須田 勉が字名と旧地形から方八町の線引きをしている。具体的には「大門」・「大門前」の字名が国府の「南大門」にあたるとするのが論拠であるが、それより北にも現在の観音寺に関連する一連の「門前」「寺中」「寺脇」の字名があり、字名を国府所在の有力な要素とするには限界がある。また、須田説の府域を北へ約四町移動した府域を設定した石井則孝の説は、国分寺・総社・旧道との位置関係から主張しているが、高橋康男が指摘しているように、現国分寺の南側から、惣社戸隠神社の北側を通過して村上地区へと通じるいわゆる「天平道路」を須田のいう国府の中軸線、石井のいう南限の軸線とした場合、この道がかつての国分寺の東門から西門へとつながっている必要があるが、平成元年度および2年度におこなわれた寺域西辺地区の調査において、西門の位置がその想定よりも北方で確認され、さらにその西門の南には板塀が設けられていたことが判明した。したがって問題の「道」が成立するのは、板塀の消滅あるいは倒壊以後とせざるを得ないとすると、この2説の国府域論はその根拠の多くを失うことになる。また、田所 真は初期の国府が律令体制の維持を重視したため、方八町四方の国府域の確保を優先したことから村上地区に占地し、その後養老

川の氾濫等による諸条件から台地上の市原地区への移転を示唆したが、市原地区周辺において「古甲」（古国府）の字名が残っており、中世国府に対する古国府の可能性は考えられるが、上記のことを鑑みても村上地区に国府が存在していたとする積極的な可能性は見当たらないのが現状である。また、村上川堀遺跡周辺の字「大馬田」の北西側隣接地に「十二（ヶ）所」という字名があり、上総国惣社の可能性を示唆している（吉田敏宏 1999）が、周囲は観音寺および中世村上城に関する地名、及び地割りが多くを占めていると考えられ、一つの字名だけで判断することは危険であろう。ただ、村上川堀遺跡にも言えることだが、布目瓦の散布が周辺の遺跡をふくめてある程度検出されており、「国府域」そのものの可能性はなくとも、東京湾河口に近い養老川の下流域という立地条件を考慮すると村上遺跡周辺を大きく「津」及び物資の中継地としての人・建物の集まり的な地域と捉えようとするところもできるであろう。ここで指摘しておきたい遺跡が、平成2年度に（財）千葉県文化財センターが調査を実施した村上遺跡（後口・白幡前地区）の存在である。この遺跡は東関東自動車道建設に伴い調査が行われ、厳密には村上遺跡に隣接する部分を対象に調査が行われている。この遺跡において、養老川旧河道に面して数棟の掘立柱建物跡が検出されており、竪穴式住居の検出はなかったことから遺跡の性格そのものは一般の集落とは異なる様相（津）が想定されている遺跡である。後口・白幡前地区では、掘立柱建物跡のほか浅い土坑、井戸、溝等が検出されている。これらのうち後口地区では、浅い土坑としたものは、建物を切って掘られていたり、いくつかの重複が見られいずれも不規則な楕円形を呈しているが、ここから8世紀中葉を中心とした遺物が多数検出されている。また、白幡前地区においては、掘立柱建物跡からの出土は全体に少ないもののSB-1を巡る溝状遺構内から土器類がまとめて出土している。土器様相の年代は8世紀第1四半期頃と推定でき、この地区の建物群の年代も同時期まで遡らせることができると報告している。また、後口地区の掘立柱建物群の年代観は、8世紀後半～9世紀代とされている。村上川堀遺跡002号遺構（掘立柱建物跡）隅柱掘り方内から8世紀中葉と考えられる銀雲母粒を含む新治産の須恵器杯身が出土しており、遺跡間の距離は大きく離れているものの養老川を西に接し、東の背後の台地上に国分僧・尼寺をかかえる立地は共通しており、周囲の調査が進めば村上遺跡（後口・白幡前地区）及び村上川堀遺跡の特徴を検証することが可能かもしれない。

（参考文献）

- 石井則孝 「上総国の国府について（予察）」『史館』7 市川ジャーナル 1976
- 須田 勉 「上総国府の諸問題（1）—特にその所在をめぐって」『古代』61号 早稲田大学考古学会 1976
- 木村泰治 「第八章 市原市の地形と地質」『市原市史（別巻）』 市原市教育委員会 1979
- 樋口義幸 「第九章 第五節 養老川下流地域」『市原市史（別巻）』 市原市教育委員会 1979
- 郷堀英司他 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』 千葉県教育委員会 1984
- 山口直樹 「村上城跡（上総国府推定地）」『市原市文化財センター年報—昭和59年度』（財）市原市文化財センター 1987
- 山口直樹・田所 真 『村上城跡』 （財）市原市文化財センター 1986

- 櫻井敦史 「19 分目要害遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』 千葉県 1998
- 櫻井敦史 「分目要害遺跡」『市原市文化財センター年報—平成5年度』 (財)市原市文化財センター 1993
- 半田堅三 「13 台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』 千葉県 1998
- 浅利幸一 「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報—昭和63年度』 (財)市原市文化財センター 1988
- 今泉 潔・山口典子 『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター 1989
- 立石泰三 『上総と国府』 崙書房ふるさと文庫 1989
- 笹生 衛 「市原市村上遺跡(村上遺跡群)」『千葉県文化財センター年報No.16 平成2年度』 1991
- 高橋康男 『市原市 上総国府推定地確認調査報告書(1)』 市原市教育委員会 1994
- 宮本敬一 「上総国分尼寺の成立—尼寺の造営過程を中心に—」 『東海道の国分寺—その成立と変遷』 第8回企画展図録 1994
- 小久貫隆史・渡邊高弘 「市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡」『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書』 (財)千葉県文化財センター 1997
- 田所 真 「上総国」『シンポジウム東国の国府 in WAYO—考古学からみた東国国府の成立と変遷—』 1998
- 吉田敏宏 「上総国府・府中比定地周辺の地割と地名」 『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』 市原市教育委員会 1999
- 宮本敬一 『市原の遺跡(1) 史跡上総国分寺跡—国分僧尼寺とその時代』 市原市教育委員会 1999

付 編

村上川堀遺跡自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

村上川堀遺跡は、養老川右岸の沖積低地に立地する。今回の調査区は微高地上であり、平安時代の溝、掘立柱建物跡、土器捨て場（8～9世紀）や中・近世の井戸跡、近世の掘立柱建物跡・小溝が確認されている。今回の自然科学分析調査は、発掘調査所見時の課題を含めて次のような目的を設定した。

- 中～近世の古植生を明らかにする

当社では、これまでに浅井小向後谷遺跡や分目要害遺跡など、養老川流域の縄文時代末以降の古植生変遷について調査してきた。今回は、中・近世の遺構埋積物を対象として花粉分析を行い、古植生に関する情報蓄積を目的とする。

- 遺構の埋積過程

中・近世の井戸と溝について珪藻分析を行い、遺構の埋積過程を検討する。

- 近世の畑作に関する資料を得る

畑は好氣的な環境下で行われる場合が多く、この様な条件では、有機物が分解されやすく、耕作されていた植物の痕跡が得られる場合は限られている。そこで、今回は好氣的状況下での分解に比較的強い植物珪酸体に着目し、イネ科植物に限定されるが、当時の栽培植物に関する情報を得る。

1. 試料

今回対象とする遺構は、中・近世の井戸跡（007号）、溝（016号）、畑と思われる小溝（SPS-S'）である。これらの遺構から、目的を考慮して試料を選択し、花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析を行う。016号は埋土の上部（試料番号2）と底部（試料番号3）を対象として、花粉分析、珪藻分析を実施する。007号は底部の試料（試料番号1）を対象に珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。SPS-S'は、畑の耕作土と推定される4層、5層から平面的に土壌を採取し、花粉分析では試料番号2、植物珪酸体分析では試料番号1、2、4、6、8、9、10について分析を実施する。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約5g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない資料はこの限りではない）。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot（1986・1988・1991a・1991b）、K.Krammer（1992）などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に

対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、主要な分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水～淡水生種の比率と各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数とした相対頻度で算出する。

(2) 花粉分析

試料約10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛：比重2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類 (Taxa) について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

試料約 5 g について、過酸化水素水 (H_2O_2) と塩酸 (HCl) による有機物と鉄分の除去、超音波処理 (80W, 250KHz, 1 分間) による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム (比重2.5) による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部 (葉身と葉鞘) の短細胞に由来する植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬 (1986) の分類を参考にした。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

表 1 珪藻の生態性

塩分濃度に対する区分	塩分濃度に対する適応性	生育環境 (例)
海水生種： 強塩生種 (Polyhalobous) 真塩生種 (Euhalobous)	塩分濃度40.0 μ M以上に出現するもの 海産性種、塩分濃度40.0 μ M \sim 30.0 μ Mに出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖など 一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種： 中塩生種 (Mesohalobous)	塩分濃度30.0 μ M \sim 0.5 μ Mに出現するもの 強中塩生種 (α -Mesohalobous) 弱中塩生種 (β -Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種：貧塩生種 (Oligohalobous)	塩分濃度0.5 μ M以下に出現するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池・沼・河川・沼沢地・泉)
塩分・pH・流水に対する区分	塩分・pH・流水に対する適応性	
貧塩-好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの	高塩領域 (塩水湖上域・温泉・耕作土壌)
貧塩-不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般陸水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)
貧塩-嫌塩性種 (Halophobic)	少量の塩分にも耐えることができないもの	湿原・湿地・沼沢地
広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの	一般淡水 \sim 汽水水域
真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・火口湖 (酸性水域)
好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・沼沢地
pH-不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池沼・河川)
好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの	
真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの	アルカリ性水域
真止水性種 (Limnobiontic)	止水域にのみ出現するもの	流水の少ない湖沼・池沼
好止水性種 (Limnophilous)	止水域に特微的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
流水不定性種 (Indifferent)	止水域にも流水域にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
好流水性種 (Rheophilous)	流水域に特微的であるが、止水域にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerial habitats) 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で 多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中のコケの表面に生育可能 特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という	<ul style="list-style-type: none"> 土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 木の根元や幹に生えたコケに付着 濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 滝の飛沫で濡ったコケや石垣・岩上のコケに付着 洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着

註 塩分に対する区分はLowe (1974)、pHと流水に対する区分はHustedt (1937-38) による。

3. 結 果

(1) 珪藻分析

結果を表2、図1に示す。珪藻分析を行った3試料からは、比較的多くの珪藻化石が産出した。産出した珪藻化石は、淡水生種を主として海水生種あるいは汽水生種を含む種群で構成され、35層・104種が確認された。

● 016号 試料番号2

本試料から産出した珪藻化石は、2個体の海水生種以外はすべて淡水生種で構成される群集が認められた。

淡水生種の生態性（塩分・pH・流水に対する適応性）にみる特徴は、以下のような傾向が認められる。

まず、塩分に対する適応性は、淡水中に含まれる塩類濃度の高低による棲み分けについて3段階（濃度が高い：好塩性、低い：嫌塩性、いずれにも生育する：不定性）に区分したものである。本試料の傾向は、好塩性種および嫌塩性種はいずれも10%以下であり、80%以上を貧塩-不定性種が占めている。

pHに対する適応性は、生育する水域の水のpHが酸性に傾いている水域に生育する種を好酸性種、逆にアルカリ性の水域に生育するものを好アルカリ性種、いずれにも生育する種を不定性種として区分したものである。傾向は、好アルカリ性種が優勢であり、全体の55%程度を占めており、次いでpH不定性種が約30%の産出率を示す。好酸性種は12%と低率にしか認められない。

流水に対する適応性は、常に水の流れがある水域に生育する種群を好流水性種、流れのない水域に生育する種を好止水性種、いずれにも生育する可能性のある種を流水不定性種として区分したものである。本試料では、流水不定性種が極めて多く、全体の77%を占めており、その他は好止水性種が17%、好流水性種が3%程度である。

一方、水生珪藻と陸生珪藻の比率は、水生珪藻が約60%に対して、陸生珪藻が40%であり、やや水生珪藻が優勢である。

なお、産出した分類群の総数は、42分類群と著しく多く、生態性が相反する種群がそれぞれ産出しており、ばらついた傾向が認められる。

優占種は、流水不定性種の *Rhopalodia gibberula*、好止水性種の *Neidium ampliatum*、*Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* 等である。

● 016号 試料番号3

珪藻の3適応性による群集の特徴は、まず、塩分に対しては、貧塩-不定性種が約80%を占め、好塩性種および嫌塩性種はいずれも10%以下と低率である。pHに対する適応性では、好アルカリ性種が優占し、全体の67%を占めるほか、pH不定性種が20%であり、この2つの種群が大半を占めている。好酸性種は10%以下と極めて低率である。流水に対する適応性は、流水不定性種が68%と優勢であるが、好流水性種も23%程度産出している。好止水性種は約5%であり、低率にしか認められない。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、水生珪藻が65%、陸生珪藻が35%である。なお、本試料も産出した分類群の数が多く、また、生態性が大きくばらつく傾向が認められる。

多産種は、好流水性種の *Achnanthes lanceolata*、*Rhoicosphenia abbreviata*、陸生珪藻の

表2 珪藻分析結果 (1)

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	016 2	016 3	007 1
	塩分	pH	流水				
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				-	-	2
Azpeitia nodulifera (A.Schmidt)Fryxell et Sims	Euh				-	-	1
Chaetoceros spp.	Euh				-	2	-
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh				-	1	-
Denticulopsis hyalina (Schrader)Simonsen	Euh				-	1	-
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	2	1
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A, B	2	1	1
Cyclotella striata (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh			B	-	1	-
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E1	-	-	1
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-hil	al-bi	l-ph	T	1	-	1
Achnanthes japonica H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J, T	-	1	-
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	11	1
Achnanthes tropica Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	4	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-
Amphora inariensis Krammer	Ogh-unk	unk	unk		-	5	3
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	3	-
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.)V. Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	U	6	-	2
Amphora pediculus (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	5	3
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M, U	-	-	1
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	3	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-	-
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-
Cocconeis pediculus Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	1	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	6	-
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	4	-
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	5	1
Cymbella cf. aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O, T	-	2	-
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-
Cymbella leptoceros (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	1	1
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	3	4	4
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	1	1
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	1	5	5
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2
Denticula elegans Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	2
Diatomella balfouriana (W.Smith)Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-
Diploneis oblongella (Naegeli)Cleve-Euler	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	-	-
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		3	1	2
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	1
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	1
Epithemia sores Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	1	-
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		3	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	3	2	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	-	1	-
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	2	-	-
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	1	-
Fragilaria intermdia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-

表2 珪藻分析結果 (2)

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	016 2	016 3	007 1
	塩分	pH	流水				
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	-	1	1
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	1
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		-	6	10
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	6	2	1
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.)Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K, T	-	1	-
Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	2	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	3	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	8	2
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	2	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	26	10	5
Hantzschia amphioxys var. capitata O. Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	2	2	-
Hantzschia amphioxys var. vivax (Hantz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-
Hantzschia distincte-punctata Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-bi		-	1	-
Meridion circularae var. constrictum (Ralfs)V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T	-	1	-
Navicula capitata Ehrenberg	Ogh-hil	al-il	r-ph	U	-	-	2
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	-	1	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	-	21	1
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	1	3	5
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	2	-
Navicula minima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	10	21	21
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	1
Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	S	-	4	1
Navicula tokyoensis H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	1	-
Navicula sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	2	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		7	1	1
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1	7	6
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	RB, U	3	1	-
Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow	Ogh-hil	al-bi	ind		-	1	-
Nitzschia palustris Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		-	1	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-
Orthoseira roeseana (Rabh.)O' Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	-	-
Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		1	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	5	1	-
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	S	2	1	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	-	4
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	4	3	1
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	2	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	-
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-Bertalot	Ogh-hil	al-il	r-ph	K, T	2	11	4
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O. Muller	Ogh-hil	al-il	ind		12	-	3
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	1	-
Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	6	-	-

表2 珪藻分析結果 (3)

種 類	生 態 性			環境 指標種	016 2	016 3	007 1
	塩分	pH	流水				
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	1
Surirella ovata var. pinnata (W. Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	1
Synedra ulna (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3	2
海水生種合計					2	7	5
海水-汽水生種合計					0	1	0
汽水生種合計					0	0	1
淡水生種合計					141	210	107
珪藻化石総数					143	218	113

凡例

H. R. :塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	C. R. :流水に対する適応性
Euh :海水生種	al-bi:真アルカリ性種	l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種	al-il:好アルカリ性種	l-ph:好止水性種
Meh :汽水生種	ind :pH不定性種	ind :流水不定性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	ac-bi:真酸性種	r-bi:真流水性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種	unk :pH不明種	unk :流水不明種
Ogh-unk:貧塩不明種		

環境指標種

A:外洋指標種 B:内湾指標種 E1:海水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
 J:上流性河川指標種 K:中~下流性河川指標種 M:湖沼浮遊性種
 O:沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)
 RI:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群、伊藤・堀内, 1991)

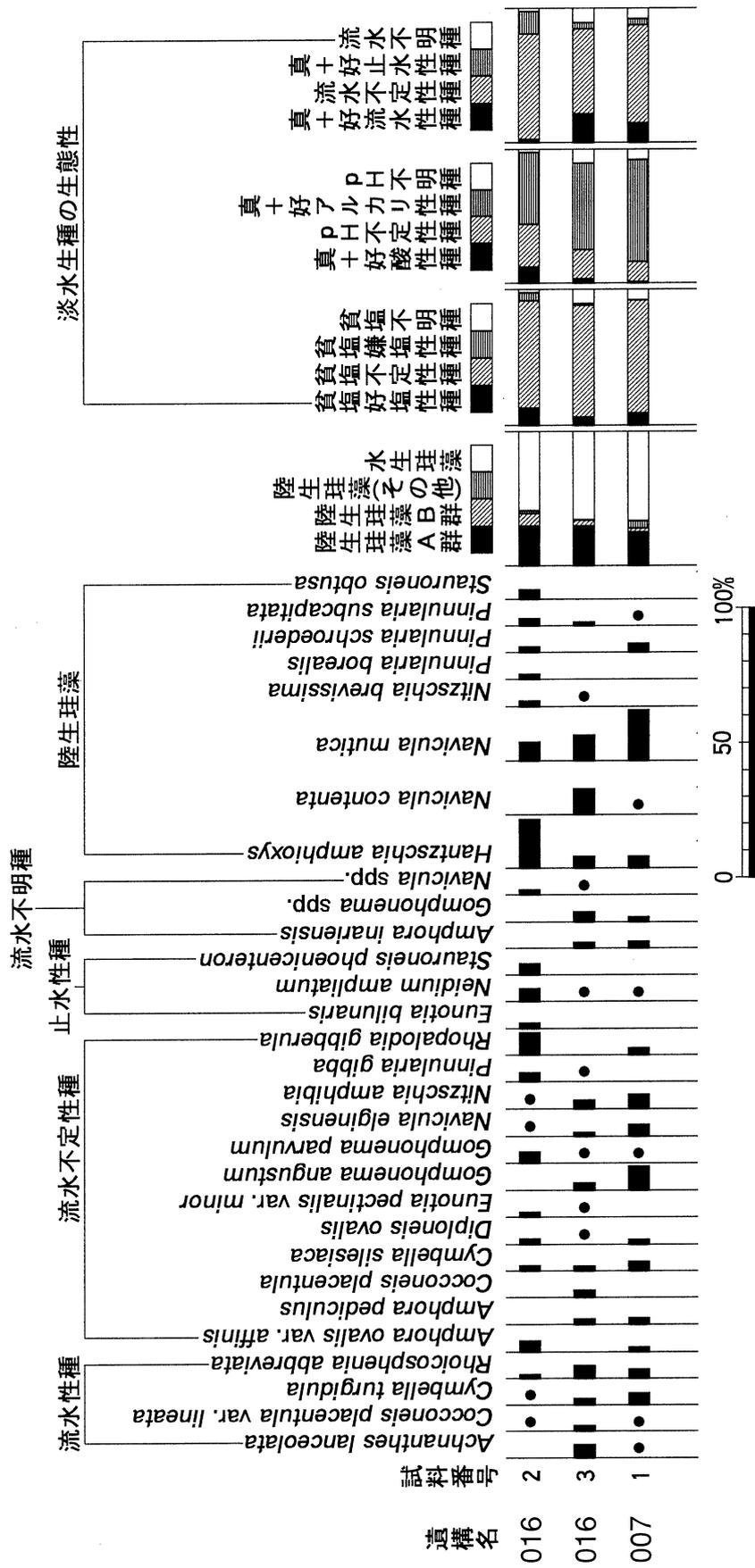


図1 主要珪藻化石組成

淡水生種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として相対頻度で表した。いずれも化石総数が100個体以上検出された試料について示す。なお、●は産出率1%未満の種類を示す。

Hantzschia amphioxys, *Navicula conlenta*, *Navicula mutica* 等である。

007号試料番号 1

本試料から産出した珪藻化石群集の特徴は、塩分濃度については、貧塩 - 不定性種が全体の80%以上を占めており、好塩性種および嫌塩性種はそれぞれ10%および1%と低率な傾向にある。pHに対する適応性は、好アルカリ性種が優占し、全体の77%を占めている。次いでpH不定性種が約25%の産出率を示すが、好酸性種は2%と極めて低率にしか認められない。さらに流水に対する適応性は、流水不定性種が72%を占めているが、好流水性種も約15%、好止水性種が5%の産出率を示している。一方、水生珪藻と陸生珪藻の比率は、水生珪藻が67%、陸生珪藻が33%である。なお、本試料においても、産出種類が多く、生態性もばらつきが大きい傾向が認められる。

多産あるいは優占した種は、好流水性種の *Cymbella turgidula*, *Rhoicosphenia abbreviata*, 流水不定性種の *Gomphonema angustum*, *Nitzschia amphibia*, 陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* 等である。

(2) 花粉分析

結果を表3・図2に示す。分析の結果、016号試料番号3以外は花粉化石の保存が悪く、ほとんど検出されなかった。016号試料番号3の花粉化石組成は、木本花粉ではニレ属 - ケヤキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、クマシデ亜属 - アサダ亜属が検出される。草本花粉・シダ類孢子ではイネ科が多く、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生植物もみられる。

(3) 植物珪酸体

結果を表4、図3に示す。

● 007号

植物珪酸体の保存状態は悪く、植物珪酸体の表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。検出される種類の中ではタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

SPS-S' 断面

各試料から植物珪酸体が検出されるものの、保存状態は悪く、植物珪酸体の表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

7点の試料は、タケ亜科の優占する植物珪酸体組成がみられる点で共通する。しかし、イネ属の出現率が試料採取位置によって異なる。試料番号1～8では出現率が低いのにに対して、試料番号9・10では出現率が高い。イネ属には短細胞列や稲糊に形成されるイネ属穎珪酸体も認められる。また、キビ族（キビ・ヒエなど）、オオムギ族（オオムギやコムギなどのムギ類）が含まれる。しかし、保存状態が悪く、植物珪酸体の形態から栽培種か否かは分からない。この他、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などを伴う。

4. 中・近世の古植生

分析の結果、花粉化石が検出されたのは016号底部のみであり、他の試料からは検出されなかった。他の2試料からは陸生珪藻が多産することや、遺跡が微高地上に立地することから、好気的環境下による花粉化石の分解が考えられる。

古代～中・近世の古植生は、分目要害遺跡や浅井小向後谷遺跡で、連続試料による変遷がとらえら

表3 花粉分析結果

種 類	遺構名 試料番号	016 3	007 1	SPS - S' 2
木本花粉				
モミ属		13	-	-
ツガ属		16	-	-
トウヒ属		1	-	-
マツ属		7	-	1
スギ属		15	-	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1	-	-
ヤマモモ属		3	-	-
クルミ属		2	-	-
クマシデ属-アサダ属		21	-	-
ハンノキ属		5	-	-
ブナ属		3	-	-
コナラ属コナラ亜属		28	-	-
コナラ属アカガシ亜属		50	-	-
シイノキ属		1	-	-
ニレ属-ケヤキ属		45	-	-
エノキ属-ムクノキ属		7	-	-
カエデ属		4	-	-
ブドウ属		1	-	-
ツタ属		3	-	-
ノブドウ属		1	-	-
ウコギ科		4	-	-
ミズキ属		1	-	-
エゴノキ属		4	-	-
イボタノキ属		3	-	-

草本花粉				
イネ科		87	-	-
カヤツリグサ科		8	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		4	-	-
セリ科		1	-	-
ヨモギ属		27	-	-
他のキク亜科		8	-	-

不明花粉		2	-	-

シダ類孢子				
ミズワラビ属		1	-	-
サンショウモ		5	-	-
アカウキクサ属		1	-	-
他のシダ類孢子		118	8	2

合 計				
木本花粉		239	0	2
草本花粉		135	0	0
不明花粉		2	0	0
シダ類孢子		125	8	2
総計 (不明を除く)		499	8	4

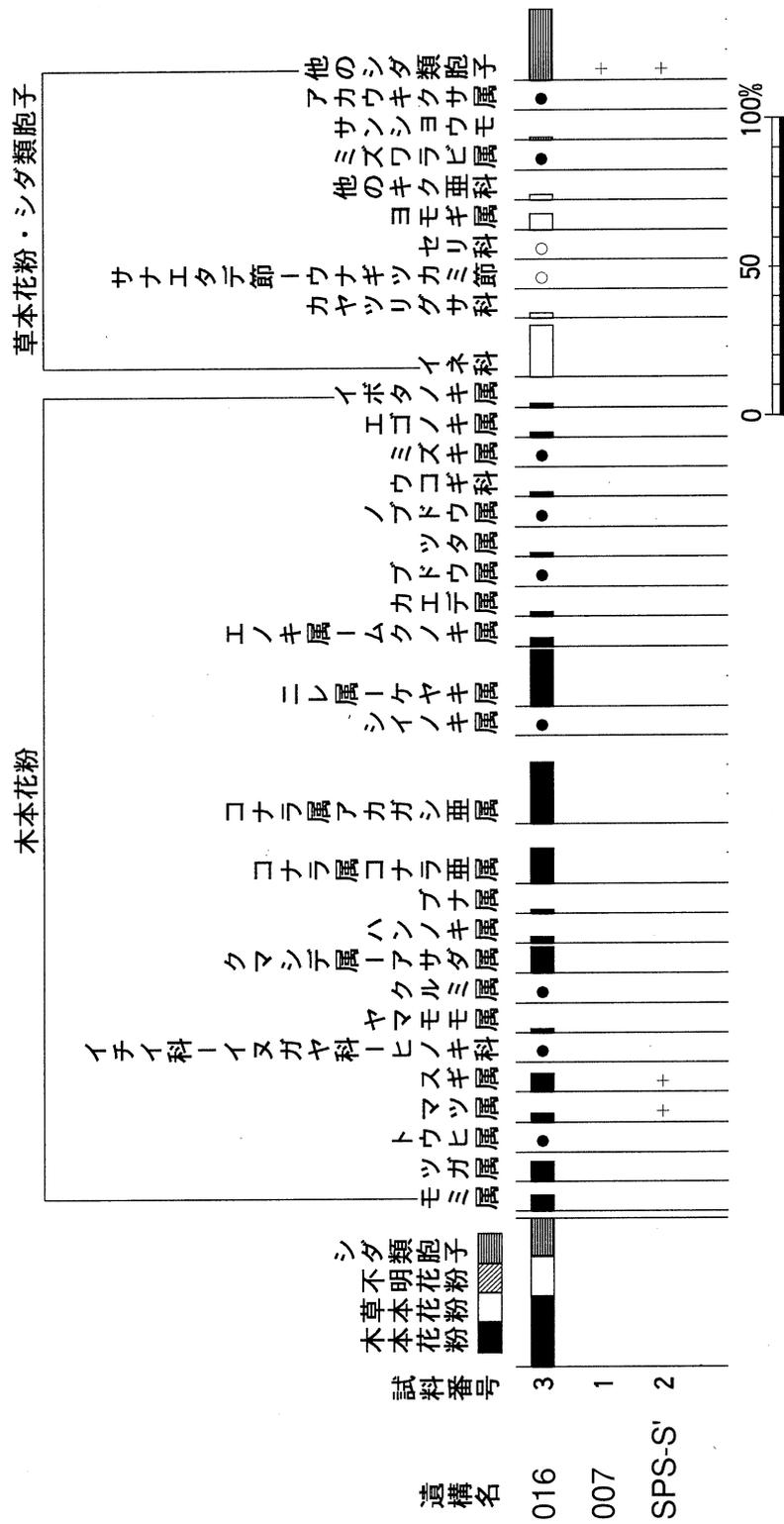


図2 花粉化石組成

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の種類を示す。

表4 植物珪酸体分析結果

種 類	遺構名 007 試料番号	SPS - S'							
		1	2	4	6	8	9	10	
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	-	5	11	1	7	5	34	37	
キビ族	-	1	2	-	1	-	-	-	
タケ亜科ネザサ節	-	4	3	3	2	1	2	2	
タケ亜科	184	120	121	153	159	152	76	91	
ヨシ属	1	5	5	6	2	1	3	10	
ウシクサ族コブナグサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	3	16	19	13	4	8	15	23	
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	2	-	3	1	-	-	1	
イチゴツナギ亜科	-	8	11	6	11	6	14	22	
不明キビ型	14	29	21	14	8	17	38	41	
不明ヒゲシバ型	23	38	16	21	13	25	22	38	
不明ダンチク型	5	16	15	7	7	8	7	26	
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	-	9	11	3	13	2	30	23	
タケ亜科ネザサ節	-	3	5	4	1	3	3	3	
タケ亜科	82	47	44	53	66	71	38	34	
ヨシ属	1	2	9	5	2	3	1	9	
ウシクサ族	9	27	36	25	26	12	36	33	
シバ属	1	1	1	-	1	3	-	5	
不明	14	34	36	24	25	16	35	49	
合 計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	230	245	224	227	215	223	211	291	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	107	123	142	114	134	110	143	156	
総 計	337	368	366	341	349	333	354	447	
組 織 片									
イネ属穎珪酸体	-	1	1	2	-	-	11	10	
イネ属短細胞列	-	2	2	1	2	1	10	7	
イネ属機動細胞列	-	1	-	-	-	-	-	1	
ススキ属短細胞列	-	-	-	-	1	-	-	-	

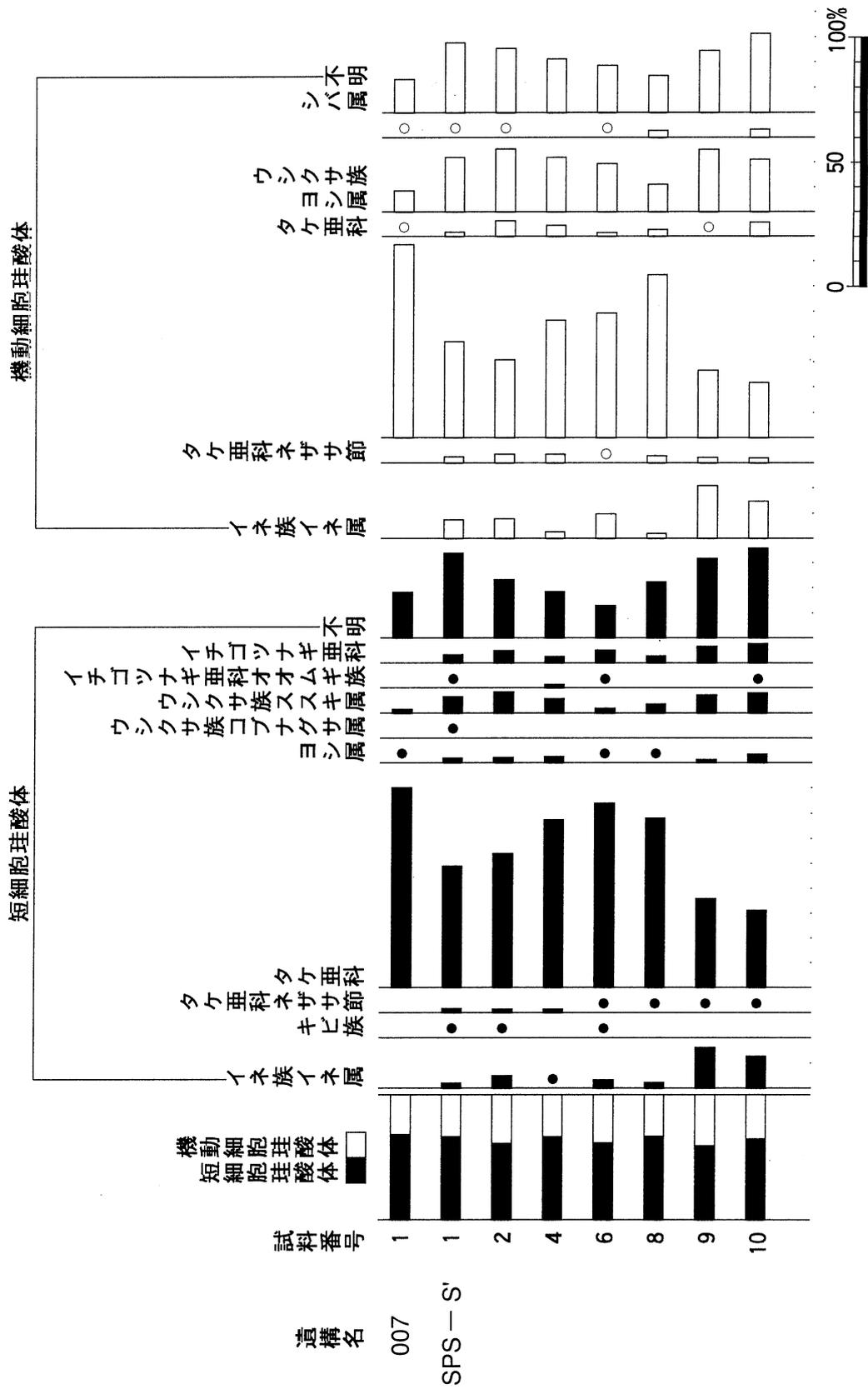


図3 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

れている。これらの結果をみると、平安時代頃の花粉化石群集は、モミ属・ツガ属・スギ属など針葉樹とアカガシ亜属で特徴づけられ、これらが生育する暖温帯性の森林が推定されている。また、ハンノキ属やクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、カエデ属など河岸や溪谷によく見られる種類の花粉も多く、河岸林や溪谷林の構成要素となっていたことが推定される。一方で草本類が増大し、特に水生植物ならびに栽培植物の出現がめだつようになることから、水田開発などにもなう草地の拡大が示唆される。中・近世に入ると、イネ科をはじめとする草本類の割合が顕著になり、開けた草地がさらに拡大したためと思われる。また中世頃からマツ属の増加がみられ、特に近世では顕著になる。これは、人類の植生干渉によるとみられるマツの植林や二次林の急増が起こっているためと思われる。

今回の結果をみると、アカガシ亜属が多産する点や、河岸林、溪谷林の構成要素が多い点で前回の結果と調和的であり、同様な景観が示唆される。なお、珪藻分析の結果からみると、養老川の影響を強く受けていると考えられることから、浅井小向後谷遺跡と同様、広範囲な植生を反映していると考えられる。

5. 遺構の埋積過程

● 016号

優占種のこれまで明らかにされている生態学的な特徴をみると、まず、*Ropalodia gibberula* は好塩性種であり、*Amphora ovalis* var. *affinis* とともに海成層から検出された例も多く認められる（安藤・南雲、1983：etc.）。また、田中（1987）によると、群馬県で発掘された古代水田からも本種が多産しており、当時の水田土壤に、多量に出現したことは、水田の水が塩類を豊富に含んでいたことを示しているとされる。*Neidium ampliatum* は湖や池沼に普通に見られるが、時折流水中からも発見される種類とされる（田中、1987）。*Stauroneis phoenicenteron* は様々な水域の至るところに認められる種であるが、*Cholnoky*（1968）は最適pHを6.8に持つ種類であるとしている。*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* 等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1988）である。特に、前述の2種は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989：1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占する結果が得られた場合、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとされる。好流水性種の *Achnanthes lanceolata* は、河川の中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地、および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現し、他の地域には出現しなかったり、出現しても主要でないことから、この地域の環境を指標する可能性が大きい種群とされ、中～下流河川指標種群と呼ばれる（安藤、1990）。また、*Rhoicosphenia abbreviata* も同様な生態性である。

以上の生態性を参考にして当時の堆積環境を述べる。溝の底部（14層試料番号3）は、好流水性種と陸生珪藻の両者が卓越した組成を示している。この点を考慮すると、明らかに混合群集（堀内ほか、1996）であり、好流水性種と陸生珪藻のいずれかがその場所の環境を反映している可能性が高い。上部の試料番号2（10層）とは、陸生珪藻が多産する点では共通するが、本試料の場合は好流水性種が多産している点で異なる。これらのことから、本試料が採取された層準も通常は乾くような状況にあ

り、水の影響があれば一時的に水域化するような環境であったと思われる。中～下河川指標種群の多産から考えると、溝が埋積し始めた時期は養老川の影響を強く受け、養老川の氾濫によってもたらされた土砂が堆積した可能性が指摘される。一方、溝覆土上部（試料番号2）では、陸生珪藻が多産することから、おおむね乾いた環境が推定される。ただし、水生珪藻も多産していることから考えて、全く水の影響がない場所とは考えにくく、少なからず水の影響を受けたと考えられる。特に、好止水性種と好塩性種の多産から、時として水がたまっていた状態になっていたと考えられる。これら以外の産出種は、分類群の数が多く、生態性がばらついている傾向にあることから、混合群集（堀内ほか、1996）と考えられ、二次化石群集である可能性が高い。

● 007号

優占種の生態学的な特徴を述べる。*Cymbella turgidula* および *Rhoicosphenia abbreviata* は中・下流性河川指標種群（安藤、1990）と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。*Gomphanema angustum* および *Nitzschia amphibia* は河川から沼沢地、湿地まで比較的広範に分布する種群であるが、後者は陸生珪藻に伴って認められることが多く、また、汚濁した水域に生育することが知られ、好汚濁性種と呼ばれている（Asai & Watanabe, 1995）。陸生珪藻は、前述の通りである。

珪藻化石群集の特徴としては、好アルカリ性種、流水不定性種を主体として、貧塩－好塩性種あるいは好流水性種および陸生珪藻を伴うもので、顕著な混合群集の形態を有する群集である。ここでも、好流水性種と陸生珪藻という、共存しない種群が卓越して認められ、いずれの種群がこの場所の環境を示すかが問題となる。しかし、遺跡の存在するような場所は、一般に人が生活していた場所であり、これまで多くの調査例からも陸生珪藻が繁茂するような比較的乾いた場所である場合が多く、好流水性種は一時的な流水域からの流れ込みによる場合が多い。つまり、低地の場合、河川の氾濫等によって運ばれてきた堆積物が混入したことが多い傾向にある。また、特に前述の016号試料のように溝状の遺構である場合は、いずれかの判断が難しい場合もあるが、本試料が採取された位置は、井戸の底である。そのため、本来は停滞水域であったと考えられるが、流水性種の産出率が高いことから、試料採取が行われた層準は、河川水等が土砂と共に流れ込んできて埋積したものである可能性が高い。

6. 近世の畑作

中・近世の井戸007号からは、タケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出される。これらは周辺に生育していたものに由来すると思われるが、栽培植物に由来する植物化石は検出されなかった。

一方、近世の畑作が行われたとされる5層や4層では、試料を採取した5ヶ所でいずれもタケ亜科の優占する植物珪酸体組成がみられた。しかし、イネ属の出現率は試料番号1～8が採取された4ヶ所で低いのに対して、試料番号9・10が採取された場所では高かった。また、イネ属類珪酸体などの組織片もわずかに認められた。これより、5層や4層内にはイネ属が混入しており、特に試料番号9・10の場所には稲稈などの植物体が混入している可能性が指摘できる。この要因として、栽培されていたか、あるいは保温・保湿用材や堆肥などに稲藁が使用されていた可能性が考えられる。しかし、

現段階ではどちらに当たるかの判別は難しい。また、キビ族やオオムギ族の中には栽培種（キビやオオムギなど）も含まれることから、これらも栽培されていた可能性がある。ただし、現時点では栽培種と野生種との判別が植物珪酸体だけでは難しいことから、判定することは難しい。

7. まとめ

016号埋積過程は、基本的には乾燥していたが、下位では、流水の影響を受けることもあり、水が停滞していた時期もあったと推定される。また、埋積するにつれて水の影響が少なくなっていく過程が示唆される。一方、007号は水が停滞した時期もあったが、乾燥している時も多かったと推定される。また、2つの遺構とも、埋積過程の中で、養老川の影響を受けていたと考えられることから、微高地上は基本的には乾燥していたが、氾濫の影響でしばしば冠水することもあったとみられる。

古植生に関する分析調査では、花粉化石の保存が悪かったが、花粉組成は分目要害遺跡や浅井小向後谷遺跡の結果と矛盾するものではなかった。また、古植生変遷に関しては、層位的に連続した試料を分析し、変遷としてとらえることが有効であることから、今後低地の発掘調査の際に資料を蓄積していくことが有効であると思われる。

近世の畑作を対象とした分析調査の結果、イネの栽培あるいは敷藁の可能性が指摘されたほか、キビやオオムギなどの栽培についても示唆された。畑作の分析調査は、東京都の恵比寿遺跡の例（辻本ほか、1993）などがあるが、いずれも植物珪酸体のみではイネ科以外の植物を推定することが難しいという欠点が存在する。栽培植物の検討方法は、今回のような耕土から検出される微化石を対象とする以外に、井戸や溝などから採取された試料を対象として、花粉化石や種実同定を併用すると効果的な場合が多い。これは、水が存在した可能性の高い場所では、嫌気的な状況下におかれるため、花粉化石や種実遺体の保存が良く、栽培植物の情報が得られやすいからである。栽培植物の推定は、耕作土のみではなく、遺構周辺の調査の際にも着目して、より地域的な検討が必要である。

<引用文献>

Asai,K. & Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2)Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,Vol.10, p.35-47

安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73~88.

安藤一男・南雲 保(1983)埼玉県、荒川低地沖積層のケイソウ. 日本歯科大学紀要, 1983(12)p.241-249

Choinoky,B.J.(1968)Die Okologie der Diatomeen in Binnen-Gewassern.lehre.

堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫(1996)珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について

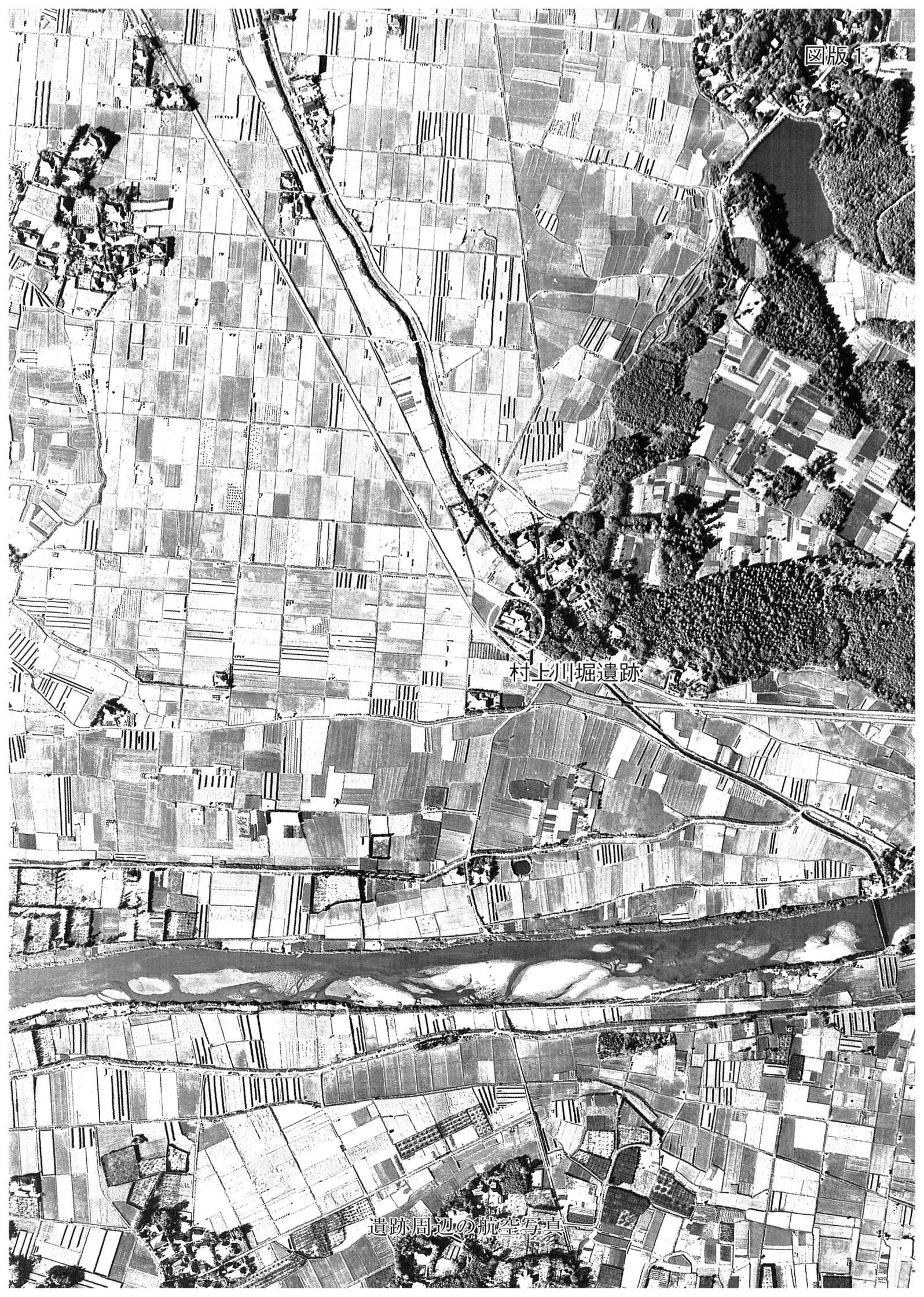
－混合群集の認定と堆積環境の解釈－ 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, p.62.

Hustedt,F.(1930)Die Kieselalgen Deutschlands. Oesterreichs und der Schweiz. under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland Oesterreichs unt der Schweiz, vol.7 Leipzig. Part 1, 920p

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische unt ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von

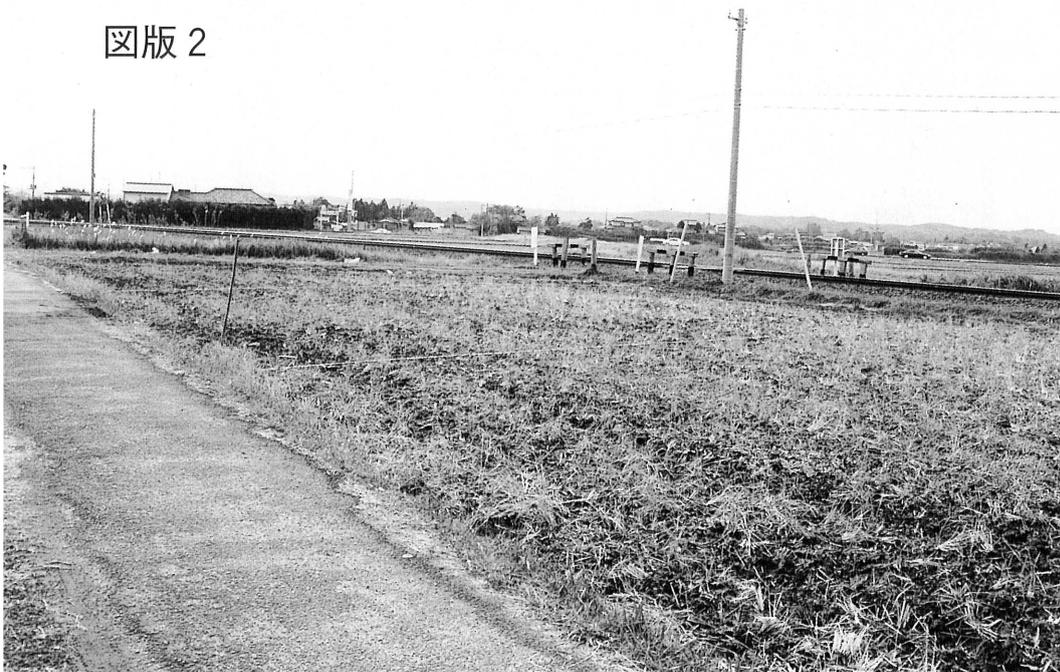
- Java, Bali und Sumatra. I ~ III, Arch. Hydrobiol. Suppl, 15 p.131-809, 15 p.1-155, 274-349
- Hustedt, F. (1938) Systematische und ökologische untersuchungen über der diatomeen flora von Java, Bali und Sumatra nach dem material der Deutschen limnologischen Sunda Expedition, Arch. Hydrobiol. suppl.
- Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 2. 845p
- Hustedt, F. (1961-1966) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol.7. Leipzig, Part 3. 816p
- 伊藤良永・堀内誠示(1989)古環境解析からみた陸生珪藻の検討 —— 陸生珪藻の細分 —— 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集 p.17
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌 6巻 p.23-44
- 小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望— 植生史研究 1 p.9-44
- 近藤鍊三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析、その特性と応用, 第四紀研究, 25 p.31-64
- Krammer, K and H. Lange-Bertalot. (1986) Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): p.1-876
- Krammer, K and H. Lange-Bertalot. (1988) Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(2): p.1-596
- Krammer, K and H. Lange-Bertalot. (1990) Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(3): p.1-596
- Krammer, K and H. Lange-Bertalot. (1991) Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(4): p.1-596
- 田中宏之(1987)群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻、群馬県立歴史博物館紀要, 8, p.1-20.
- 辻本崇夫・田中義文・伊藤良永・馬場健司・中根秀二・高橋 敦(1993)恵比寿遺跡の木本層序・古環境および遺構に関する自然科学分析調査, 「恵比寿」旧サッポロビール恵比寿向上地区発掘調査報告書, p.437-497, 恵比寿・三田埋蔵文化調査会

写 真 图 版



村上川堀遺跡

遺跡周辺の航空写真



1次調査前状況
(北から)



1次調査前状況
(北東から)



001・002号
(北西から)

001号P 3 セクション
(南西から)

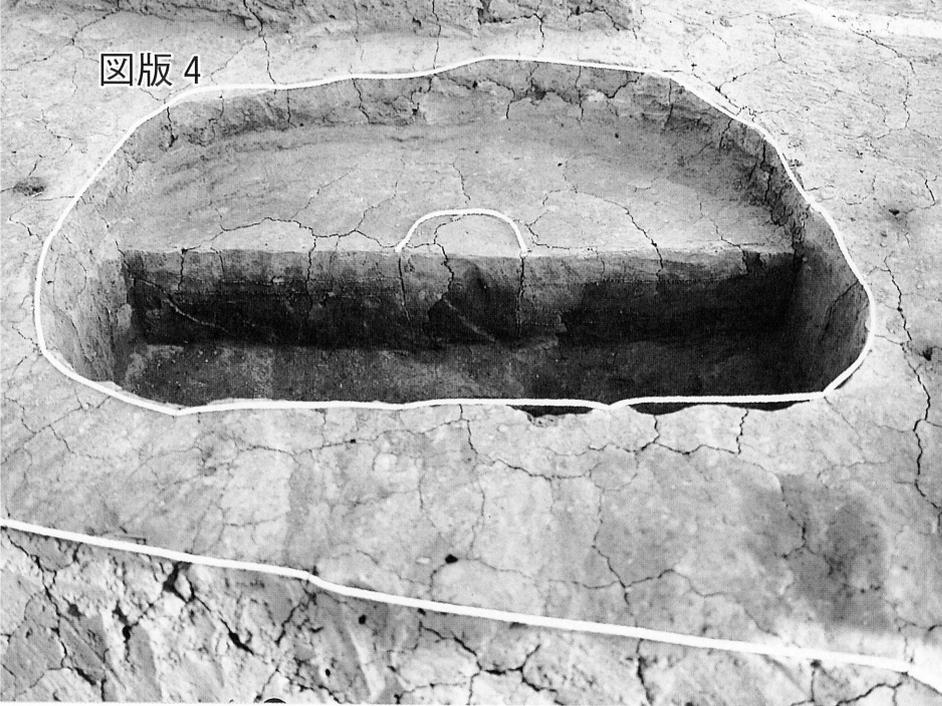


002号P 1 セクション
(南西から)

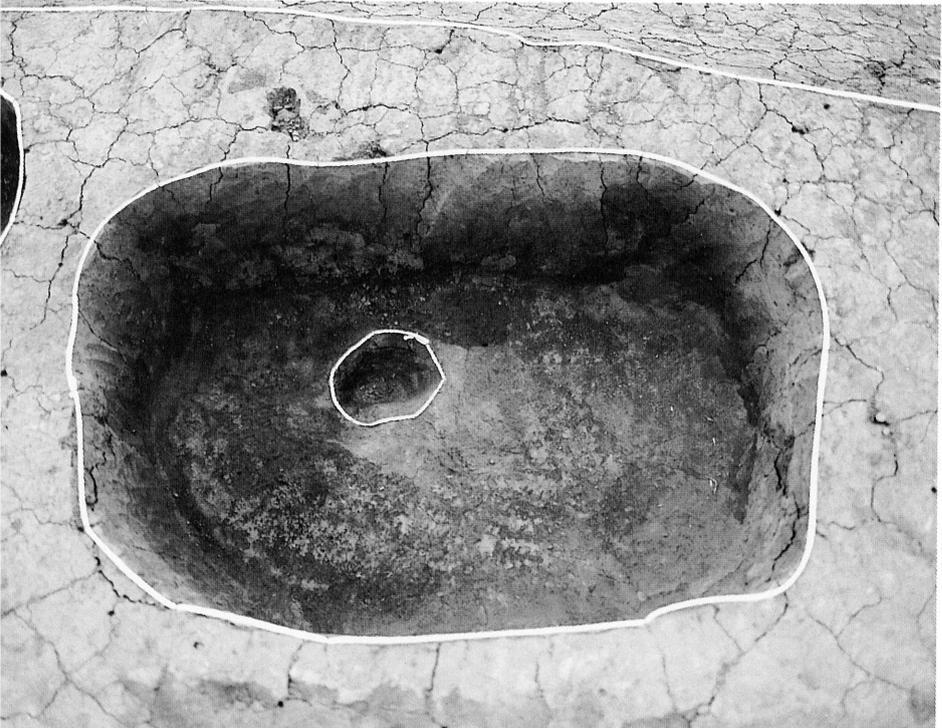


002号P 2
(北西から)

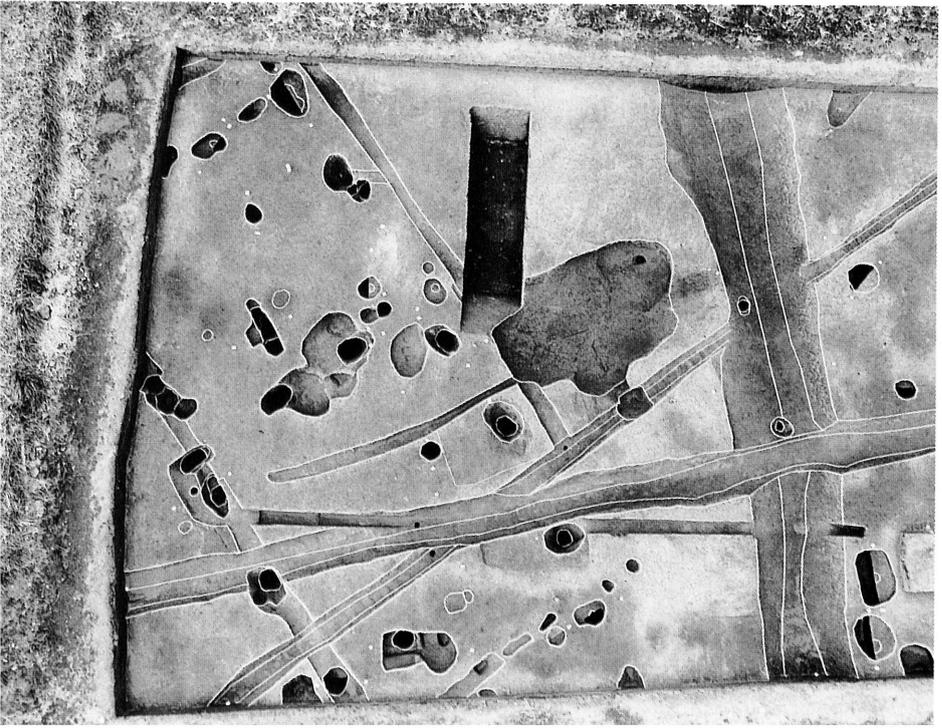




002号P 3 セクション
(南西から)



002号P 3 セクション
(北東から)



航空写真 (003号付近)
(南東から)



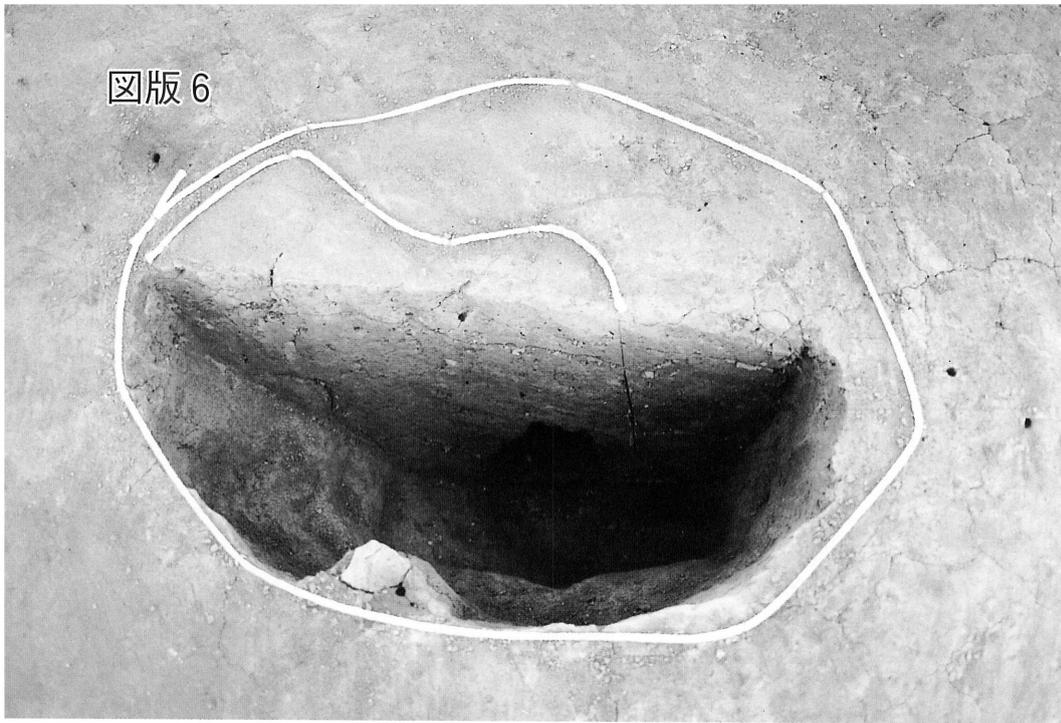
003号
(西から)



003号南側柱穴列
(東から)



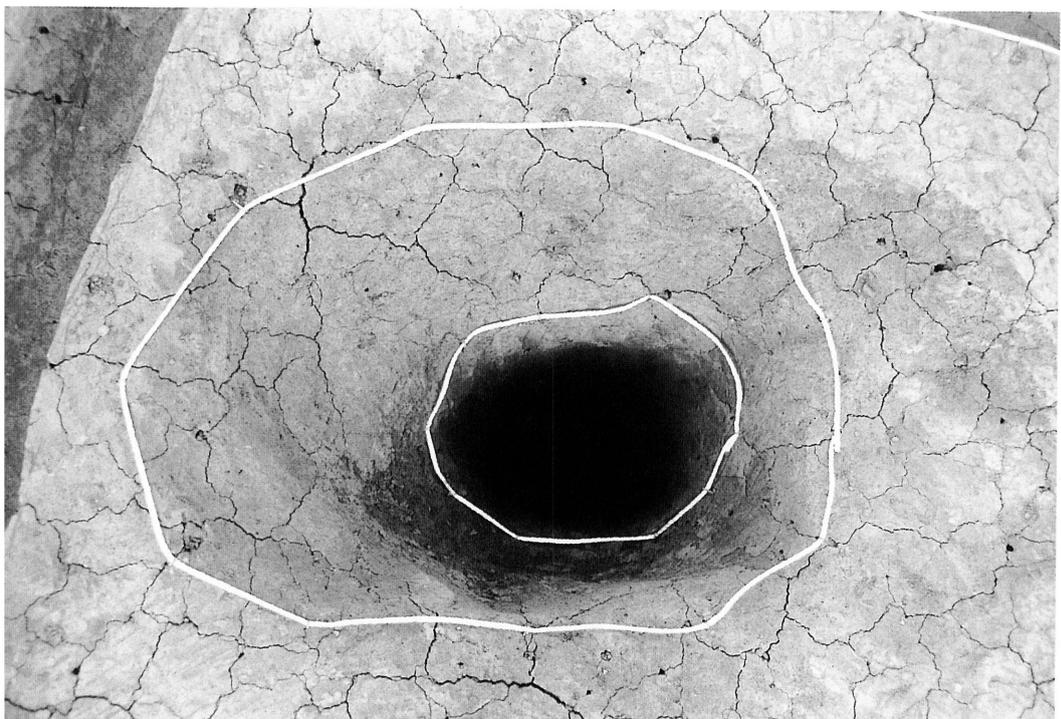
003号P1 セクション
(南西から)



003号P 3 セクション
(南から)

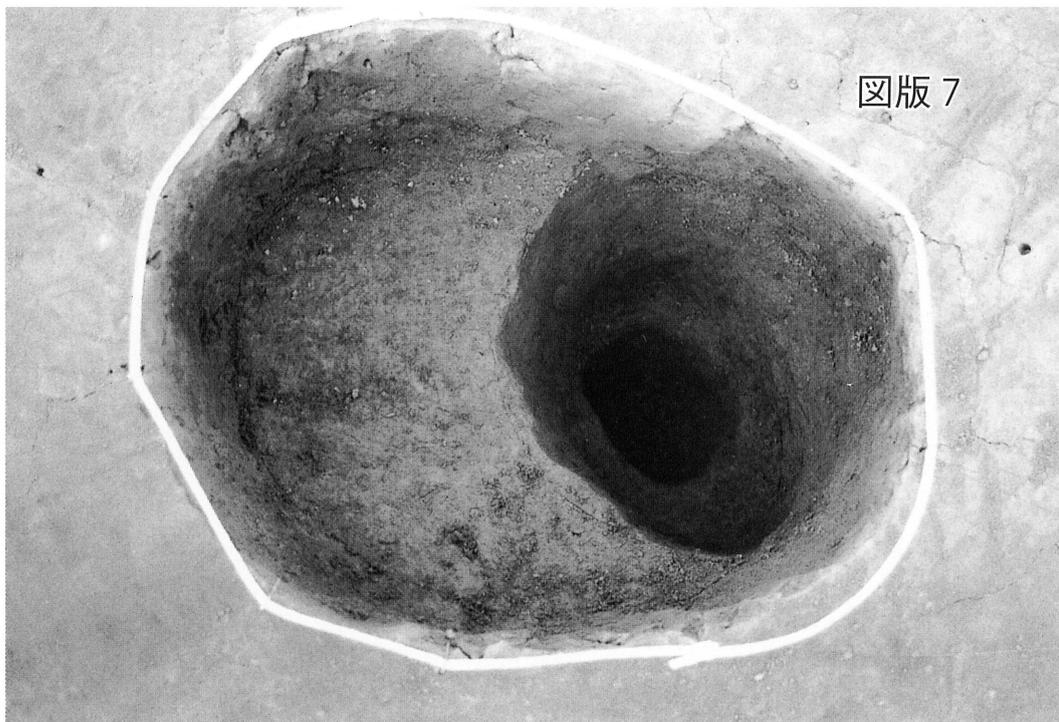


003号P 4 セクション
(南西から)

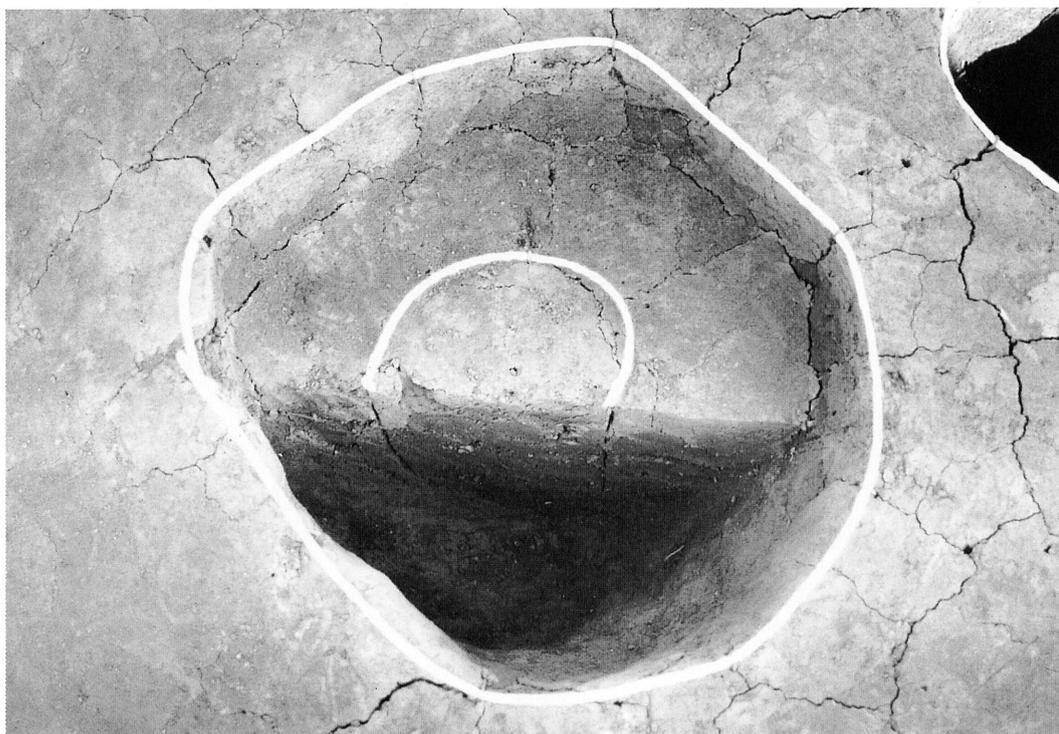


003号P 6
(南西から)

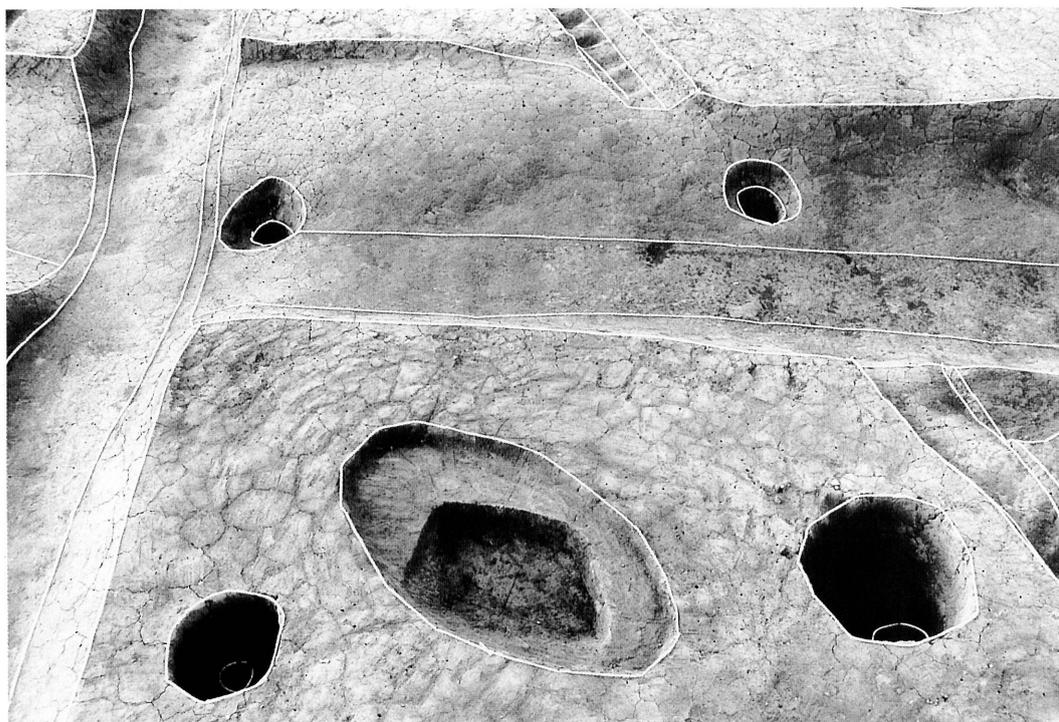
003号P 8
(南東から)

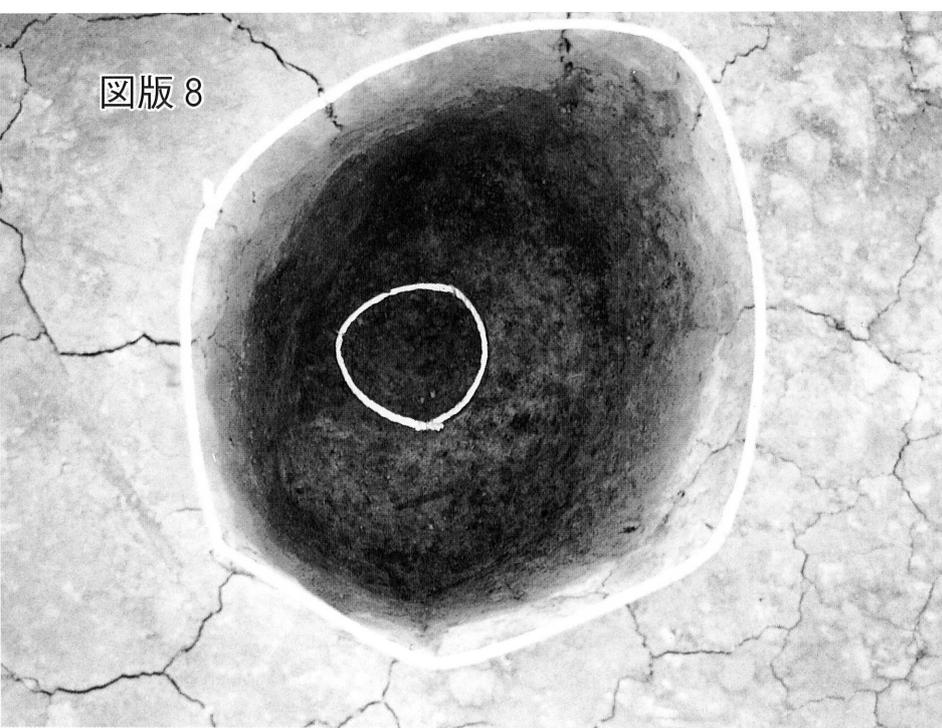


003号P17セクション
(南東から)



004号
(北東から)





004号P 2
(北東から)



006号
(南から)



006号遺物出土状況
(南から)

006号遺物出土状況
(北東から)



006号遺物出土状況
(北東から)



006号遺物出土状況
(南西から)

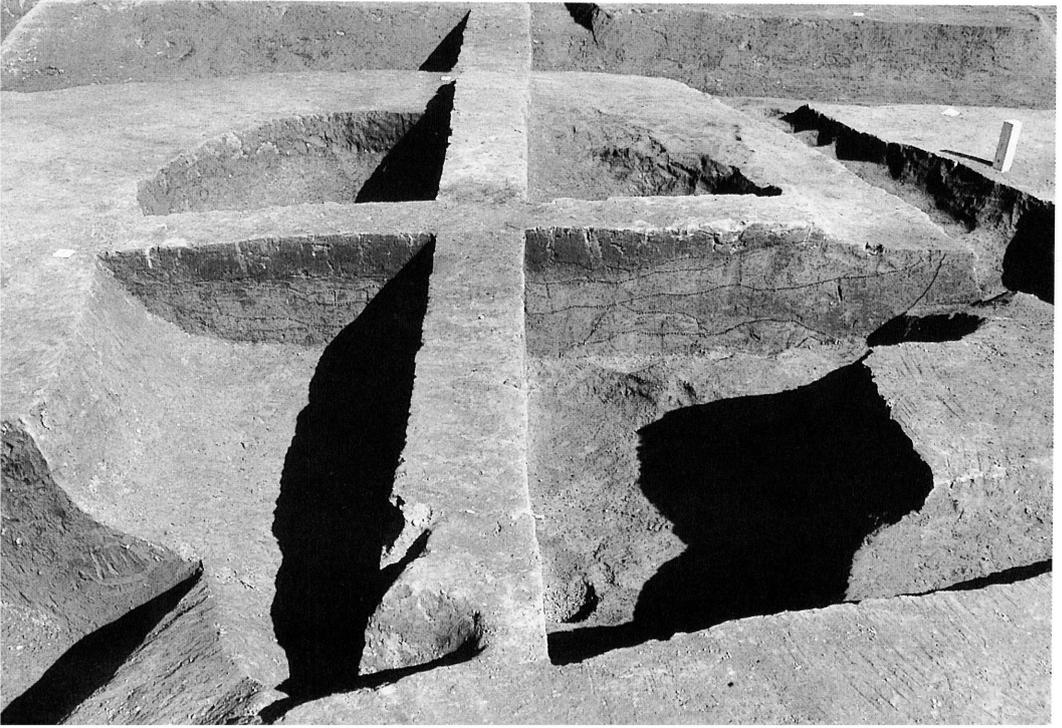




006号遺物（杯）出土状況
（南西から）



006号遺物（杯）出土状況
（南西から）



006号セクション
（南から）



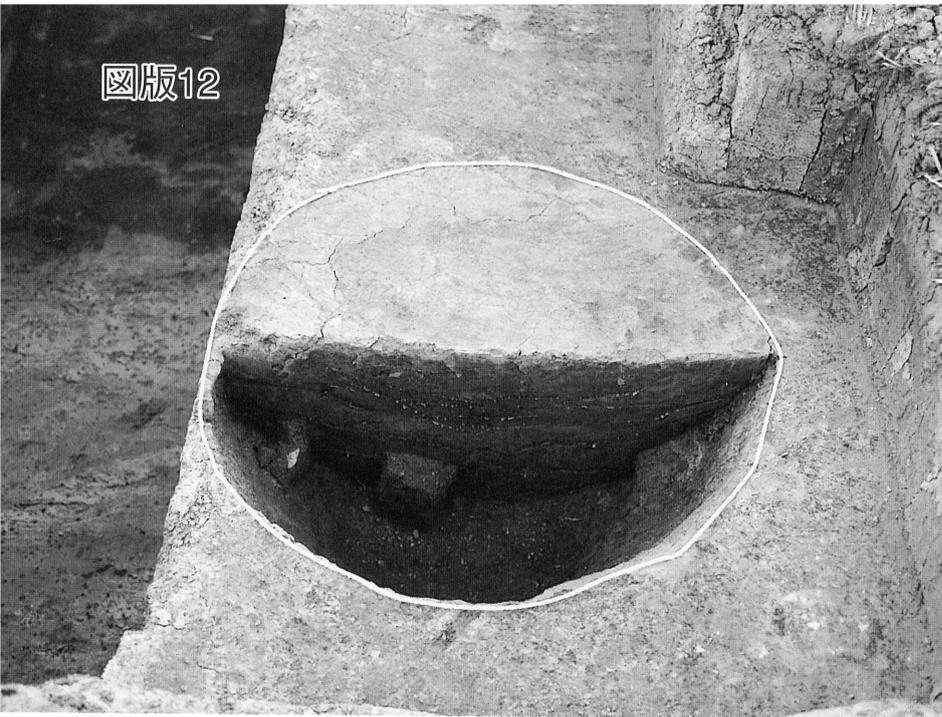
007号
(南東から)



009号
(北から)



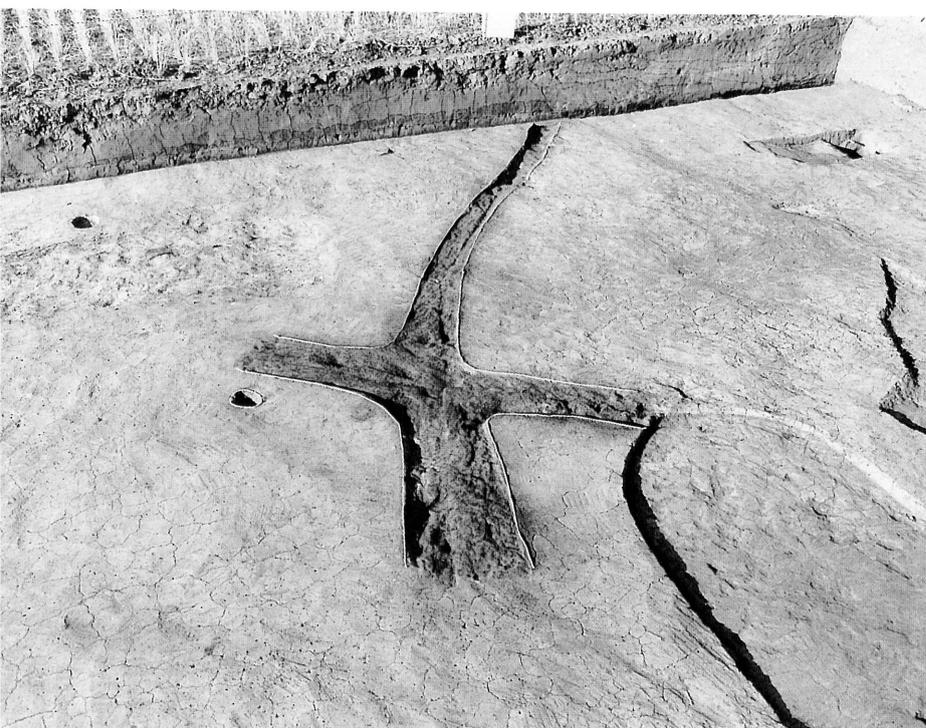
009号
(南から)



009号セクション
(南から)



016号
(南東から)



031号
(南東から)



1次
(北から)



航空写真 1次
(南西から)
<村上低地より市原台地を臨む>



航空写真 1次
(南東から)



航空写真 (001・002号)
(南東から)



航空写真 (007・018号)
(南東から)



航空写真 (016・017号)
(南東から)

2次調査区全景
(南西から)



2次調査風景
(南東から)



2次Aトレンチ
(東から)





2次調査区全景
(西から)



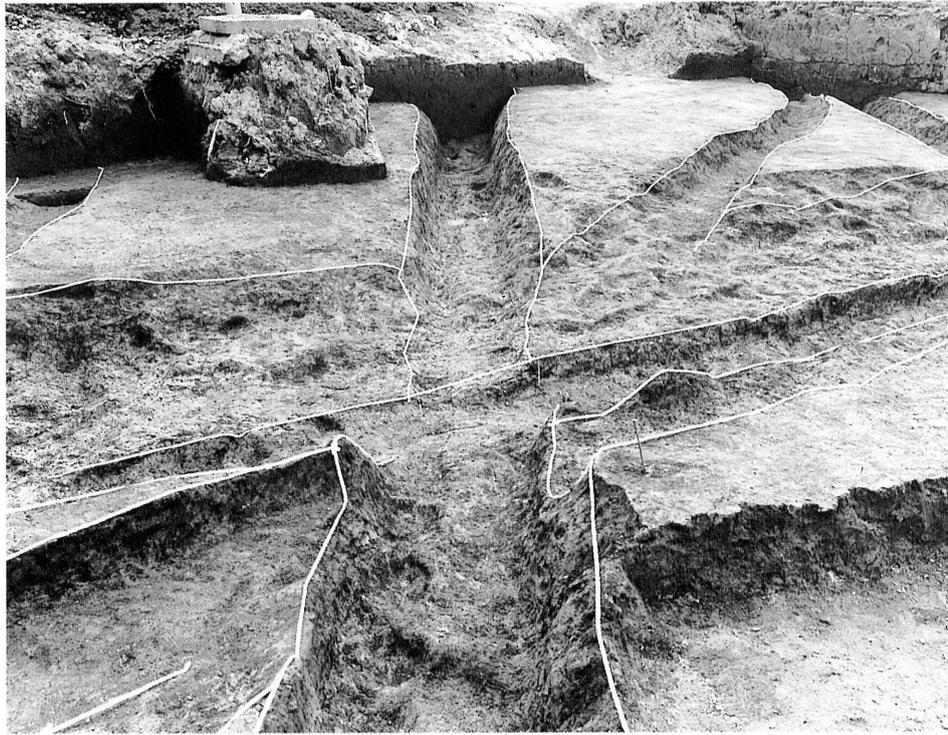
028号
(北西から)



025号
(南から)



026・027号
(北から)



028号
(南東から)



026・027・028号セクション
(北から)



3次調査区遠景
(南西から)



3次確認調査状況
(南東から)



3次2トレンチ
(東から)

3次5トレンチ
(南東から)



3次調査区全景
(西から)



3次調査区全景
(北から)

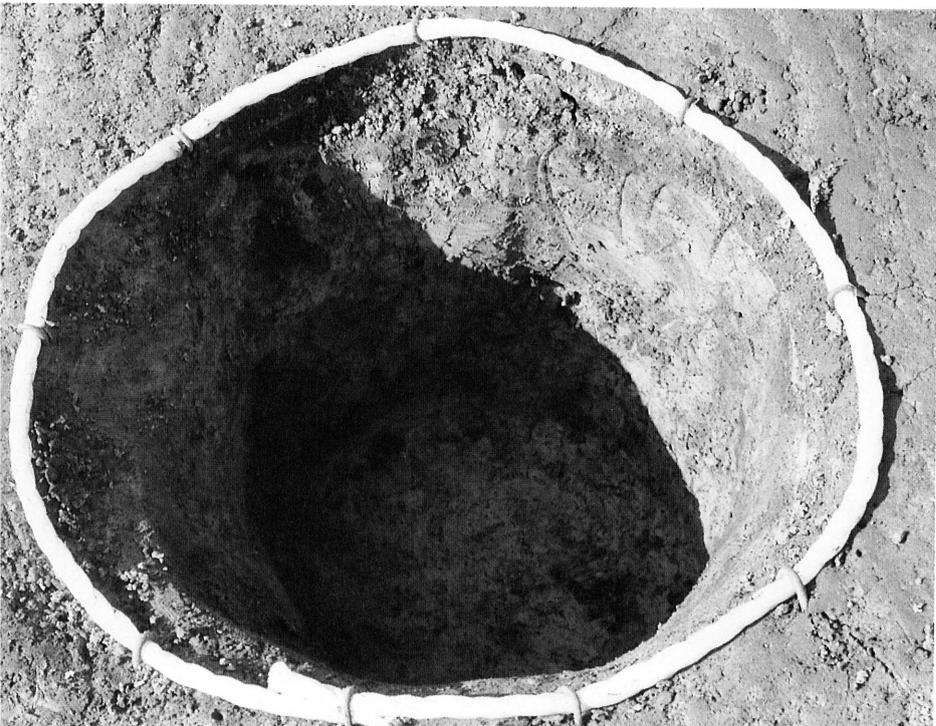




3次全景 (033号)
(東から)



005号
(東から)

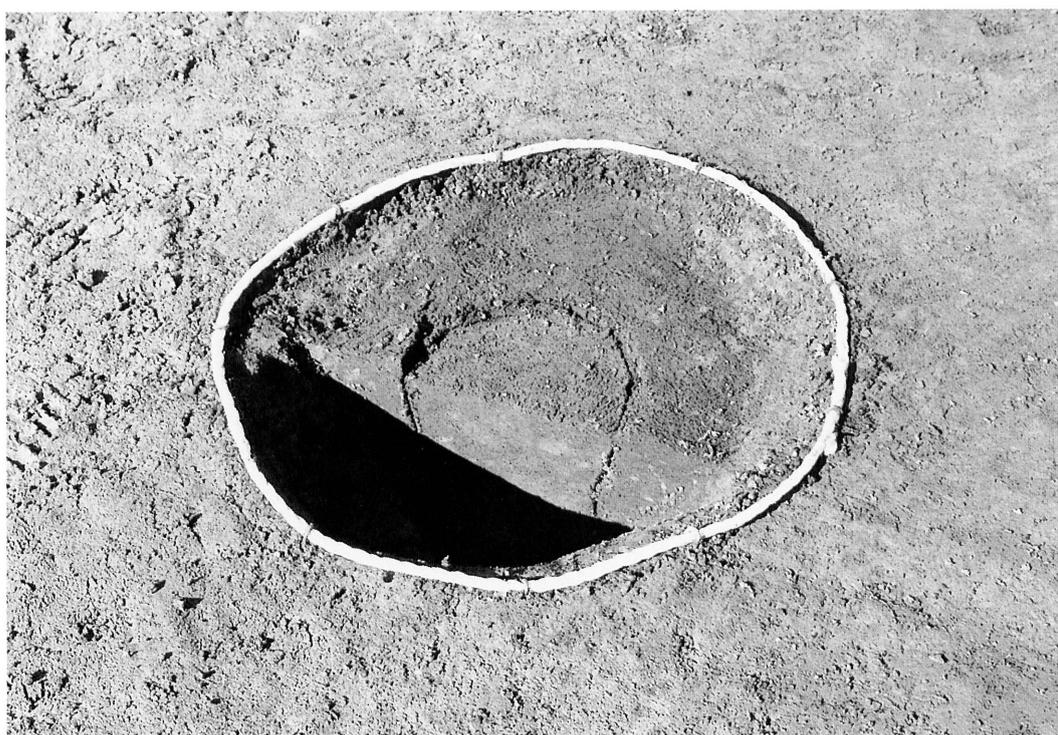


005号P2
(南東から)

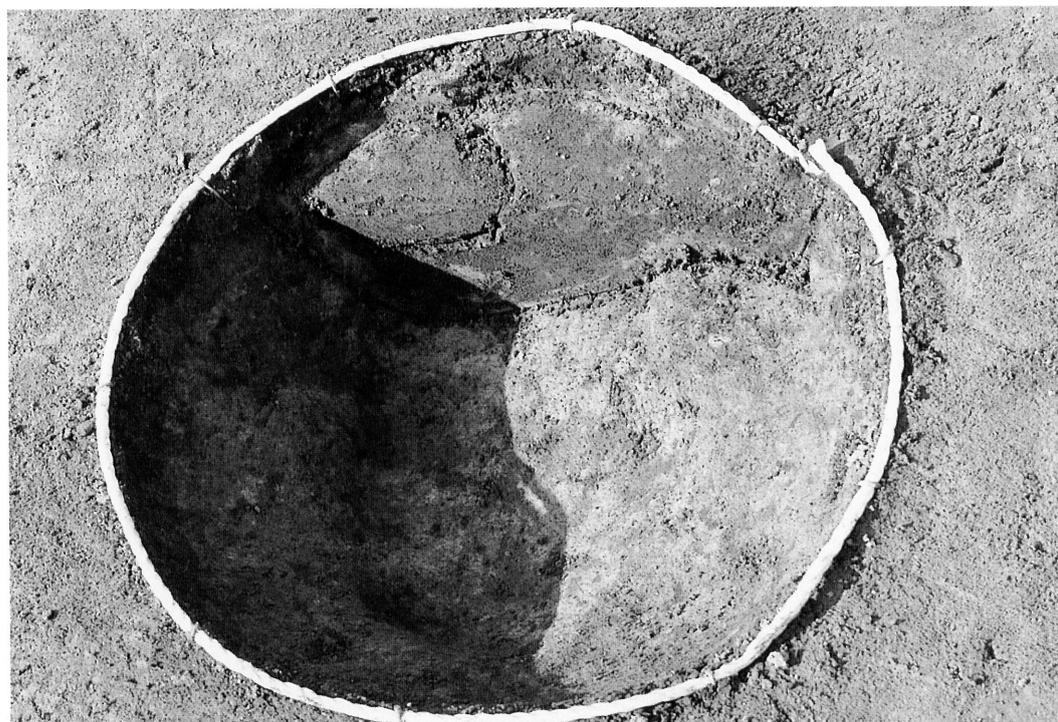
005号P 3 セクション
(南東から)

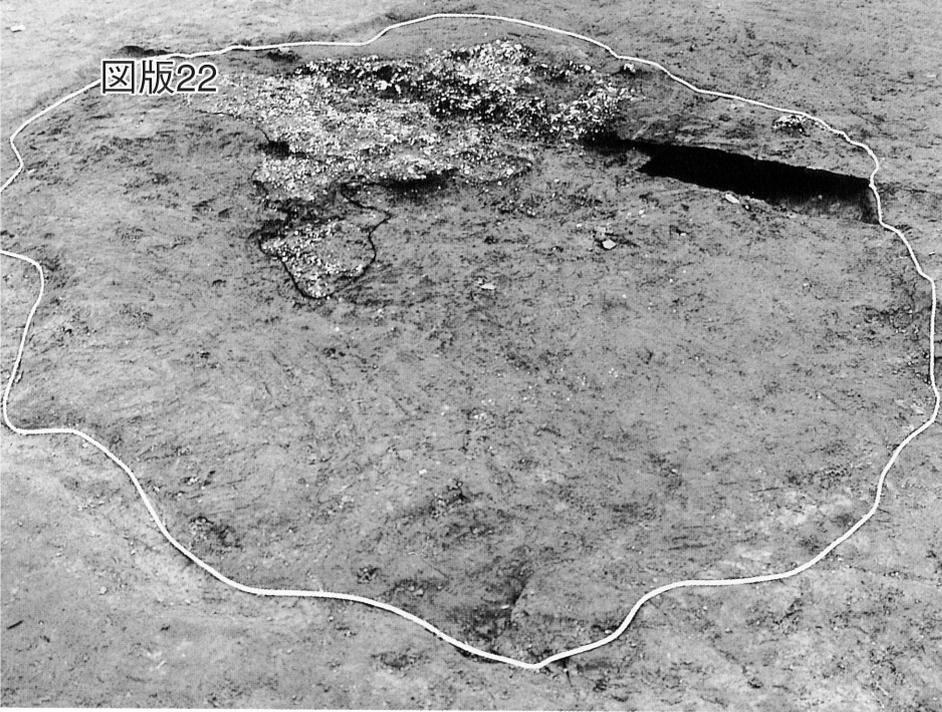


005号P 4 セクション
(南東から)



005号P 5 セクション
(南東から)





010号貝分布状況
(南から)



010号貝ベルトセクション
(北東から)



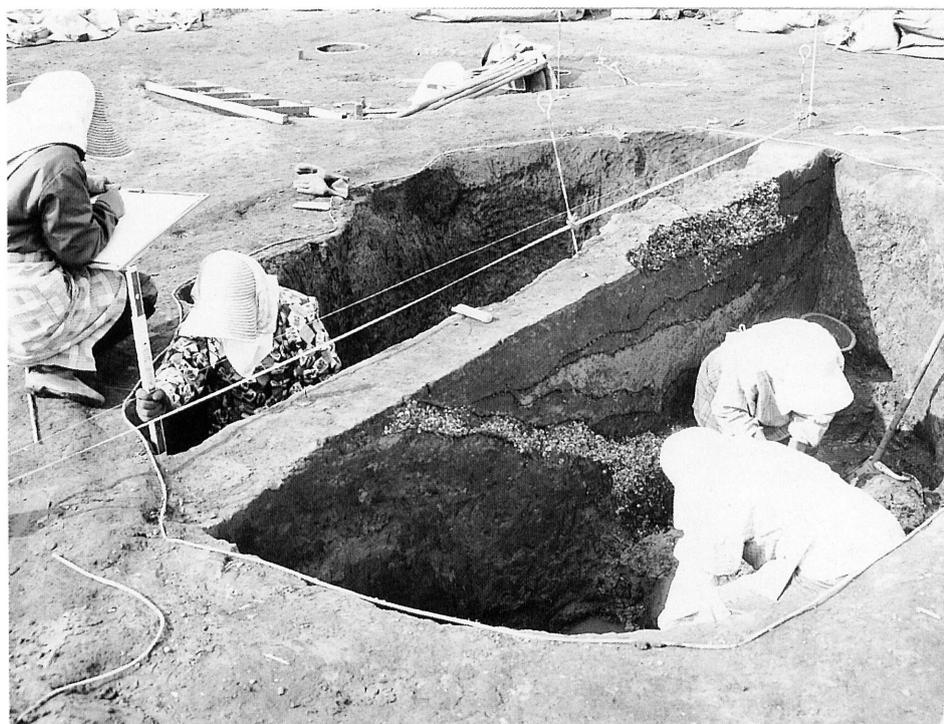
010号
(南から)



011号貝分布状況
(北から)



011号貝ベルトセクション
(北西から)



011号調査状況
(東から)



011号貝ベルトセクション
(南東から)



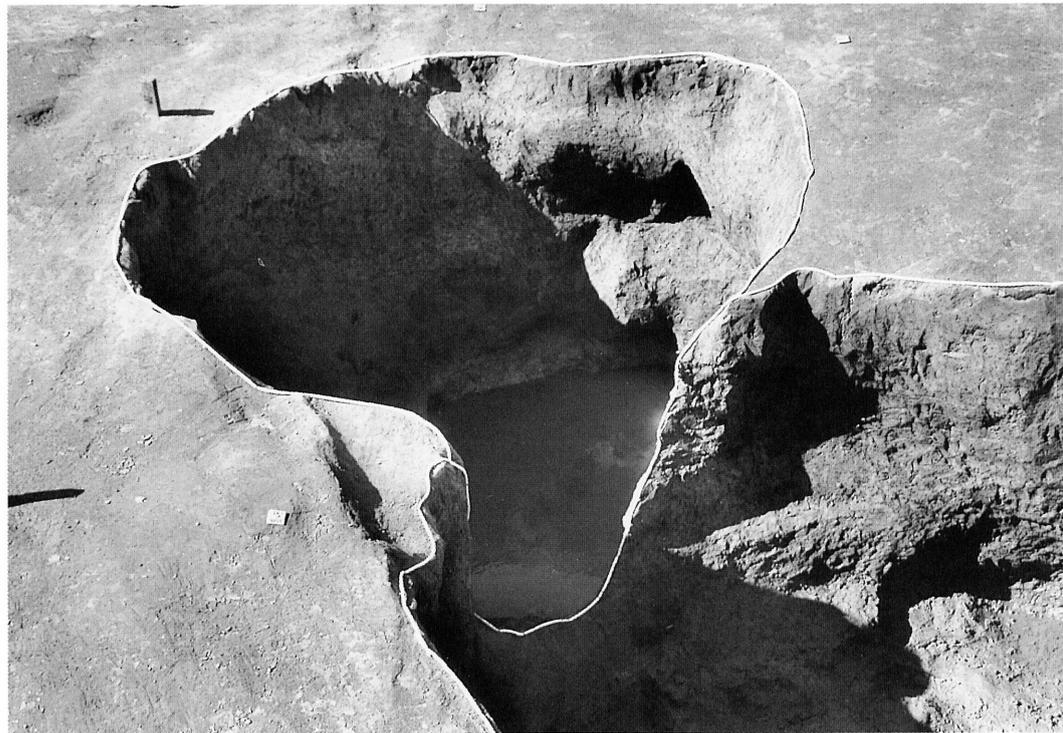
011号セクション
(南東から)



011号
(東から)



011号
(東から)



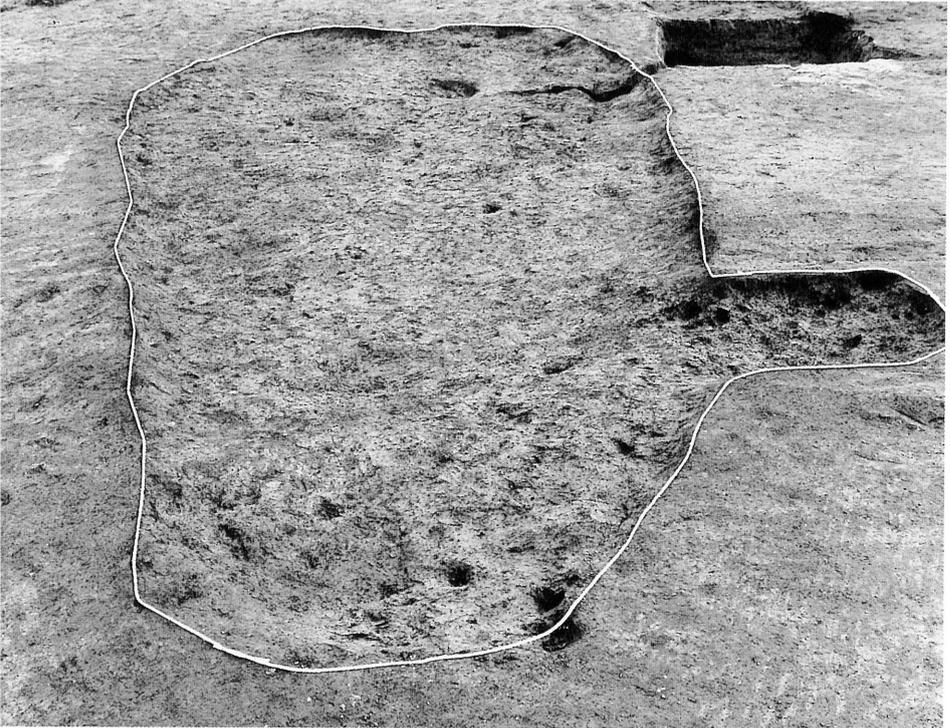
011号
(東から)



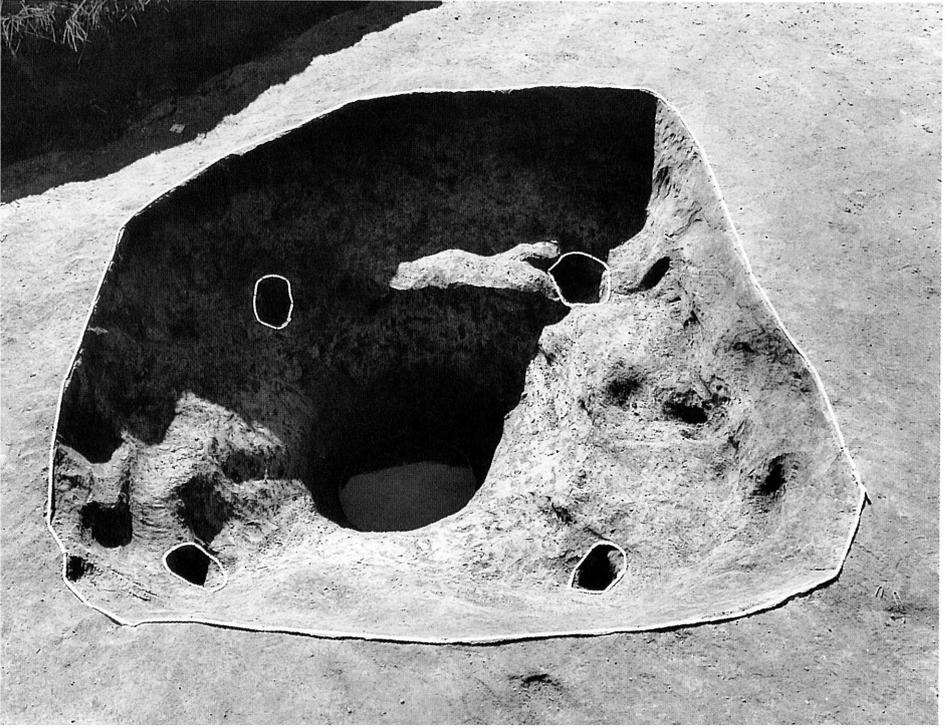
010・011号
(南東から)



012号貝ベルトセクション
(北西から)



012号
(北から)



013号
(北東から)

013号セクション
(北東から)



014号
(北から)



014号セクション
(北東から)

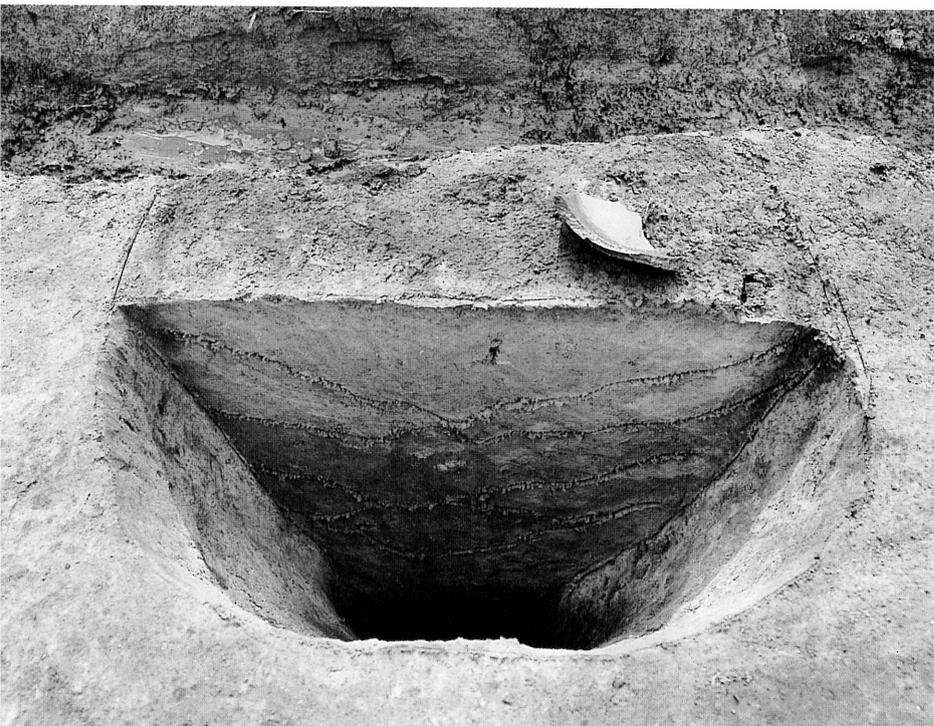




014号遺物出土状況
(西から)



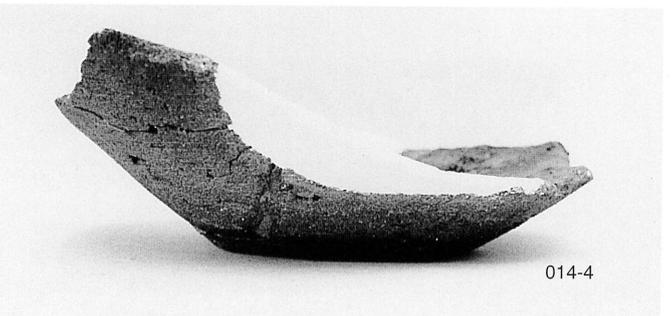
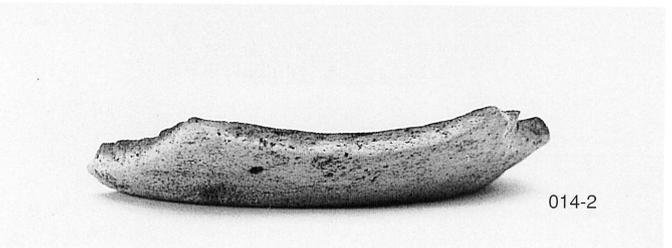
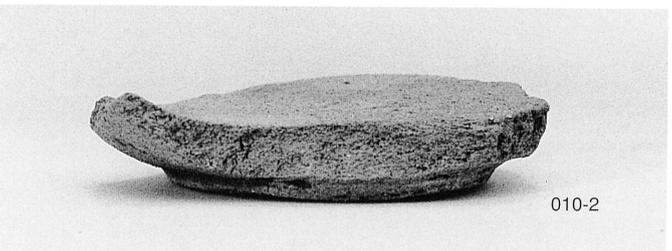
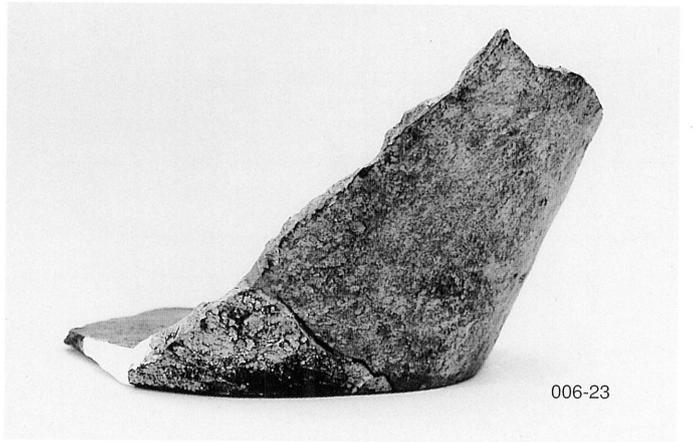
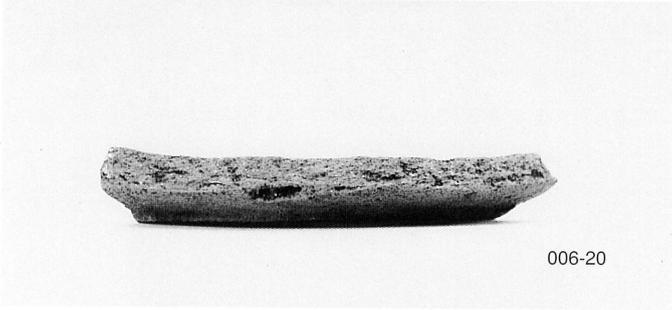
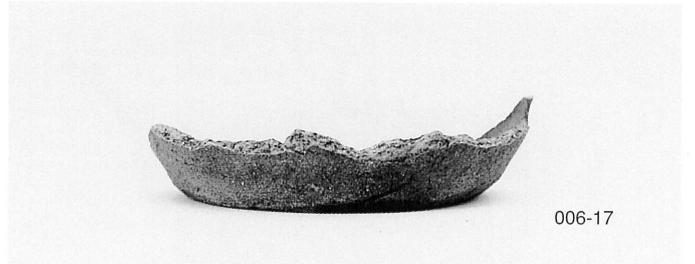
015号
(北から)



015号セクション
(北から)

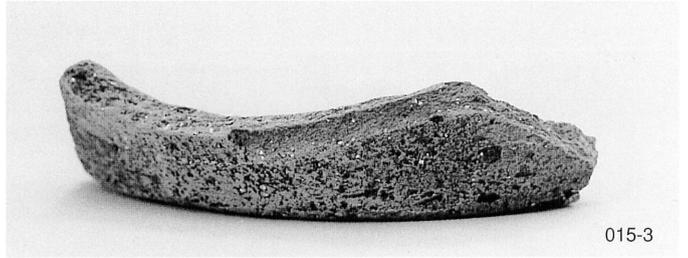


图版30





015-2



015-3



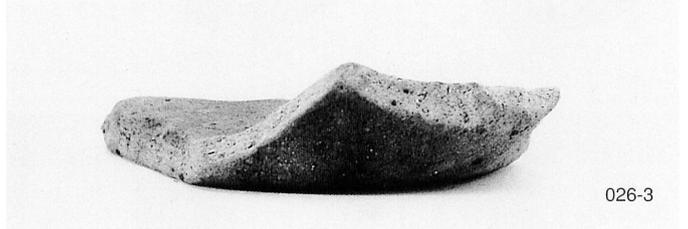
016-2



018-2



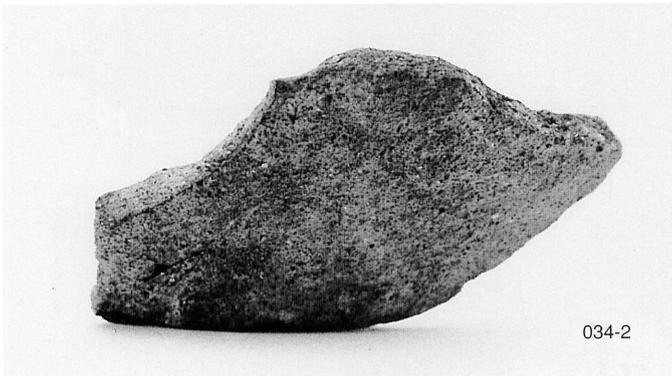
018-3



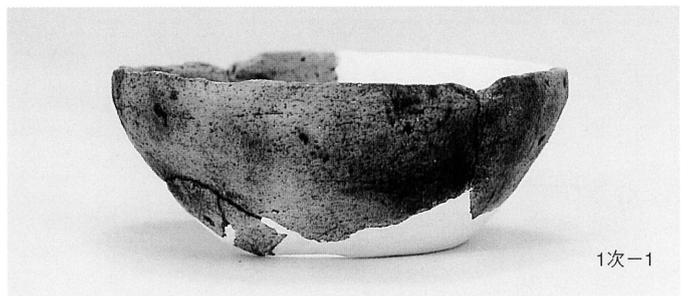
026-3



034-1



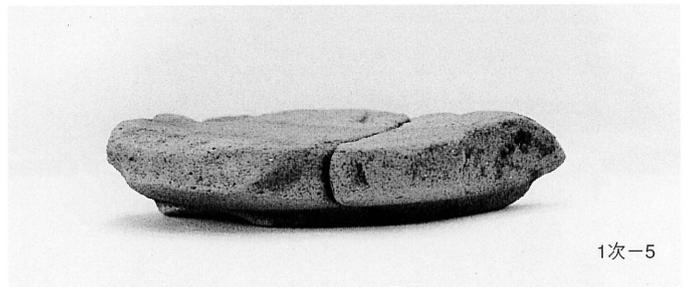
034-2



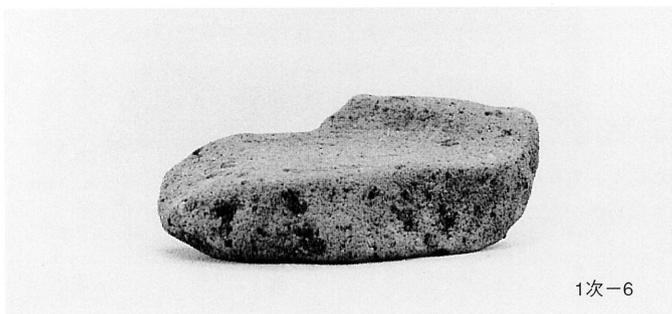
1次-1



1次-4



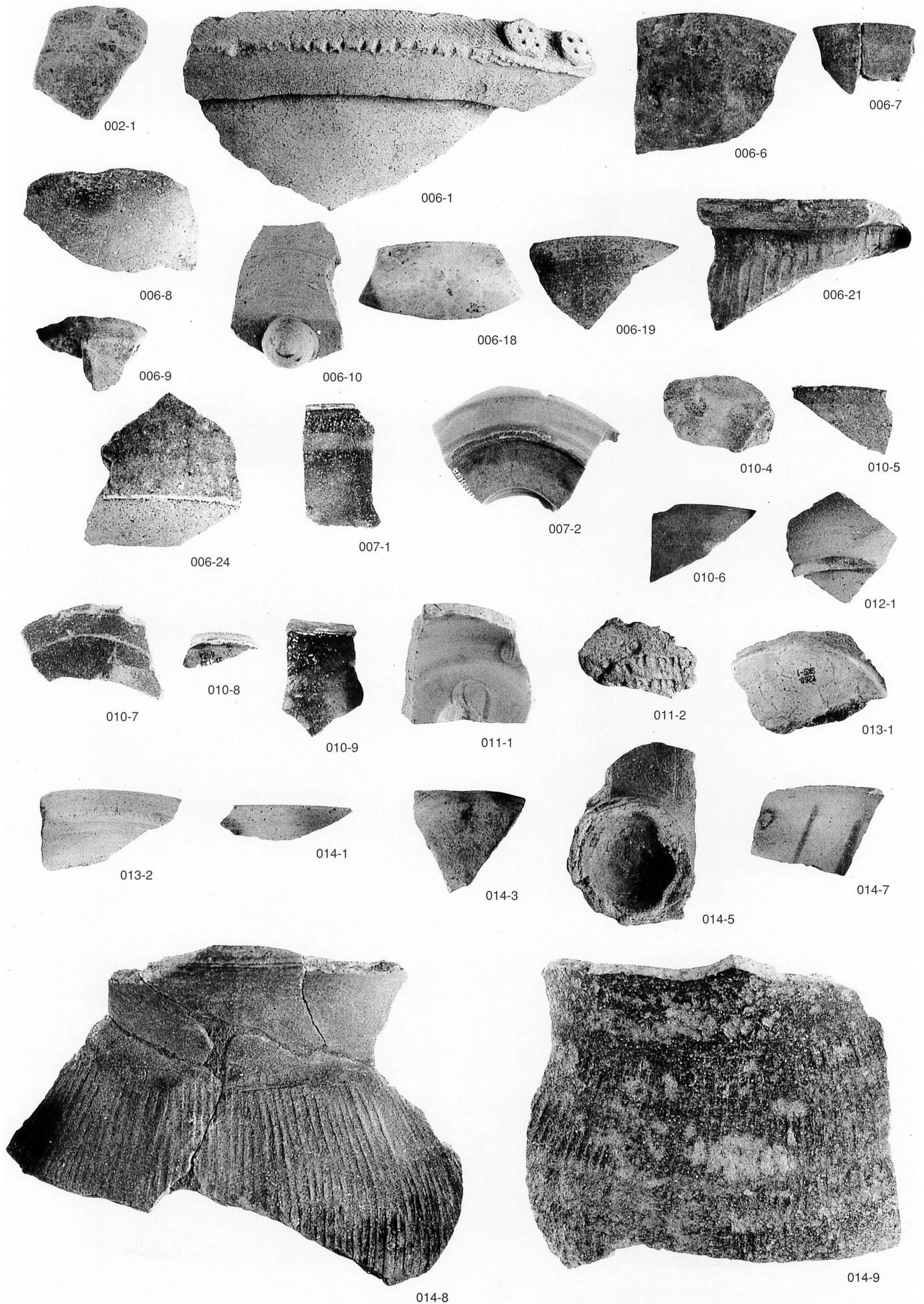
1次-5

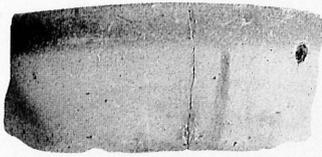


1次-6

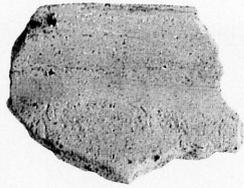


1次-10





015-1



015-4



016-3



016-4



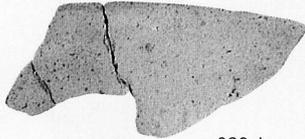
016-5



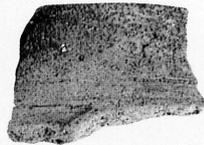
018-1



018-4



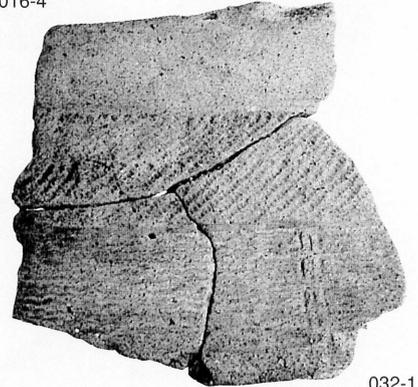
026-1



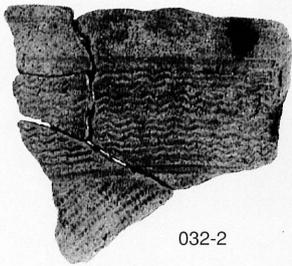
026-2



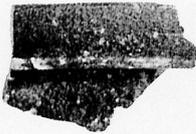
029-1



032-1



032-2



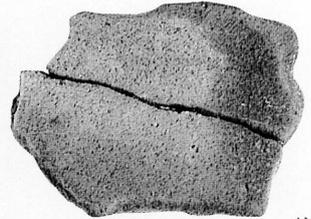
034-3



1次-2



1次-3



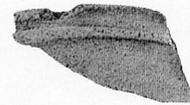
1次-7



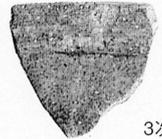
1次-8



1次-9



1次-11



3次-1



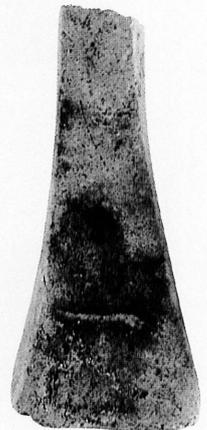
006-25



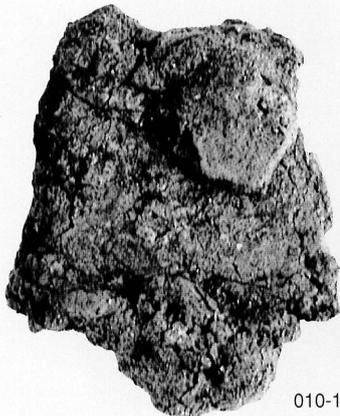
008-1



010-10



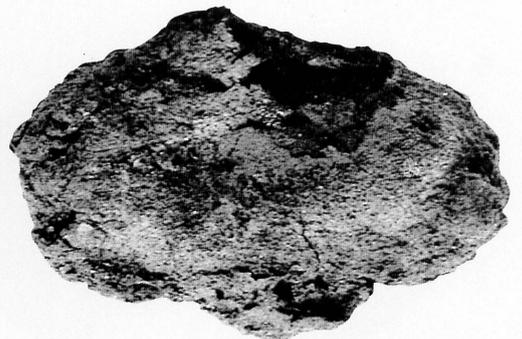
010-11



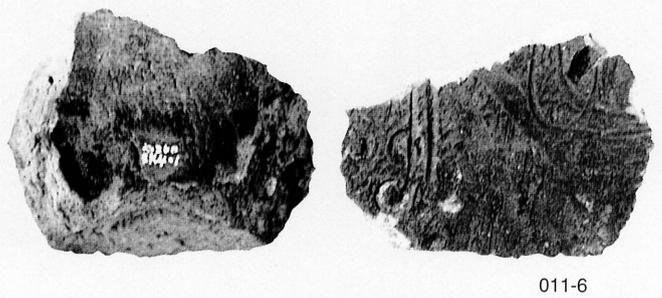
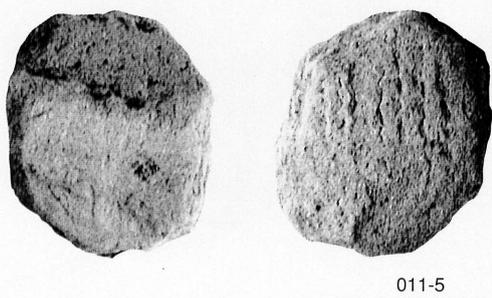
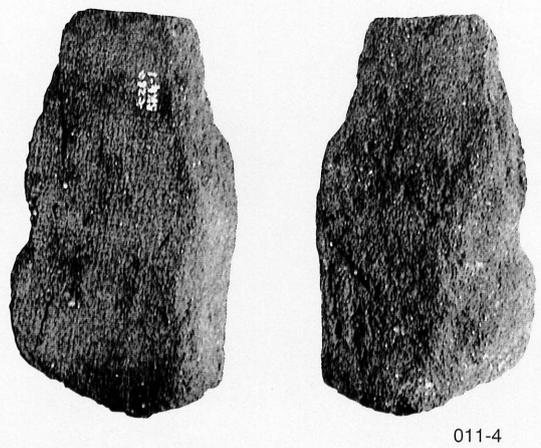
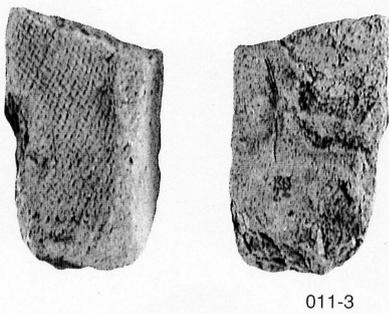
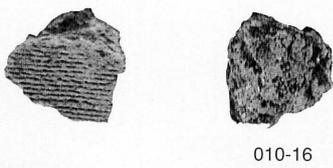
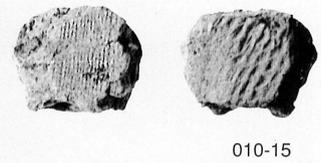
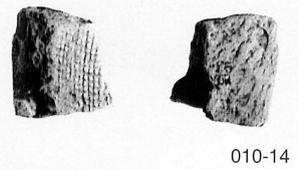
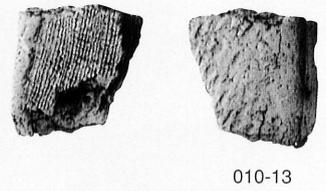
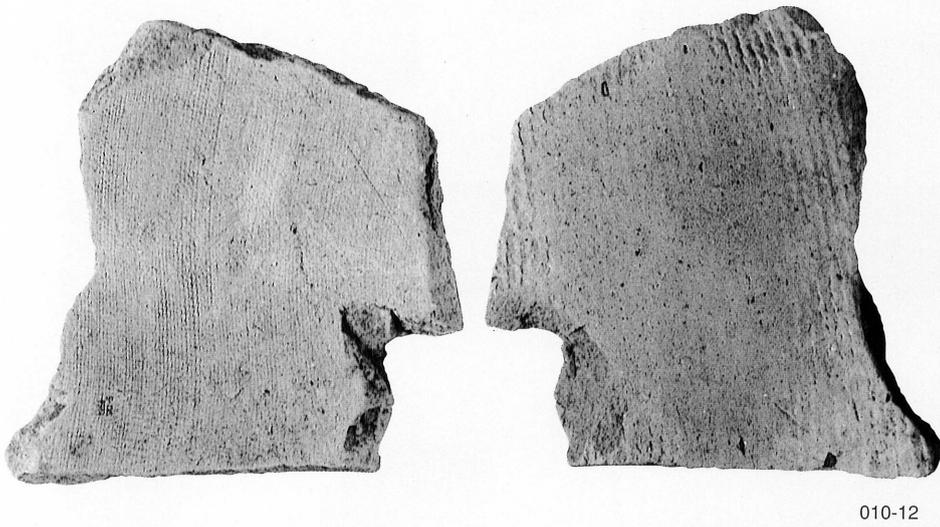
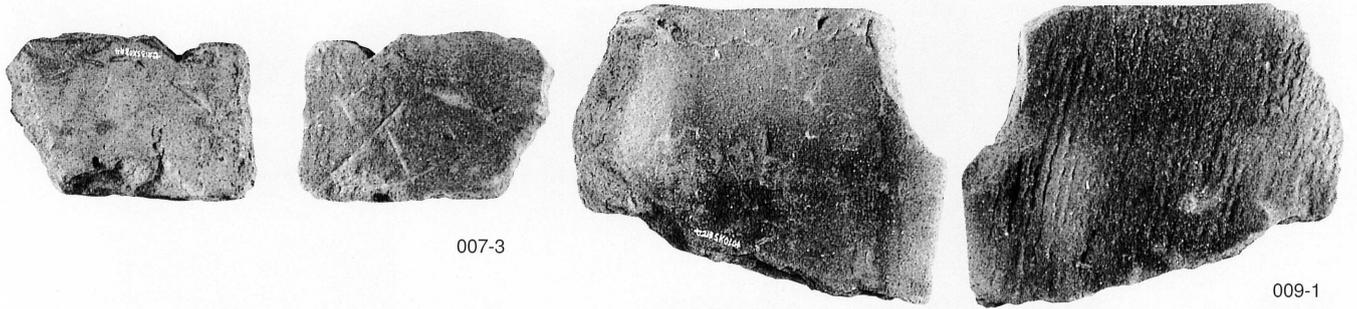
010-17

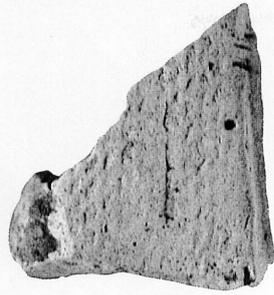


010-18



010-19





014-10



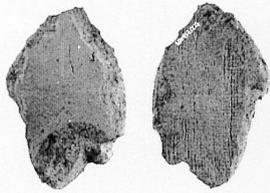
016-6



016-7



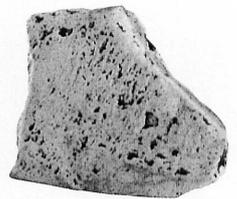
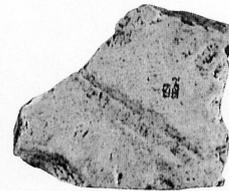
016-8



016-9



018-5



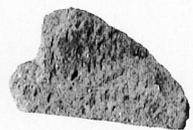
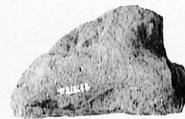
026-4



034-4



1次-12



1次-13



1次-14



1次-15



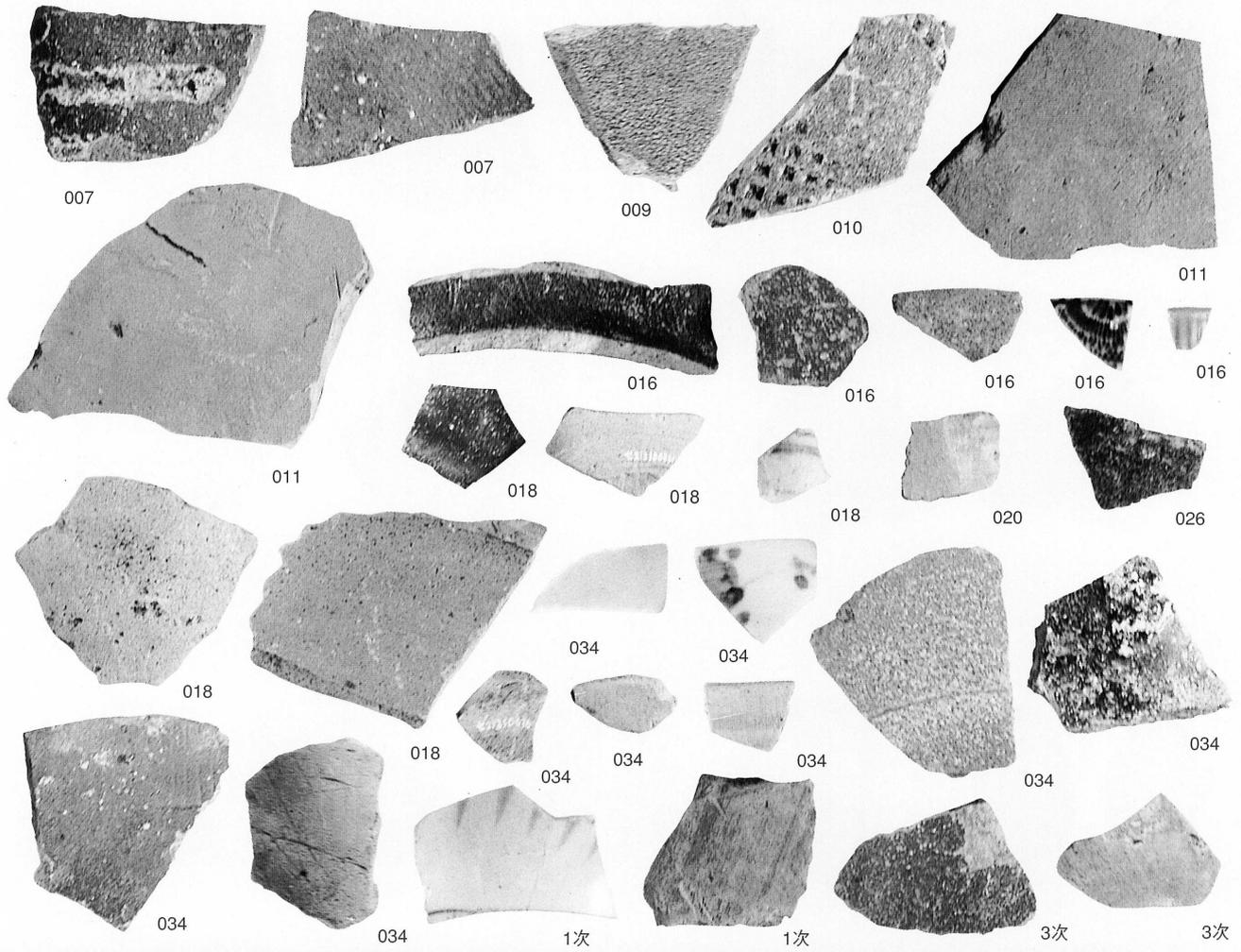
1次-16



3次-2

図版36

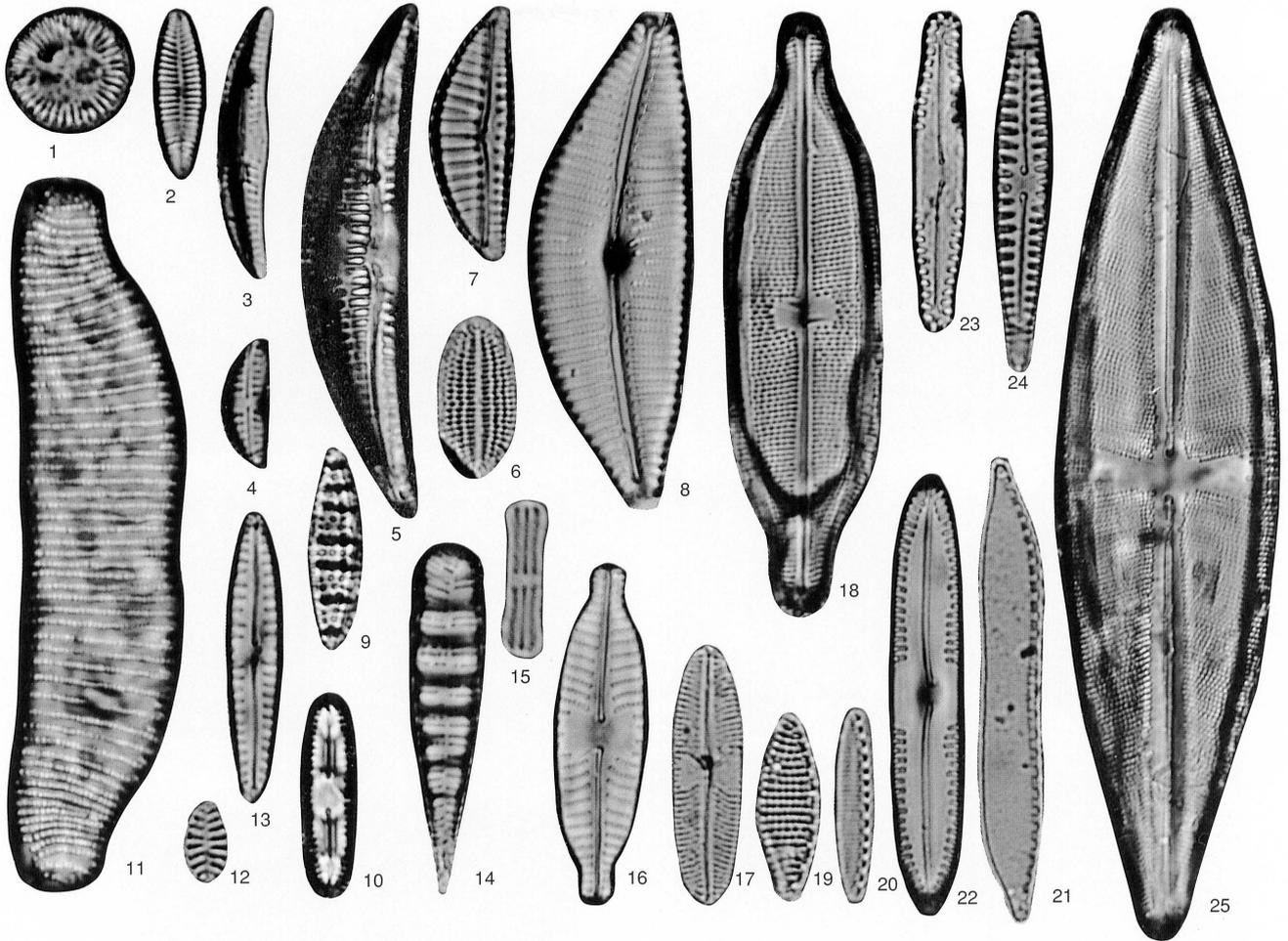
その他の遺物



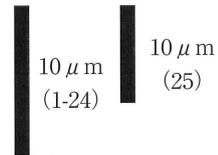
貝層出土動物遺存体



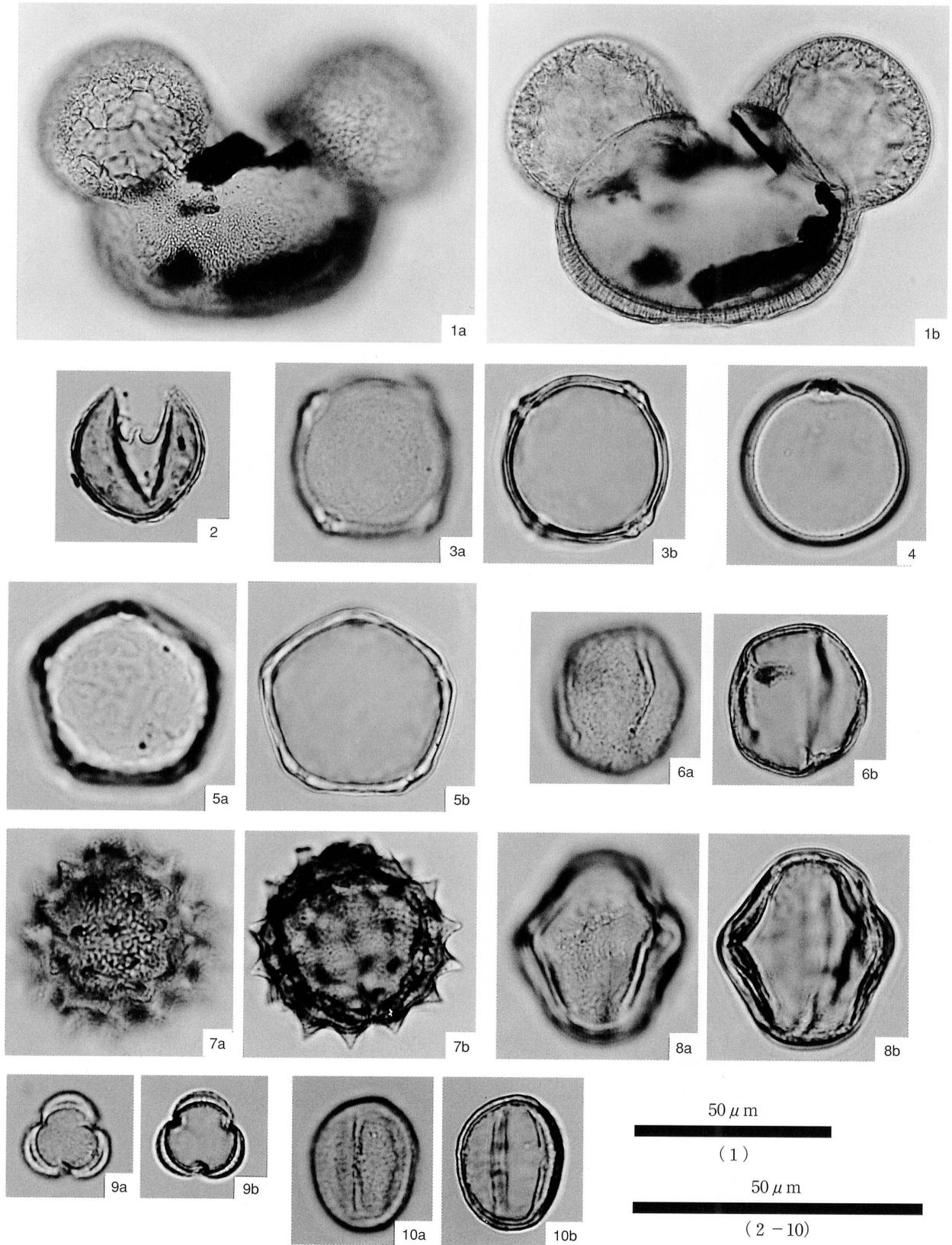
珪藻化石



1. *Paralia sulcata* (Ehr.) Cleve (016号; 3)
2. *Achnanthes tropica* Hustedt (016号; 3)
3. *Amphora inariensis* Krammer (016号; 3)
4. *Amphora pediculus* (Kutz.) Grunow (016号; 3)
5. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck (016号; 2)
6. *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (016号; 3)
7. *Cymbella silesiaca* Bleisch (016号; 3)
8. *Cymbella turgidula* Grunow (016号; 3)
9. *Denticula elegans* Kuetzing (016号; 3)
10. *Diatomella balfouriana* (W. Smith) Grevil (016号; 3)
11. *Eunotia praerupta* Ehrenberg (016号; 3)
12. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Grunow (016号; 3)
13. *Gomphonema angustum* Agardh (016号; 3)
14. *Meridion circularae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (016号; 3)
15. *Navicula contenta* Grunow (016号; 3)
16. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (016号; 3)
17. *Navicula pupula* Kuetzing (016号; 3)
18. *Neidium ampliatus* (Ehr.) Krammer (016号; 2)
19. *Nitzschia amphibia* Grunow (016号; 3)
20. *Nitzschia frustulum* (Kuetzing) Grunow (016号; 3)
21. *Nitzschia brevissima* Grunow (016号; 3)
22. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (016号; 2)
23. *Pinnularia subcapitata* Gregory (016号; 3)
24. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange - Bertalot (016号; 3)
25. *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* Meister (016号; 2)



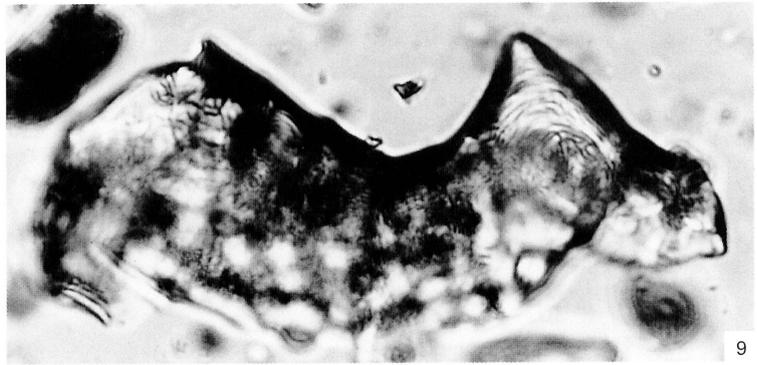
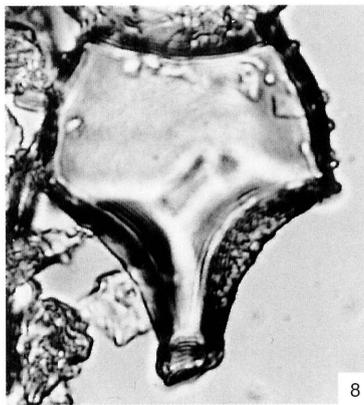
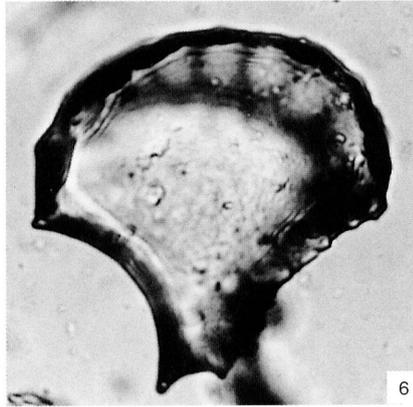
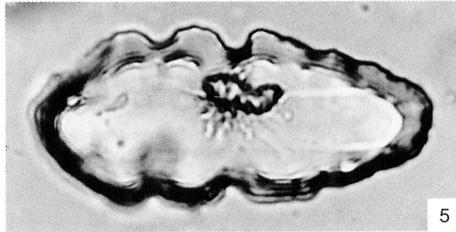
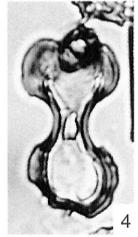
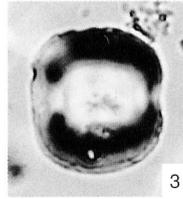
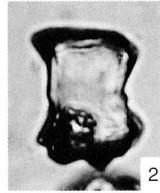
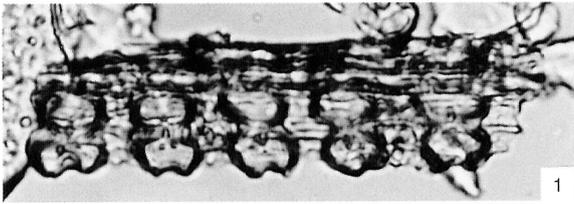
花粉化石



- 1. モミ属 (016号; 3)
- 3. クマシデ属-アサダ属 (016号; 3)
- 5. ニレ属-ケヤキ属 (016号; 3)
- 7. キク亜科 (016号; 3)
- 9. ヨモギ属 (016号; 3)

- 2. スギ属 (016号; 3)
- 4. イネ科 (016号; 3)
- 6. コナラ属コナラ亜属 (016号; 3)
- 8. ミズキ属 (016号; 3)
- 10. コナラ属アカガシ亜属 (016号; 3)

植物珪酸体



50 μ m

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (SPS-S'; 10) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (SPS-S'; 9) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (SPS-S'; 9) | 4. ススキ属短細胞珪酸体 (SPS-S'; 10) |
| 5. オオムギ族短細胞珪酸体 (SPS-S'; 10) | 6. イネ属機動細胞珪酸体 (SPS-S'; 9) |
| 7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (SPS-S'; 9) | 8. シバ属機動細胞珪酸体 (SPS-S'; 10) |
| 9. イネ属穎珪酸体 (SPS-S'; 9) | |

報告書抄録

ふりがな		むらかみかわほりいせき						
書名		村上川堀遺跡						
副書名								
巻次								
シリーズ名		財団法人 市原市文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第67集						
編著者名		小川 浩一						
編集機関		財団法人 市原市文化財センター						
所在地		〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地				TEL 0436 (41) 7300		
発行年月日		2000年3月9日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらかみかわほりいせき 村上川堀遺跡 (第1次)	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 むらかみ あざ かわほり 村上字川堀 1628-1地先他	12219	セ213	35度 29分 14秒	140度 6分 27秒	19951120) 19960205	649m ²	市道35号 線改良工 事に伴う 埋蔵文化 財調査
むらかみかわほりいせき 村上川堀遺跡 (第2次)	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 そうじゃ 惣社1646-4他	12219	セ250	35度 29分 15秒	140度 6分 30秒	19970801) 19970811	190m ²	
むらかみかわほりいせき 村上川堀遺跡 (第3次)	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 むらかみ 村上2786-2の 一部	12219	セ260	35度 29分 12秒	140度 6分 24秒	19980121) 19980210	560m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
村上川堀遺跡	集落跡	弥生時代	土坑 1	弥生土器				
		古墳時代	溝 1	土師器・須恵器				
		奈良・ 平安時代	掘立柱建物跡 4 土坑 3 井戸状遺構 2 溝 2	土師器・須恵器 石帯		8世紀中葉の掘立柱 建物跡を検出。		
		中・近世	地下式塋 2 道路状遺構 1 方形区画 1 井戸状遺構 1 溝 7 掘立柱建物跡 1	中世陶磁器 近世陶磁器		貝が投棄された地下 式塋を検出		

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第67集

市原市村上川堀遺跡

平成12年3月1日 印刷

平成12年3月9日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 市原市道路建設課

財団法人 市原市文化財センター

〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436 (41) 7300

印刷 株式会社 弘文社

千葉県市川市市川南2-7-2

TEL 047 (324) 5977